

「僕の不幸は問題ぢやありません。」

「女も幸福にはなれない。望まれもしないけれど。」

「あの女は望んでもあません。」

「わかつてるよ。だけど人生は……」

「え、人生は？」

「それとはちがつたものを要求してるよ。」

「いや、しなければならぬことを要求してるだけです。」

かう言つてネフリユードフは、眼や口許にいくらか小皺が寄つてゐても、まだ色艶を失はぬ姉の顔を眺めた。

「私にはわからない。」彼女はまた溜息を洩らした。

「可哀さうな姉！ どうしてこんなに変つただらう？」とネフリユードフは考へた。結婚前の彼女を思ひ出して當時がなつかしくなつた。

そこへ、ラゴージンスキイが、頭を反らし胸を突き出し、いつもの軽い足どりで部屋へ這入つて来た。眼鏡と禿頭と黒い顎鬚とが、きら／＼光つた。

「やあ、御機嫌よう。」彼は、言葉にわざとらしく力をこめて言つた。

「話の邪魔になりやしませんでしたか。」握手を済まし肘掛椅子にとつかりと腰を下してから彼は言

つた。「い、えちつとも。僕は自分の言つたり爲たりすることを誰にも隠さない主義ですから。」

この男の毛むくじやらな手を見、鷹揚に氣どつた聲を聞くと、たちまち、落ちついた氣分が消えてしまつた。

「今、この人の計畫のことを話してましたの。」ナターリヤは、かう言ひながら急須を取上げた。「あなた、お茶は？」

「注いでおくれ。ところで何か特別の御計畫がおありなんですか。」

「何、僕が責任を負はなきやならぬ女が、シペリヤ送りときまりましたので、僕も一緒に行かうといふのです。」ネフリユードフは答へた。

「一緒に行かれるだけでなく、それ以上の話があると聞きましたか。」

「え、女が承知すれば結婚するつもりであります。」

「ほう。差支へなかつたら、その動機を聞かせていたゞけませんか。よくわかりませんのでね。」

「動機といふのは、つまり、その女が……その女の墮落した最初の一步が……」彼は適當な説明が出来なくていら／＼した。「つまり、罪を犯したのは僕であるのに、罰せられたのは女であるといふのが動機です。」

「罰を受けたとすれば、その女にも罪があるでせう。」

「いや、まったくくないのです。」

ネフリュードフは必要でもない興奮を感じながら前後の事情を詳しく話した。

「なるほど陪審員側の軽率な答申に基づいて裁判官がまちがった判決を下したわけですね。そんな場合には元老院があるぢやありませんか。」

「ところが元老院では棄却しました。」

「棄却したとすれば、上訴の理由が薄弱だったにちがひない。」ラゴージェンスキイの言葉の裏には、眞理は判決の結果であるといふ意味を含んでゐた。「元老院は事件の本質にまで立ち入つて調査することは出来ないのです。若し本當にまちがひがあるのだつたら、皇帝陛下に請願なすつたらいい。」

「その手続きはしましたが、見こみはなささうです……。やはり罪のない者が刑を受けることになるんです。」

「罪のない者が刑を受けることはありませんよ。あつたにしても、ごく稀です。刑を受けるのは罪があるからです。」

「僕は反対だと思ひます。」ネフリュードフは姉婚に反感を覚えながら、「裁判所で有罪の判決を受けた大部分のものが無罪だと信じてゐます。」

「どういふ意味で？」

「文字通り罪がないと思ふのです。この女だつて毒殺なんかしないのに徒刑です。他にも何もしない

のに人殺しにされたり、放火犯にされたりしてゐるものが澤山ありますよ。」

「なるほど。むろん裁判上の過失は今までもあつたし、今後もあるでせう。人間の作つた制度ですから完全ぢやありません。」

「それにも自分の育つて来た環境の影響で、悪いことではないと思つて犯罪行爲をするものも澤山ありますが、これにも罪はないと思ひます。」

「いや、それはちがひます。どんな泥坊だつて物を盗むのが悪いことは知つてゐる。」

ラゴージェンスキイは相手をいらだたせるやうな薄笑ひを浮べて、いやに落ちつきはらつた調子で言つた。

「いや、知らないのです。みんなが盗んではいけないと言つて聞かせる。ところが、工場主は碌々給金を拂はないで自分たちの勢力を盗んでゐるし、政府は租税といふ形式でやはり自分たちの金を盗んでゐると彼等は思つてゐます。」

「おや、アナーキズムだな。」ラゴージェンスキイは義弟の言葉に、靜かに定義を下した。

「そんなことは知りませんが、僕は事實を言つてゐるんです。政府が自分たちの金を盗んでゐることを彼等は知つてゐます。すべての人間の共有たるべき土地をわれわれが占有してゐることを彼等は知つてゐます。彼等は地主によつて土地を盗まれたのです。ところが、この盗まれた土地から、小枝一本でも拾つたら、泥坊の悪名を着て監獄にぶちこまれてしまひます。泥坊とは、彼等の土地を盗んだ

ものであり、盗まれたものを取り返すのは自分たちの家族に對する義務であることを彼等は知つてゐます。」

「私にはわからない。わかつたところで賛成出来ない。第一、土地といふものは誰かの所有たるべきものです。いくら、あなたが土地を公平に分配したところで、明日になれば、また、勤勉で利口なもの、手に這入つてしまひます。」

ラゴージンスキイは、ネフリユードフを社會主義者扱ひにした。社會主義は土地の平等分割を主張するが、そんな分配方法は愚の骨頂であることを證明しようとした。

「土地を平等に分配しようとは思つてゐません、土地は誰の所有であつてもいけない。賣買したり貸借したりすべきものぢやありません。」

「しかし人間は生れながら所有の權利を持つてゐます。それがなければ土地にしたつて耕作する興味がありません。所有の權利を奪つて御覽なさい、われは野蠻時代へ逆戻りです。」彼は土地所有の慾望は土地所有の權利を證明するものだとの見地から堂々と自説を主張した。

「反對です。誰の所有でもなくなつたら、今日のやうな、乾草に寝てる犬ころみみたいは何もしない地主が、自分では耕作することも出来ない癖に、耕作しようとするものに土地の使用を許さない、といふやうなことがなくなりますよ。」

「しかし、どう見ても、あなたの説は狂氣じみてゐる。現代に於いて、土地の私有制度を廢止するこ



とが出来るとせうか。これはあなたの昔からのお道楽ですよ、率直に言ひますから氣を悪くしないで下さい。」ラゴージンスキイは青くなつて聲を震はした。この問題が一番彼の胸に觸れたらしかつた。「實際問題にかゝる前に、もつとよく熟考される方がいゝでせう。」

「僕の一身上のことに就いて言つてゐられるんですか。」

「さうです。われは先祖から譲り受けたものを子孫に傳へる責任があると思ひます。」

「しかし僕のしなければならぬことは……」

「いや、私は、私自身や私の子供たちのことを言つてるんぢやありません。子供は心配しなくても樂に食つてゆけるだけの財産が作つてあります。率直に言ふと、あなたのやりかたはあまりに一身上のことを考へてゐない。これは主義として賛成出来ません。もつとよくお考へになるがいゝと思ひます。讀む本にしても……」

「僕一身上のことは僕に委して下さいませんか。本の選擇なども自由にさせて下さい。」

ネフリユードフも青くなつて言つた。手が冷たくなつたので、口を噤んで茶を飲み出した。

三三三

マースロワが加はつてゐる護送隊は、翌日の午後三時發の汽車でモスクワを出發することになつてゐたから、ネフリユードフは、一緒に停車場に行くため、十二時前に監獄に出かけようと思つた。

姉のところから歸つて、着物や書類を整理してあるうちに、日記が眼についたので、ぼらくとあちこちを拾ひ讀みした。最後の一節には、かう書いてあつた。

「カチユウシヤは自分の犠牲的申込みを容れないで、彼女自身犠牲にならうとしてゐる。彼女は勝つた、自分も勝つた。彼女の心中に或變化が起りつゝあるらしいことは喜ばしい。彼女は魅つたと信じていゝだらうか。」

「自分は非常に苦しいと同時に非常に嬉しい氣持を味はつた。彼女の病院での不行跡を聞いて自分はたまらない苦しきだつた。こんな苦しきだらうとは思はなかつた。自分は嫌悪と憎悪とのこもつた口のきゝ方をしたが、考へて見ると、こんなことを自分は今までに幾度くり返したことだらう。自分は自分が厭になり、彼女が可哀さうになつた。するとまた喜ばしきを感じた。常に自己の眼にある梁木を見ることが出来たなら、どんなにわれわれは善い人間になることが出来るだらう。」

その後へ彼は書きつづけた。

「今日姉を訪ねた。勝手なことを言つたり振舞つたりしたので、重苦しい氣持が残つてゐる。しかし、どうにも出来なかつたのだ。明日は新生活への第一歩。今までの生活ともお別れだ。種々新しい印象があるけれど、まだはつきりまとまらない。」

翌朝、眼をさますと、ラゴージンスキイと議論したことを悔いた。「このまま出發してはいけない、行つて仲直りをし來よう。」

しかし時計を見ると、護送隊の出發に間に合ふためには、急がなければならぬ時刻だつた。そこであわて、支度をし、辻馬車を備つて監獄に出かけた。

護送隊出發の二時間後の汽車で立つことになつたので、彼は下宿の支拂ひも済まして別れを告げた。

三四

七月の暑い日だつた。むしくする前夜のほとぼりの冷めきらない敷石や壁やトタン屋根からは、動かぬ空氣の中に熱氣を發散した。たまに微風があつたが、それは塵や、ペンキの臭ひのこめた、むつとする空氣を送つて來るだけだつた。

通りには人影が少く、それも日蔭ばかりを歩いてゐた。道路人夫が日にやけた顔に汗を流しながら、焼けた砂地に金鎚で石をたゞきこんでゐた、白い夏服の巡査は、ピストルを腰に吊るして、道の真中に、いかにもだるさうに立つてゐた。時々、白い頭巾をすつぽり被り兩耳だけ突き出してゐる馬をつけた鐵道馬車が鈴を鳴らし、往つたり來つたりした。

ネフリュードフが監獄に着いた時には、まだ一行は出發してゐなかつた。朝の四時から開始した囚徒を受け渡しする面倒な仕事は片づいてゐなかつた。一行は男囚六百二十二名、女囚六十四名だつたが、それを一々囚徒名簿と對照し、病人と虚弱者とを選り出して護送兵に引き渡すのだつた。中庭の

日蔭には、テーブルの傍に、典獄と、二人の典獄補と、醫者と、その助手と、士官と、書記とがある。囚徒をつぎく呼び出して調査訊問した結果を紙片に書きつけてゐた。

日は次第にテーブルに射して来た。風がないのと囚徒のいきれとで苦しくてたまらなかつた。「やれく、いつまで経つても濟まないぢやないか。」脊の高い根ら顔の護送士官が、濃い口髭の中へ煙草の煙を吸ひこみながら言った。

「やりきれないね。どこからこんなに連れて来たんだ？ まだ大勢あるのかい？」
書記は名簿を調べた。

「男囚が二十四人、それに女囚が全部残つてゐます。」

「そんなところに立つて、どうしたんだ？ こちらへ来るんだ。」士官は、まだ調べが濟まないでまごまごしてゐる囚徒たちを呶鳴りつけた。彼等は列をつくつて、三時間以上も太陽に直射され順番を待つてゐた。

中庭でこんなことが行はれてゐる間、門の外では、囚徒の荷物や、歩けない囚徒を乗せて行く荷馬車が二十臺許り並び、傍にはいつもの通り銃を持った兵卒が立番をしてゐた。曲り角に囚徒の身寄りものが一かたまりになつて、若し出来れば別れの挨拶をし、錢別の品を渡さうと思つて待ちかまへてゐた。ネフリユードフもこの群の一人だつた。一時間ばかり立つてゐるうちに、門内から鎖の音、聲音、役人らしい聲、咳聲、大勢の咳聲などが聞えた。

それが五分間もつゞき、役人が門を出たり這入つたりして漸く出發の命令が下つた。雷のやうな響きを立て、門が開かれると、鎖の音が一層やかましく鳴り、白服の護送兵が大きな圓形を作つて並んだ。いかにも慣れきつた様子だつた。

囚徒は二列になつて出て来た。最初は重罪のもので、一樣に鼠色のズボン、背中に記號のある上着をつけてゐた。若者、老人、瘦せたのや肥つたのや、青いのや赤いのや、鬚のあるのやないのや、それから、ロシア人、鞑靼人、ユダヤ人——種々様々の男が、鎖の音も高く、両手を元氣よく振りながら、遠い旅に出るのだと覺悟してゐるらしかつた。出て来て、十歩くらゐも歩くと、立ちどまつて四列になつた。

つぎの連中には足に鎖はついてゐないが、手錠で二人づつなぎ合されてゐた。そして、やはり元氣よく出て来て四列になつた。それから女囚、自ら進んで一緒に行く囚徒の女房などが續いた。女囚の中には乳呑兒を抱いてゐるものも數人ゐた。

男囚は時々咳をしたり、ちよつと口を利いたりするきりで靜かだつたが、女囚の方は、のべつにしやべりつゞけた。

あ、マースロワが出て来た、とネフリユードフは思つたが、つぎの瞬間にはもう見失つてしまつた。大勢の中にまぎれこんでしまつて、眼に入るものは、人間らしい姿を失ひ女らしい姿を失つた鼠色の生きもの、群だけだつた。

56

人数調べはさつき済んだ筈なのに、護送兵はまた名簿と照し合せた。二三の男囚が動いたり場所を變へたりしたので、その度に數へかたをまちがへて初めからやり直した。

漸くそれが終つて護送兵が何か號令をかけると、病氣の男囚や、女囚や子供たちが先を争つて馬車の方へ突貫し、我勝ちに車内へ袋を投げこんで飛び乗った。乳呑兒が泣きわめいた。子供たちは場所争ひでたゞ喧嘩した。

四五人の男囚が士官の前に来て、帽子を脱ぎ、何か頼んでゐた。ネフリユードフは後で知つたが、それは馬車に乗せてくれと頼んでゐたのだつた。士官はその方を見向きもしないで煙草を吹かしてゐたが、突然、その一人の鼻面へ、ふとい腕を振りまはした。毆られるのかと思つて、その男は坊主頭をちぢめ、あわて、飛び退いた。

「ひどい目に會はしてくれろぞ！ 歩ける足を持つてゐるぢやないか。」士官はかう嗷鳴りつけた。しかしよぼくの年寄りだけを一人乗せることにした。この年寄りは喜んで、帽子を脱ぎ十字を切つて馬車に近づいたが、足についた鎖が重くて、體を持ち上げることが出来ないほど老衰してゐた。車内の女が手を引つ張つて乗せるのを、ネフリユードフは見えてゐた。

士官は軍帽を脱ぎ、額や禿頭や赤い頸筋の汗を拭いてから十字を切つた。

「進め！」

兵卒の銃がかちやく鳴つた。見送人が何が叫ぶと囚徒も何か叫んで答へた。女囚たちががや／＼

ざわめき立てた。そして白服の兵卒に護られた一隊は、鎖につながれた足を蹴立て、砂塵を上げながら出發した。先頭は兵卒、つぎに徒刑囚、流刑囚、町村組合から追放せられた囚徒、女囚といふ順序たつた。

最後に、袋や荷物や、歩くことの出来ない者を載せた馬車がやつて来た、一つの馬車の上では、服をぐる／＼固く結びつけられてゐる女が、時々何か悲しさに叫んでは、啜り上げてゐた。

三五

護送隊はかなり長かつたので、最後の、荷物や、歩けない者を載せた馬車が砂塵を上げはじめた頃には、先頭がもう見えなくなつてゐた。馬車の一番おしまひが動き出した時、ネフリユードフは待たして置いた辻馬車に乗りこんで、先頭に追ひつくやう馭者に命じた。男囚の中に自分の顔馴染のものが交つてはゐないか、また女囚の中にマースロワがあるにちがひないから贈つた品々が届いたかどうかを聞いて見るつもりだつた。

はげしい暑さで、それに風がなかつた。千人からの囚徒の立てる砂塵が舞ひ上つて、街の真中を動いて行く一隊を包んでしまつた。足が早いので、のろ／＼したネフリユードフの馬車で追ひつくにはかなり時間がかつた。見知らぬ不気味な恐しい生きもの、群、——同じ服、同じ靴をつけ、元氣を

して、同じ不可思議、不自然な状態に置かれてゐるのを見ると、ネフリユードフには、それが人間ではなく、言はゞ一種奇怪な生きものであるとしか思へなかつた。しかし、彼等の中に、殺人犯のフヨードロフと、道化もの、オホーチンと、嘗てネフリユードフの助力を求めたことのある浮浪人となを發見したので、その印象はたちまち消えてしまつた。

囚徒たちは、傍を追ひ越して行く馬車を眺め、中のネフリユードフを眺めた。フヨードロフは彼を認めたといふ合圖に首を後に反らし、オホーチンは眼ばたきをして見た。しかし反則になると思つたらしく、頭を下げて挨拶はしなかつた。

女囚の群に追ひつくと直ぐにマースロワを發見した。彼女は二列目にゐた。その列の一番端にゐるのは足の短い、黒腫の、顔のみにくい例の洒落女、そのつきは足を重さうに引きずつて歩いてゐる身持ち女、三番目がマースロワだつた。彼女は袋を背負ひ、落ちついた覺悟の様子で、眞正面を見つめてゐた。四番目は若くて美しいフヨードシヤで、元氣よく歩いてゐた。

ネフリユードフは馬車を降りて近づいた。品物は届いたか、その後氣分はどうかなどと訊くつもりだつたが、たちまち護送士官が認めて駈けて來た。

「いけません。近寄ることは禁じられてゐます。」と嘯鳴りつけた。しかし、ネフリユードフだとわかると（監獄内のものは今では誰でも彼を知つてゐた）敬禮をして附け加へた。「今はいけないのです。停車場へ着くまでお待ち下さい。こゝでは許されません……おくれちやいかなぞ、歩けく。」

士官は一行を嘯鳴つて置いて、駈足で元の位置にかへつた。新しい長靴が、びか／＼と光つた。

ネフリユードフは馭者に後からついて來るやうに命じて歩き出した。行列は至るところ、憐憫と恐怖との入り交つた視線をもつて迎へられた。馬車の人々は首を突き出して見送り、歩行中のものはしばらく立ちどまつて茫然と見つめてゐた。金を寄附して行くものもあつた。（これは護送兵が受け取つた。）中には、催眠術にでもかゝつたやうに、行列の後をつけて歩いてゐたかと思ふと、急に棒立ちになつて、首を振り／＼見送るものもゐた。誰でも、門から、また扉から、人を呼び立てながら駈け出して來たり、窓から首を出して身動きもせずに見つめたりした。

ある四辻では、立派な馬車が、この行列のために立往生しなければならなかつた。その座席には夫婦と子供二人が掛けてゐたが、細君は青白い顔の瘦せた女で、明るい色の帽子を冠り、手に派手な傘を持ち、夫はシルクハットを冠つてゐた。女の子は花のやうに美しく、男の子は長いリボンのついた水兵帽を冠つてゐた。父親は行列にぶつからないやうに通り過ぎてしまへばよかつたと言つて馭者を叱りつけた。母親は傘を頬に當て、日射しと埃とを避けながら、さも氣持が悪いといふ風に、目をな

かば閉ぢ眉をしかめてゐた。

巡査は何とかして行列を止め、この立派な馬車を通してやらうと骨折つた。が、この一行には、いかなる金持の紳士のためでも犯すことの出來ない陰惨な威嚴とでも言ふべきもの、あるのを感じた。そこで巡査は、彼の富に對する敬意を示す爲に、唯擧手の禮をしただけで、萬一の場合には、この車

56

内の人々を保護するぞと言はん許りに、殿めしい顔付をして行列を睨みつけてゐた。たうとう、馬車は、別荘へ遊びに行く途中だったが、すっかり行列が通過するまで待つてゐなければならなかつた。この行列は一體何だらう？ 父母は説明してくれなかつたので、子供たちは、めい／＼に解釋したのである。女の子は、父母の顔つきから察して、これ等の人は父母や知り合ひの人々とは全然別個の、悪い種類の人間であり、かういふ取扱ひを受けるのが當然であると考へたから、たゞ恐いと思つただけで、行列が見えなくなると喜んだ。

が、瘦せた、ほつそりした顔の男の子は、眼はたきもせずに行を見つめながら、これとは違つた解釋を下してゐた。これ等の人も同じ種類の人間である。たゞ、してはならない何かの悪事をしなければならぬやうに誰かをしてしまつたのである、といふことを、神の啓示を直接受けでもしたかものと、この兩者を等しく恐しいものと感じた。

男の子は泣きたくなつたが、こんな場合に泣くのは恥づかしいと思つたので、懸命に我慢してそれを堪へた。

三六

ネフリユードフは囚徒たちと並んで足早に歩きつづけた。薄着をしてゐたが、それでも、まらな

く暑かつた。埃の立ちこめた、そよもしない蒸し／＼する空気が呼吸するのも苦しかつた。

四五町も歩いて彼はまた馬車に乗つた。そして昨夜の姉婚との争論を思ひ出さうとしたが、それは最早今朝ほどに彼を興奮させなかつた。囚徒の出發する時の光景、行列の通過する街々の光景、殊に

この暑熱、そんなもの、ために争論などは蔽ひかくされてしまつた。ある塀の傍の木蔭では、氷屋がしゃがんで、その前に、二人の小學生が立つてゐた。一人は角製の匙で氷をしゃくつて食べ、一人は氷屋が何か黄色いものをコップに入れてくるのを待つてゐた。

「何か飲みたいんだが、どこかにないかね。」

ネフリユードフは何か清涼水が欲しくなつて馭者に聲をかけた。

「そこにいゝ家があります。」

馭者は角を曲つて、大きな看板の出でゐる家へ案内した。帳場のうしろの肥つた亭主と、テーブルに凭れてゐた給仕とが、見慣れない客が這入つて來たのをじろ／＼見ながら註文を聞いた。ネフリユードフはゼルツェル水を命じて、窓からや、離れたところにある、汚い卓布のかゝつた小さなテーブルに向つて腰を下した。

二人の客が茶器と白い瓶の載つたテーブルを圍んで、額の汗を拭きながら何かしきりに、話してゐた。その一人が、ラゴージンスキイによく似てゐたので、ネフリユードフはまた例の争論を思ひ出し、彼とも姉とも會つてから出發したいと思つた。

「發車までに會ふことはとても出来まい。それよりも手紙にしよう。」

そこで彼は紙と封筒を取り寄せ、泡を立て、ある冷たい水を飲みく、何と書かうかと考へこんだ。が、考へは少しもまとまらず、手紙がどうしても書けなかつた。

「親愛なる姉上、昨日御主人と議論した重苦しい印象を残したまゝで、出發することは出来ません。」と、まづ書いたが、「さてつきに何と書かう？ 昨日言つたことを許してくれと書かうか。だが自分は思つたことをありのままに言つただけだ。さう書けば、自説を取り消したとあの男は思ふだらう。」

それにあの男が自分の仕事に干渉すると……いや、止さう……」

自分とあまり交渉のない男に對する憎悪が再びむらくと頭をもたげさうになつたので、彼は書きかけの手紙をポケットにしまひ、急いで勘定を済まして外に出た。そして馬車に乗つて護送隊を追つかけた。

唇はますますくひどくなり、敷石や壁土は苦しい呼吸をして喘ぎ、靴は焼けるやうだつた。馬車の漆塗りの泥よけに手を觸れた時、ネフリユードフはまるで火傷したやうに感じた。

馬は埃ッほい道を、蹄の音もだるさうに、のろくと歩き、馭者は居眠りばかりしてゐた。ネフリユードフは何を考へるでもなく、たゞぼんやり前方を眺めてゐた。

道が坂になつたところに大きな家があつて、その門前に黒山のやうな人だかりがして銃を持った兵卒が見張りをしてゐた。

ネフリユードフは馬車を止めた。

「どうしたんです？」彼は門番に訊いた。

「囚人がどうかしたんです。」

ネフリユードフは降りて人だかりに近づいた。敷石の上に、頭を足よりもだらりと下げて、胸の廣い、かなりの年の囚徒が横たはつてゐた。斑點だらけの兩手の指を廣げ、仰向けになつて、血走つた眼を空に見据ゑながら、大きな胸を時々波打たせて呻き聲を擧げてゐた。意地わるさうな巡査、行商人、郵便配達、番頭、日傘を持つた老婆、空籠を背負つた小僧などが、立つてそれを見てゐた。

「みんな體が弱つてゐますよ。何しろ監獄にぶちこまれてゐて、思ひきつて唇いこんな目に引つ張り出されるんですからね。」と、番頭らしい男がネフリユードフに話しかけた。

「死んでしまふんでせうか。」傘を持つた老婆が悲しさうな聲を出した。

「シャツを脱がしてやらなくちや。」郵便配達が言つた。

巡査は太い震へる指先を不器用に動かして赤く筋ばつた頸にまきついてゐるシャツの紐を解きにかつた。興奮し狼狽してゐたが、群衆を制する必要があると考へて、

「何だつて突つ立つてるんだ。風が通らなくて唇いぢやないか。」

「一應醫者に診察させて弱いものは残すのが當然だ。見すく殺しに連れ出すやうなもんだ。」番頭は法律の知識を振りまはすつもりで言つた。

「巡査はシャツの紐を解いて立ち上り、あたりを見まはした。」

「たかつちやいかん。見せものぢやないぞ。」と、ネフリユードフの方を同情を求めやうに見たが、相手が知らぬ顔をしてゐるので、今度は護送兵の方に向いた。しかし護送兵も巡査の當惑してゐる様子にも目もくれなかつた。

「何て亂暴な連中だらう。こんなにして人間を殺すつて法があるのか。いくら囚人だつて、やはり人間ぢやないか。」

群衆の中から今までは違つた聲がかう言つた。

「頭の方を高くして水を飲ませておやんなさい。」ネフリユードフが注意した。

「水は取りに行きました。」巡査は囚徒の體を抱へて少し引き起した。

「こら、なぜたかるんだ？」といふ嚴めしい呶鳴り聲が聞えて、びか／＼した制服、長靴の警部が、急ぎ足でやつて來た。

「退け／＼。たかつちやいかん。」

何でみんなが集まつてゐるのか、自分では知らなかつたが、漸く傍に寄つて死にかつた囚徒を見ると、ちやんと豫期してゐたらしく大きく頷き、靜かに巡査を振り返つた。

「どうしたんだ？」

巡査の説明によると、護送隊がこゝを通過する際に、この囚徒が倒れたのを士官は置き去りにする

やうに命じたといふのである。

「さうか、宜しい。警察へ連れて行かなきゃならんから辻馬車を呼べ。」

「門番が呼びに行きました。」

番頭らしい男はまた、「こんな暑い日に……」と、何か言ひ出した。

「お前の知つたことぢやないだらう。さつさと退いたく。」と警部は言つて睨みつけた。番頭は黙りこんでしまつた。

「水を飲ましてやらなきや。」ネフリユードフが口を出した。警部はじろりと睨んだが、別に何とも言はなかつた。そこへ門番が水を持つて來たので、巡査はだりとしてゐる頭を持ち上げ、口へ水を流しこまうとした。しかし囚徒にはもう飲む力がなくなつてゐた。水は顎鬚をつたはつてシャツを濡らしたゞけだつた。

「頭からぶつかける。」

警部の命令で、巡査はその通りした。囚徒は恐々と眼を大きく開いたが身動きさへしなかつた。

埃まみれの顔に水がざあと流れた。口は一定の間を置いて絶えずはあく／＼と喘ぎ、體は小さきみに震へてゐた。

「そこにある。あれにしよう。」警部はネフリユードフの乗つて來た馬車を指して、「おい、こつちへ來てくれ。」と馭者に言つた。

「お客があるんです。」馭者はいやな顔をして振り向きもしないで答へた。
「私のですが、お使ひになつても構ひません。代は私が拂ふよ。」と、後の方は馭者に向つて附け足した。

「さうですか。おい、ぐづくしないで、早く乗せろ。」

巡査と門番と護送兵が力を合して囚徒を抱き上げ、馬車に運んで坐らせようとしたが、手を離すと頭ががくりと垂れて座席から送り落ちてしまつた。

「寝かしとけ。」と警部は命じた。

「いや、このまゝで警察まで運びませう。」巡査は囚徒の横に坐り、その逞ましい腕で病人の體を抱へながら言つた。兵卒は囚徒の足を持ち上げ、馭者臺の下に伸ばしてやつた。

警部はあたりを見まはして、囚徒のバン菓子型の帽子が落ちてゐるのを拾ひ上げ、濡れて滴のたれてゐる頭に冠せてやつた。

「行け。」

馭者はむつとしたらしく頭を振つて馬車を進めた。ネフリードフは、その後からついて行つた。

三七

馬車は警察に来て、中庭のある扉の前でとまつた。

中庭には消防夫たちが袖をまくり上げて何かの車を洗ひながら大聲でしゃべつてゐた。數人の巡査が馬車を圍んで、死にかゝつた囚徒を運び出した。

囚徒は二階に運ばれた。ネフリードフも従つた。狭い汚い部屋に粗末な寢臺が四つ置いてあり、そのうち二つは病人が占領してゐた。頸に繃帶した口の曲つた男と肺病患者とだつた。

警部が警員助手を連れて這入つて來た。助手は囚徒に近寄つて、まだ柔くはあつたが、すつかり蒼ざめて冷たくなつた、斑點だらけの手を執つて脈を見た。やがて離すと、その手は既に死體になつてしまつた腹の上に力なく落ちた。

「呼吸が絶えました。」

助手はかう言つて、規定通りにするため、囚徒の濡れたシャツを廣げて、高く盛り上つた黄色い動かぬ胸に、自分の耳を押し當てた。あたりのものは黙つて見てゐた。助手は體を起して首を傾げ、開いたまゝ、ちつとしてゐる瞳に指を觸つて見た。

警察病室に收容されてゐる狂人が下着と靴下一つでのこゝ這入つて來て、「恐かあねえぞ、恐かあねえぞ。」と助手の方に唾を吐きかけながら嘔鳴り立てた。

「どうです？」警部は訊いた。

「え、死體室へ運ばなきやなりません。」

「本當ですか。」

「手早くオマエした。」財手は列體の胸をシ、ツで隠しながら、一けれども念のため、マトウェイを呼んで見させることにしませう。」と言つて死體を離れた。

「死體室に運んで行け。」と、警部は命じた。

「それから君は、」と、すつと囚徒に付き添つてゐた護送兵に向つて、「事務所に行つて報告書に署名してくれたまへ。」

「承知しました。」

巡査は死體を階下に運んだ。ネフリユードフもついて下りようとしたが、例の狂人に引き止められた。

「君は悪黨の仲間ぢやねえだらう。ぢや煙草を一本寄越せ。」

ネフリユードフは一本出してやつた。すると狂人は眉毛をびく／＼震はせて恐しく早口に、皆が催眠術で自分をどんなに苦しめてゐるかといふことを、べらく／＼としやべり出した。

「失禮。」ネフリユードフはそれに耳を留めないで、どこに死體を持つて行つたかを知らうと思つて中庭に出た。

巡査たちは中庭を過ぎて穴倉の入口にかゝつてゐた。そこへ行かうとすると、警部が呼び止めた。

「何か御用ですか。」

「いゝえ。」

「いゝえ？ では行つて下さい。」

ネフリユードフは引き下つて馬車のところへ行つた。馭者は居眠りをしてゐたので、それを起して停車場へ急がせた。

百歩ばかりも行かないうちに、銃を擔いだ護送兵に守られた荷馬車に出會つたが、その上にも既に死んでしまつたらしい囚徒が横たはつてゐた。ネフリユードフは馭者の肩をそつと叩いた。

「ここでもやつてゐますね。」馭者は馬を止めて應じた。

ネフリユードフは馬車を下り、荷馬車について、また警察署の中庭に這入りこんだ。警部は荷馬車に近づいて、いま／＼しきうに首を振つた。

「どこで拾つて来た？」

「ゴルバトーフスカヤ街です。」と一緒に来た巡査が答へた。

「囚徒か。」横にゐた消防部長が訊くと、「さうだ。今日は二人目だよ。」と警部が言つた。死體は前と同じやうにして二階の病室へ運ばれた。ネフリユードフは催眠術でもかけられたやうに後に従つた。

「何か御用ですか。」

巡査に咎められたが返事をしないで病室に侵入した。

E、E、E、E、Eの音の響きを聞きながら、ネフリユードフに貫つた煙草を食ふやうに吹かしてゐたが、

「おや、歸つて来たな。」と言つて、げらく笑つた。しかし、死體を見ると、急にいやな顔をして、
「またか、もう澤山だよ。俺は子供ぢやねえぞ、おい、さうだらう？」

ネフリュードフは、さつきは帽子に蔽はれてゐた死顔を漸く見ることが出来た。この囚徒は顔も體も美しく、年も働き盛りだつた。

この男に高尚な精神生活をする可能性が失はれてゐることは誰にも想像されたが、體だけは、その手や鎖につながれた足などの骨組にしても、均齊のとれた逞ましい筋肉にしても、いかにも立派なものであつた。美しい強い敏捷な男だつたことを一目で頷くことが出来た。

而もこの男はかうして殺されてしまつて、むろん、誰からも人間としては惜しまれなかつた。いや、よく發達した立派な動物としても惜しまれなかつた。その死によつて人々の起す氣持といへば、たゞ死體が腐敗しないうちに、どこかに早く片づけなければならぬ、厄介なことだといふ不平感のみだつた。

醫者と助手と、後から署長とが這入つて來た。醫者は前に助手がやつた通り脈を見たり胸に耳を當てたりしたが、立ち上つてズボンの皺を伸ばした。

「完全に死んでゐます。」

背の低い緒ら顔の圓々と肥つた署長は、いつもやる癖で空氣を一杯腹に吸ひこんで吐き出しながら、護送兵に向つて訊いた。

「どこの監獄だね？」

護送兵は説明してから足についてゐる鎖を指した。

「これは外してやらう。幸、鍛冶屋があるから。」

署長は頬をふくらまし、しづかに呼吸を吐き出しながら戸口の方へ行つた。

「どうしてこんなことになつたんでせう？」ネフリュードフは醫者に訊いた。

醫者は眼鏡越しに彼を見て、「どうしてこんなこと、おつしやると、——どうして日射病になつて死ぬるかとおつしやるんですか。それは、冬中、運動もせず日の目も見ないで監獄にとちこめられてゐたものが、急に、引つ張り出されて太陽に直射されるからです。殊にこんな暑い日に、大勢がかたまつて歩いては、空氣も何も通しませんからね、日射病が起るのは當然ですよ。」

「ぢや何故こんな日に護送するんでせう？」

「それは護送する人に訊いて下さい。だが、あなたは一體どなたです？」

「私はたゞ通りがりのものです。」

「あ、さうですか。では失禮、暇がありませんから。」

醫者はまたズボンの皺を伸ばしながら、病人の寢臺の方に行つた。

「どうだい、具合は？」醫者は頭に繻帯した口の曲つた青白い男に聲をかけた。

ネフリュードフは外に出て、再び停車場へ向つた。

停車場に着いて見ると、護送隊はもう窓に格子のはまつた汽車に乗りこんでゐた。見送りに來てゐるものもかなりあつたが、みんなブラットフォームに立つてゐるきりで、汽車に近づくことを許されなかつた。

この日、護送兵は實に忙しかつた。停車場まで來る間に、日射病で死んだものが、ネフリュードフの見た以外に三人あつた。そのうち、一人は近くの警察に收容され、二人は停車場まで來て倒れてしまつた。(これは事實としても、一八八〇年代、モスクワにあつたことで、ブツイルスキイ獄からニゼゴロドスカヤ驛に護送の途中、一日に五人の囚徒が日射病のために斃れた)護送兵たちは自分たちの手當如何によつては、この五人の囚徒が生命を取りとめたかも知れないといふことに就いては少しの心配もしてゐなかつた。いや、心配どころか、こんな場合でも、法の規定した通りにしなければならぬといふこと以外に何も考へてゐなかつた。死體を指定の場所に移したり、その書類や所持品をその筋へ届けたり、護送兵に持つて行かなければならぬ名簿からその名前を除いたり——そんなことはすべて、殊にこの暑い日には、たまたまなく苦しいことだつた。

護送兵たちがこんなことに忙殺されてゐたため、それが終るまでは、面會を願ひ出でゐるネフリュードフ以下のものが、列車に近寄るのを許されなかつたのである。しかし、ネフリュードフは下士に心づけをしたので直ぐに許された。が、下士は、上官の眼に觸れぬやう、さつさと話を済まして來るやうにと注意した。

車輛は全部で十八、指揮官用の一輛以外は囚徒の詰めたつた。その窓下を通りながらネフリュードフは彼等が何を話してゐるか、それに耳を澄ました。どの車輛でも鎖の音や、がや／＼やかましい意味のない話し聲は聞えて來たが、途中で日射病のために死んだものゝことは誰も話してゐる容子がなかつた。話題は大抵背負つてゐる袋のこと、飲料水のこと、座席のことなどだつた。

ネフリュードフは車輛の一つを覗いて見た。そこでは二人の護送兵が多勢の囚徒たちの手錠を外してゐるところだつた。囚徒が兩手を高く差上げると一人が鍵でガチャリと外し一人がその外した手錠を集めてまはつてゐた。

男囚の車輛を全部過ぎて、女囚のところへかゝつた。その二輛目からは、「お、お、神様、神様！」といふ女の悲鳴が聞えて來た。

ネフリュードフはそこも過ぎて下士の教へてくれた第三輛目の窓下に寄つた。顔を近づけると、汗臭い、熱のこもつた空氣が鼻を衝いて、甲高い女の話聲が、はつきり聞えて來た。

どの座席にも、獄衣に白いジャケツを着て赤く汗ばんだ、おしやべりの女囚が一杯だつた。窓下にあらはれたネフリュードフの顔はたちまち彼女等の視線を惹いた。近くのもののは話をやめて立ち上つた。マースロワは白いジャケツのまゝ、頭巾も取つて、向う側の窓に掛けてゐた。にこ／＼したフ

ードシャがその少し前に坐つてゐて、ネフリュードフの姿を見ると、肘でちよつとマースロワをついて窓の方を指した。

マースロワは急いで立ち上り、眞黒な髪を頭巾で蔽ひながら、赤く火照つた顔に微笑を見せて窓際に寄つて来た。

「あゝ、お暑いですわね。」彼女は格子につかまつて言った。

「品物は受取つた？」

「えゝ、ありがたう。」

「他に欲しいものはないかね？」

その窓からはかまどから来るやうな蒸し／＼する空気が絶えず流れ出してゐた。

「別に欲しいものもないわ、ありがたう。」

「何か飲みものが頂けるといゝね。」と、フールドシャが口を出した。

「さうだつた。飲みものが頂けるといゝけれど。」と、マースロワも思ひ出したらしく言った。

「だつて飲みものはくれるんだらう。」

「少しはくれますけれど直ぐなくなつちまふわ。」

「ぢや直ぐに頼んであげよう。ニージュニイに着くまではもう會へないね。」

「あら、あなたもいらつしやるの？」

マースロワは、全然豫期しなかつたらしく言った。そして、嬉しさうにネフリュードフの顔を見つめた。

「つぎの汽車で行くよ。」

マースロワは何も言はないで、たゞ深い溜息を洩らした。

「旦那、十二人死んだちうが本當だかね？」と男のやうな聲で年寄りの女囚が訊いた。つまり、これはコラブリヨワだつた。

「十二人とは聞かないよ。僕の見たのは二人だつた。」

「十二人殺してしまつたと言ふだよ。そねえなことをして罰を食ふこともねえのかね、畜生めが！」

「女の方ではどうだつた？ 別に倒れたものもあなかつたかね？」

「みんな元氣でございましたよ、旦那。」小柄の女が言つて笑ひながら、「たつた一人子供を生みかけてうん／＼唸つてる女があるやすだ。ほれ、そこに……」と言つて、さつきから變な聲の聞えて来る隣りの車輛を指した。

マースロワはその時、いかにも嬉しさうに、口許に溢れる微笑を抑へながら、

「さつき何か欲しいものはないかつておつしやつたわね。ではあの女を、あんなに苦しんでるんですから、後廻しにして貰ふことは出来ないものでせうか。話して頂いて若し……」

「あゝ、話して見よう。」

「それから、も一つ——このフォードシャを、御主人のタラスさんに會はして上げるわけに參りませんか。タラスさんも、御一緒にいらつしやるんでせう？」

「もしく、話してはいけません。」と、護送兵が聲をかけた。さつき許可を與へた男ではなかつた。ネフリユードフは、そこを離れて、お産をしかつてゐる女のことや、タラスのことなどを頼んで見ようと思つて士官を探しまはつた。しかし探しあてることも出来なかつたし、又護送兵たちから満足な返答も得られなかつた。彼等はそれ／＼に忙しくて、或者は囚徒をあちこち引つ張りまはしたり、或者は食料品の準備をしたり、或者は荷物を車輛に運びこんだり、或者は士官連について婦人たちの世話をしたり、などしてゐたため、誰もネフリユードフの言ふことに氣持のいい返事をするものはなかつた。

第二回目のベル（註。ロシアでは發車前十五乃至二十分で第一回のベルが鳴り、十分前に第二回のベルが鳴る。むろん途中の驛では、そんな長い間隔はない）が鳴つた時、ネフリユードフは漸く護送士官を探し當てた。士官は短い手を伸ばして口髭を撫でまはしながら、肩を怒らせて何か下士を叱りつけてゐるところだつた。

「何の御用ですか。」彼はネフリユードフに向き直つて言つた。

「女囚の中にお産をしかつてゐる女がありますが、あれを後廻しに……」

かう言ひ棄て、士官は手を振り／＼自分の車輛の方に駆けて行つた。

その時、呼子の笛を持った車掌が通つた。プラットフォームに見送る人々の中と女囚の車輛の中とから嘸り泣く聲と祈禱の聲とが聞えて來た。

ネフリユードフはタラスと並んで、列車の動き出すのを眺めた。マースロワは窓際に立つてゐたが彼を見て悲しい微笑を洩らした。

三九

ネフリユードフの乗る列車が出るまでにはまだ二時間あつた。その間にも一度姉を訪問するつもりだつたが、朝から種々の事件にぶつかつて興奮もしてゐたし疲れてもゐたので少し休むことにした。ところが、一等休憩室の長椅子に腰を下すと直ぐに眠氣を催して、思はず横になり手枕をしたまゝ寢こんでしまつた。

手にナブキンを持つた給仕がネフリユードフを起しに來た。

「もしく、ネフリユードフ公爵ではございませんか。御婦人の方が探していらつしやいます。」

ネフリユードフは飛び起きた。眼をこすりながら、今どこにあるのか、朝からどんなことがあつたかを思ひ出した。

囚徒の行列、日射病で倒れた死體、窓に格子のはまつた護送列車、その中の女囚、出産に苦しんで

あつた女、窓から悲しげな微笑を見せた。ミスロワ、彼はそんなものを思ひ浮べたが、今、眼の前の光景はすつかり一變して、酒瓶、花瓶、燭臺、ナイフ、フォークなどの載つたテーブルがあり、そのまはりを幾人かの給仕がぐる／＼まはつてゐた。部屋の前には戸棚、その前に果物籠や酒瓶などを置く臺、それから賢子、そこに立つてゐる大勢の客の背中などが、つき／＼に眼に映じた。

氣がついて見ると室内にゐるものは皆、入口の方を珍らしさうに眺めてゐた。なるほど、そこには、薄い網のやうなものを頭から冠つた貴婦人を腕椅子に載せて運んで行く一行があつた。椅子の前を持つた下僕にも、後を持つた金筋入りの帽子を冠つた門番にも、ネフリユードフは見覚えがあつた。椅子のつきにエプロンをかけた綺麗な小間使が、包みや傘や圓い革箱などを持つてつき、それから、旅行帽を冠つたコルチャーギン公爵、令嬢のミッシイ、その従兄のミーシャ、外交官のオーステン、最後に醫者といふ順序でやつて來た。この一家は都會に近い所領から公爵夫人の妹の所領の方へ引越して行くところだつた。

椅子を運んでゐる連中と小間使と醫師とは見物に好奇心と敬意とを感じさせながら婦人待合室に入つた。が、老公は残つてテーブルに就き、給仕に料理を命じた。ミッシイとオーステンもさうするつもりしかつたが、丁度その時、知り合ひの婦人が入口にあらはれたので、その方へ挨拶に行つた。婦人といふのはつまり、ネフリユードフの姉のナターリヤだつた。

ナターリヤは、アグラフェーナ・ペトロウナを連れて遣入つて來たが、偶然にミッシイにも合ひ、弟をも探し當てることが出来た。そこで、弟にはたゞ顔を見て見せたきりで、まづミッシイに近づいた。が、接吻を済ますと直ぐに弟の方へ來た。

「やつと探し當てたよ。」彼女は言つた。ネフリユードフは立ち上つて、ミッシイ、ミーシャ、オーステンに會釈し、二言三言話した。ミッシイは、今までの別荘が焼けたから仕方なく叔母のところへ行くのだと言つた。オーステンはその火事に就いて何か話し出した。

ネフリユードフはそれを聞き流して姉の方を向いて言つた。

「よく來て下さいましたね。」

「さつきから來てたんだよ。アグラフェーナも一緒。」

アグラフェーナは話の邪魔にならないやうに、少し離れて立ち、やさしい品位と、いくらかの狼狽とを見せながら挨拶した。

「方々お探ししましたわ。」

「こゝで眠つちやつたもんだから。よく來てくれましたね。」ネフリユードフは同じことをくり返して、「姉さんには手拭を書きかけたんですよ。」

「本當？ 何を書いたの？」

ミッシイたちは姉弟の間に内密な話をはじめつたのに氣づいて場を外した。ネフリユードフたちは窓際の天鵞絨の長椅子に並んで腰かけた。

「昨日は一旦歸つてから、また出懸けて行つてお詫びしようと思つたんです。が、ラゴージンスキイがそれをどう思ふかと考へたもんですから。」とネフリユードフは言ひ出した。「少し無様に言ひ過ぎたので氣になつて困りましたよ。」

「私にはわかつてゐたよ。お前もそんなつもりぢやなかつたんだらう。ねえ。」ナタリーヤはかう言つて手を弟の手の上に置き、眼に涙を浮かべた。

言葉は曖昧だったが、ネフリユードフはその意味をはつきり理解した。そして、心を打たれた。姉の言葉には、彼女を支配してゐる夫に對する愛の他に、弟に對する愛を非常に重大視してゐること、したがつて、夫と弟との間の誤解は、彼女にとって、大きな苦痛である。といふ意味を含んでゐた。

「ありがたう。」ネフリユードフはかう言つてから話題を變へた。「今日、僕は大変なものを見て來ましたよ。二人の囚徒が殺されましてね。」

「殺されたつて？ どうして？」

「え、殺されたんです。この炎天に引つ張りまはされたので、日射病になつて倒れてしまひました。」

「まあ！ 今日？ さつき？」

「え、さうです。僕はその死體を見ました。」

「何故殺したの？ 誰が殺したの？」

「無理に引つ張りまはした連中が殺したんです。」

ネフリユードフは、姉がこの問題を、夫と同じ眼で見えてゐるのを感じて、少しぢり／＼しながら言つた。

「可哀さうに！」と言つて、アグラフェーナが寄つて來た。

「さうです、僕たちは彼等不幸な人間が、どんな取扱ひを受けてゐるか、全然考へて見たこともないので。が、知つて置く必要がありますよ。」

ネフリユードフはかう言つて、コルチャーギン公爵の方を見たが、恰度、ナブキンを胸に垂らし、酒瓶の前に置いて坐つてゐる公爵の視線とぶつかつた。

「ネフリユードフ君、こつちへ來て氣つけに一杯やらないか。長旅の前にはこれが一番だよ。」

ネフリユードフはそれを辭退して眼を逸らした。

「これからどうするつもり？」ナタリーヤは訊いた。

「僕の出来ることは全部やるつもりです。はつきり見當はつかないが、やらなきやならぬことがあることを感じてゐます。」

「その氣持はよくわかるよ。ところで、あの方はどうなつてるの？」

彼女は微笑を含んでコルチャーギンの方を眼で指した。

「すつかり關係はありません。お互ひに未練はないと思ひます。」

「私は残念だと思ふよ。ミッシイといふ方も好きだけれど……そんなわけなら仕方がないねえ、お前も東縛されたくはないだらうから……」彼女は控へ目に言つた。「が、何故シベリヤなんかへ行くんだらう？」

「行かなきゃならんから行く、たゞそれだけです。」ネフリユードフはこの話をうち切りたいといふ風に、きつぱりと言つた。

しかし直ぐに自分の冷淡さを恥ぢて、「何故考へてあることをすつかり話さないのだ？ 話してアグラフェーナにも聞かしてやつたらいいぢやないか。」と思つた。そこで改めてシベリヤ行きの決心を話した。

「姉さんはカチュウシヤと結婚しようといふ僕の意志を氣にしてるんでせう？ むろんそのつもりだつたのですが、女の方で拒絶してしまいました。」こゝを話す時はいつもさうであるが、聲が震へを帯びて来た。「カチュウシヤは僕の犠牲的申込みを受けたくないといふのです。いや、彼女自身がその境遇としては過ぎる程の犠牲を拂はうとしてゐるのです。たとひそれが一時的の氣持であらうとも、僕としては、その犠牲を受けることは出来ません。だから、彼女と一緒に、行くところへはどこへでも、ついて行くつもりです。そして出来るだけ彼女の苦痛を軽くしてやりたいのです。」

ナターリヤは何も言はなかつた。アグラフェーナは何か聞きたげな視線をナターリヤに送つて首を振つた。

婦人待合室から家僕のフィリップと門番とが公爵夫人を運んで来た。夫人はネフリユードフを招いて哀れつばい調子で言つた。

「きびしい暑さですね。これではたまりません。殺されてしまひさうです。」

それからロシヤの氣候の恐いことを少し話して、今度は非遊びに来てくれと言つた。

彼等の一行は右の方の一等車の方へ曲つた。ネフリユードフは手荷物を持つた赤帽と、袋を背負つたタラスと一緒に左の方へ行つた。

「これは僕の連れです。」ネフリユードフはタラスを姉に紹介した。

「三等ぢやないんだらう？」姉は訊いた。

「三等です。この方がいゝのです。タラスと一緒にですからね。」彼は言つた。「それから、クヂミンヌコエ村の方の土地は百姓にやつてはありませぬから、若し僕が死んだら、姉さんの子供に相續させてやつて下さい。」

「そんな話は止ませうよ。」

「土地をやつてしまつたとしても、他の財産がそつくり子供たちのものになります、多分僕は結婚しないのでせうし、したところで子供はないのでせうから。」

「そんな話はしないで言つたら。」とナターリヤは言つたが、事實は、この話を喜んで聞いたらしかつた。

一等車の前には人だかりがして、公爵夫人が運びこまれたのを眺めてゐた。車掌が扉を一つく閉めながら遅れた客を急ぎ立てた。

ネフリユードフは一旦暑苦しい車内に這入つたが、直ぐに後の昇降口に出て來た。ナターリヤはアグラフエーナと竝んで、何か言ふことはないかと考へてゐた。「手紙をおくれ」といふ別れる時のきまり文句は、平生から弟と笑ひ話の種にしてゐたので言ふ氣になれなかつた。それに、財産だの相續だのといふ話が一次的に姉弟愛の氣持をぶちこはしたので、二人とも他人同志のやうな氣がしてゐた。それで汽車が動き出すと、ナターリヤはほつと安心した。悲しさうな、しかし優しい視線を投げて、彼女はたゞ、「さやうなら、さやうなら。」とだけ言つた。それだけしか言へなかつた。

しかし發車してしまふと、弟と交した話をどんな風に夫に傳へていゝかと考へて、やゝ心配さうな、生真面目な顔つきになつた。

ネフリユードフも、彼女に對しては懐かしい氣持を感じ、別に何も隠し立てすることもなかつたのであるが、一緒にゐると、重苦しく、落ちつかないので、早く別れたかつた。嘗て自分とあんなにまで親しくしてゐたナターリヤは既に存在しない。そこには、奇怪な、不愉快な、毛むくじやらの男の奴隷があるばかりだつた。彼女の夫が特に興味をもつてゐる問題——つまり、土地の處分と財産相續のことを自分が話し出した時に、姉の顔は確かに明るく輝いた、それを見て彼は、はつきりと現在の姉の正體を見たと思つた。そして悲しくなつた。

四〇

焼けつくやうな夏の太陽に一日中照らされてゐる三等車内の暑さは、ネフリユードフにはまつたく堪へられなかつた。で、彼は車内に這入らないで昇降口に立つてゐた。しかし、そこにも爽やかな空氣はなかつたので、列車が建物の間を通過して風が吹きこむ時だけ大きく呼吸することにした。

「さうだ、殺されたのだ。」姉に言つた言葉を自分に向つてくり返した。と、彼の想像裡には、今日のさまざまの印象の中から、二番目に見た囚徒の死體の、唇に微笑を浮べた立派な顔が特に鮮やかに思ひ出された。

「殺されてゐながら誰が殺したかを誰も知らないといふのは實に恐しいことである。彼は他の囚徒同様、マースレンニコフの命令に依つて引き出されたんだ。マースレンニコフは恐らく印刷した命令書に署名したきりで、自分に罪があるなどは考へないに違ひない。囚徒の健康診断をした慎重な醫師は尙更さう考へないにきまつてゐる。彼は職務を正しく遂行して虚弱者を選り分けただけのことで、こんな暑さになるとも、あんな時刻に、あんな大勢を護送することも、前から知つてゐる筈がない。では典獄の罪か？ いや、典獄にしても、たゞ、何月何日、囚徒幾名を護送せよといふ命令書を受けとつて、その通りしたに過ぎない。護送士官にしても何處で幾名を受取り何處で幾名を渡すといふのが職務で、あんなに屈強な人間が幾人も途中で倒れて死ぬなどは夢にも思はなかつたに違ひない。

かう考へて來ると誰にも責任はないことになる。而も、その責任のない人々に依つて幾名かのものが殺されたのである。

「かういふことが生じるのは、彼等、即ち知事とか典獄とか警部とか巡査とか、ある境遇のものに對しては、人間らしい待遇をしなくてもいゝと考へてゐるからである。普通の者ならば、こんな炎天にこんな大勢を護送するのはどうであらうかと幾度も考へたに違ひない。また途中でも二十回くらいは休息させ、弱つて苦しがつてゐるものを見れば日蔭に連れて水でも飲ませたに違ひない。そして萬一の時には悲しみの色をあらはしたに違ひない。然るに彼等はそんなことをしなかつたばかりか、他のものがさうしようとするこゝろさへ妨げた。何故ならば、彼等は、囚徒を人間として待遇する必要はない、たゞ自分たちの職務を果さへすればいゝと考へてゐるからである。同胞に對する人間愛が何物よりも重大であることを認めよ、さうすれば、かうした犯罪は世の中になくなるであらう……」

ネフリュードフは考へこんでゐたので、空模様の變つたのに氣がつかかなかつた。ふと見ると、太陽は低く垂れたちぎれ雲に蔽はれ、西の方から薄鼠色のもくもくした雲があわたしく押し寄せて來た。かと思ふ間に、遙かの先ではもう驟雨が畑や森に烈しく降り出した。空氣が濕つぽくなつて來た。時、雲間に電光が閃き、雷鳴が列車の響きと入り交つて聞えた。雲は次第に近づき、風に送られた雨粒がぼら／＼と昇降口やネフリュードフの上着にかゝつた。ネフリュードフは反對側に行つて、長らく雨に飢ゑてゐた草木の匂ひに充たされた爽やかな空氣を胸一杯吸ひこんだ。そして、沿線の庭や、

森や、黄ばんだライ麥の畑や、白い花をつけた馬鈴薯の畑などを眺めやつた。地上にあるあらゆるものが光澤を帯びて、線はます／＼、緑に、黄はます／＼、黄に、黒はます／＼、黒くなつた。

「もつと降れ、もつと降れ。」

ネフリュードフはこの驟雨に、甦つた田園の光景を嬉しさに眺めてゐたが、長くはつゝかなかつた。雲のなかばは雨となつて落ち、なかばは空を走り過ぎ、やがて最後の滴が降つてしまふと、やがて再び太陽があらはれて、あらゆるものがきら／＼輝き出した。東の方に、地平線の遙か上に、端のや、ぼやけた、葦色が一際目立つ美しい虹が浮び出た。

「お、さうだ、あの連中のことを考へてゐたのだ。典獄だの護送士官だのといふやうな職に就いてゐるものは大抵個人としてはいゝ人間であるが、たゞその職に就いてゐるために慘酷になるのだ……」
彼は監獄内の様子を話してやつた時のマトスレンニコフの冷淡さや、體の弱い囚徒が馬車に乗せてくれと頼んだ時に頭から刎ねつけたり女が出産で苦しんでゐるのに眼もくれなかつたりした護送士官の無情などを思ひ出した。彼等はたゞその職務に就いてゐるために單なる同情心さへ頭に湧かないのである。

「むろん知事、典獄、警官、かういふものは必要であらう。けれども人間の屬性たる、同胞に對する愛と憐れみとを失ふことは恐いことである。何故、愛と憐れみとを失ふか？ それは彼等が戒律でないものを戒律と認めるからである。神が人間の心に刻んだ永久不變の戒律を認めないからである。」

自分が彼等と面接して憂鬱になるのはそのためである。自分にとつてまったく彼等は恐ろしい。強盗よりも恐ろしい。いくら強盗でも人を憐れむ心は持つてゐる。しかるに彼等は持つてゐない。彼等は成長しようとする植物を抑へてゐる石のやうなもので、他のものには決して同情しようとはしないのである。—と彼は考へた。

四一

ネフリユードフの車室には客が約半分くらゐで、大抵は、下男、労働者、職工、屠殺者、番頭、ユダヤ人、兵卒といった連中だったが、他に二人の奥様然とした女（一人は若かつた）と、黒い帽子の、いかめしい顔つきの紳士とがゐた。

座席争ひも終つて皆おとなしく、何かほりくく嚙つて食べてゐるもの、煙草をふかしてゐるもの、おしやべりを始めてゐるものなどさまざま、だつた。

タラスは非常に幸福さうで、通路の右側にネフリユードフの席をも取り、向う側の肥つた男と話しかんでゐた。その男は（ネフリユードフは後で知つたが）新しい仕事先に出かける植木屋だつた。タラスのところへ行かうとして、ネフリユードフは通路の途中で立ちどまると、そこには白い鬚を生やした上品な老人が百姓風の女と話してゐた。その女の隣りでは、新しい百姓服の七つくらゐの女の子が、絶えず向日葵の種子を嚙んでゐた。老人はネフリユードフを見ると、外套の裾を片寄せて、親し

さうに聲をかけた。

「どうぞ、お掛けなさい。」

ネフリユードフは會釋してそこに掛けた。百姓風の女はとぎれた話をまたつづけた。

この女は村へ歸る途中で、都に出稼ぎしてゐる亭主が今度訪ねて行つたらどんなにして迎へてくれたかをしきりに話した。

「謝肉祭の時にも會ひに行きましたが、今度も神様のお蔭で會へました。クリスマスの際にもまた行かうと思つてゐますよ。」

「それや結構なことだ。」老人はネフリユードフの方を見て相槌を打つた。行つて會ふのが一番だよ。でねえと若い男は都住居をして、よくねえところに足を入れるでな。」

「なあに、そんな男ぢやありませんよ。堅いもんでさあ、まるで生娘みたいな暮しをして、稼いだお金はそのまゝ、そつくり家へ送つて寄越しますよ。この娘の顔を見るのを何よりの楽しみにしてゐるんです。」と女は言つて、につこりした。

女の子は向日葵の種子を嚙んで皮を吐きだしながら母親の話に耳を傾けて、いかにもさうだといふ風に、賢さうな眼をネフリユードフと老人とに向けた。

「なるほど、そんな利口もんなら尙更結構だ。ぢや、あれはやらねえだらうな？」
「あれ、」といふのは酒の意味らしく、老人は向うにある職工らしい夫婦もの、方を眼で指して言つ

た。その亭主は仰向きになつて、ウオツカを啣飲みにしてゐるし、女房はその瓶の這入つてゐた袋を手にして、亭主をちつと見てゐた。

「いゝえ、うちの人には酒も煙草もやらねえです。」女はまた亭主自慢のきつかけが出来たので嬉しうに、「ほんとに、うちの人みてえなのはさうざらにはゐませんよ。まあ、この旦那のやうな男つぶりです。」と、ネフリユードフを指して言つた。

「それや結構だね。」老人は職工の方に顔を向けたまゝで應じた。その女房は亭主からウオツカの瓶を受け取ると、それを自分の口に持つて行つた。亭主は皆の視線が自分たちに注がれてゐるのに気がつくくと、ネフリユードフに聲をかけた。

「何だつて言ふんでさあ。がぶくやつてるツて言ふんですかい？ わつちが働いてるところは誰も見ねえが、一杯やつてると、みんながじろくく見やがる。わつちは自分で稼いで自分で飲んで、そして女房を養つてるんですぜ。何も文句はねえでせう。」

「うん、さうだ。」ネフリユードフは挨拶に困つて言つた。

「本當ですよ、旦那。女房はしつかりもんでしてね、わつちを大事にしてくれるし、まつたく本望ですよ。なあ、お前、さうぢやねえか。」と女房に聲をかけた。

「今度はお前さんだよ。わしアもう澤山だ。」女房は瓶を亭主に返しながら、「何をつべこべ話してゐるんだよ？」

「ほらね、いゝ女房でせう。もつとも時には、油の切れた車みてえなキイ／＼聲を張り上げることもありますがね、ね、お前、さうだらう。」

女房は笑つて、酔つぱらひらしく手を振りまはして、「おやまたはじまつた。」と言つた。

「まつたくいゝ女房でさあ……旦那、御免なさいよ、すつかりいゝ氣持になつちやつて、もうどうにも仕様がねえ……職工は、にこ／＼してゐる女房の膝を枕にしてごろりと横になつてしまつた。

ネフリユードフはそれからしばらく老人の傍にゐて、その身の上話を聞いてから、初めにタラスが取つて置いてくれた自分の席へ行つた。タラスと向ひ合つた植木屋は手荷物を片づけて、

「さあ旦那、お掛けなせえ。」と言つた。

タラスは平生から酒の氣がないとしやべれないと言つてゐたが、事實その通りで、素面の時は黙りのくせに、稀に、而も何か特別の場合に、一杯やると、非常に愉快なおしやべりになるのだつた。

今日のタラスは丁度さういふ状態だつたので、植木屋の顔を眞正面に見つめながら、しきりに、女房のフォードシャのことを話してゐた。女房がシベリヤへ護送されるまでの顛末であるが、ネフリユードフも詳しい事情は知らなかつたので、興味をもつて耳を傾けた。彼が来た時は、フォードシャがタラスを毒殺しようとしたことが家の人たちに見つかつたといふところだつた。

「といふやうなわけではれツちまひましたよ。おふくろは、その毒入りの菓子を持つて『警察へ行つて来る』と言ふし、親爺の方は『まあ待ちな、小娘のしたことだ、自分では何にも知らずにやつたん

だらう。可哀さうぢやねえか。そのうちには正氣になるよ』と言ひましたが、おふくろはどうしても承知しねえ。『うつちやつて置いて見ろ、今に家中のものが油蟲みたいに殺されるに違えねえ』といふのでね、たうとう警察へ訴へて出ました。直ぐに巡査さんが女房を連れにやつて来る、證人が呼び出されるつてことになりました。』

「で、お前さんは？」と植木屋は口を入れた。

「わしは腹が痛くつてたまらねえので、そこいら中ごろげまはつて嘔き散らしましたよ。腹の中がひつくり返るやうで口も利けねえ始末さ。親爺が荷馬車にフォードシャを乗つけて、警察から裁判所へ連れて行くと、フォードシャは、そこで何も彼も白状しましたよ。どうして亜硫酸を手に入れたか、どうして菓子を押へたかといふやうなことをね。『何だつてそんなことをしたんだ？』と訊かれると『だつて、あの男が憎らしくてたまらねえからです。あんな男と暮すくらゐなら、シベリヤへ送られの方がよつぽい』と、女房のやつ、わしのことを言つたさうですよ。』

かう言つて、タラスは微笑した。

「何も彼も白状しちまつたんで、つまりは監獄へぶちこまれることになつて、親爺ひとりが歸つて来ました。もう刈り入れの時が来てゐるのに、家にあるのは、おふくろきりで、これがまた、體を悪くしてゐるので、いろいろ相談したあげく、女房の保釋を許してもらへねえだらうかと、親爺が役人のところへ出懸けて頼みました。五人までつき〜に訪ねて頼みました。が、みんな駄目だといふので、も

う諦めてゐたところ、ひよつとしたことから書記と知り會ひになりましたね、こいつがまたずるい奴で、五ループリ寄越せば出してやらうと言ふのです。たうとう三ループリに値切つて書付を書いてもらひましたが、その金も、女房の着物を質に置いて拵へたやうな始末でさあ。

「わしの體も、その時は癒つてゐたので、さつそく町の監獄へ行つて書付を見せると、ちよつとそこで待つてろ、といふので、わしはベンチに掛けました。もうお午過ぎでしたが、まもなく役人がやつて来て『お前がタラスといふものか』とおつしやる。『さやうでございませう』『では連れて行け』といふので、見ると、門が開いてフォードシャが元氣さうに出て來ましたよ。そこで、『さあ、一緒に歸らう』と言ふと、『お前さん歩いて來たの？』と訊きます。『いや馬で來た』と答へて一旦宿屋へ引き上げました。馬の用意をして、車に馬糞を積み、その上に覆ひをかけて腰をかけられるやうにしてやると、女房は、そこに乗つて布を頭からすつぱりかぶりしました。

「途中ではあれも何も言はず、わしも黙りこくつてゐたつが、家の間近に來ると、不意にフォードシャはこんなことを訊くのです。『お母さんはどうしてるかしら？ 丈夫かしら？』とね、『あゝ丈夫だよ』と言ふと、『お父さんは？』と、また訊きます。『お父さんも丈夫だよ。』『堪忍してよ、お前さん。わしは馬鹿だつたね。何てことをしたんだらうねえ。』『くよくよしなくつてもいゝよ。わしはもつとつくに堪忍してゐるんだから』と言つてやると、それきり黙りました。家に這入ると、おふくろの足もとに突つぶしてしまつたが、『神様が許して下さるよ』と、おふくろも言ふし、親爺も『濟んで

しまつたことは仕方がある。これから氣をつけることだ。もう刈り入れだから一生懸命働いてくれ。ありがてえことは、鎌の刃も當てられねえくらゐ麥の豊年だ。明日はタラスと一緒に野良へ出かけるがいい』と言ふので、あれもやつと安心したやうです。

「その時から、フォードシャはまるで生れ代つたやうに働き出しました。みんながびつくりしたくらいであら。わしが刈ると、あれが束ねるといふ具合にやりましたが、あんまり精出すので、わしの方が根負けして早く仕事を切り上げるやうな始末でさ……」

「ぢや、お前さんにもよくするやうになつたぢやうね。」

「それや言ふまでもねえ。魂が一つになつたやうなもんでね、わしの考へることが、あれにはちやんとわかるんでさ。初め怒つたおふくろまでが『うちのフォードシャは、すつかり變つたね、まつたく生れ變つたんだよ』と言ふやうになつたんだからね。いつだつたか、二人きりの時に、わしはあれとこんな話をしました。『どうしてあの時、あんなことをする氣になつたんだい？』『お前さんと暮すのが嫌で、くたまらねえで、いつそ死ぬはうがい、と思つたんだもの』『今はどうだね？』『今はお前さんのことばかり思つてますよ』ところが、刈り入れがやつとおしまひになつた頃、裁判所からの呼出狀が舞ひこみましてね、あれは取調べを受けなきゃならねえことになりました。わし等はそんなことをすつかり忘れちまつたのに……」

「わしの村にもこんなのがあつたよ……」と、植木屋は自分の話をはじめたが、その時、汽車は急に

徐行しだした。

「停車場に來たな。ちよつと一杯やつて來よう。」

ネフリュードフも、植木屋の後から、濡れたプラットフォームに降りて見た。

四二

停車場の構内には、三頭立または四頭立ての立派な馬車が數臺とまつてゐるのに、ネフリュードフは氣がついた。一等車の前に集まつた一群の中に、羽毛飾りのついた贅澤な帽子をかぶり、レインコートを着た、でぶ／＼した婦人と、脊の高い自轉車服の、大きな犬を連れた青年とが一際目立つて見えた。その後、膝かけや傘を持つた下僕と馭者とが立つてゐた。彼等は、全體に共通した金持らしい様子と落ちついた自信とを持つてゐた。

犬をつれた青年はコルチャーギン家の息子、でぶ／＼の婦人は公爵夫人の妹で、一行がその領地へ來ることになつたので出迎へに來てゐたのだつた。

公爵夫人は相變らず椅子のまゝ、運び出された。箱馬車がい、か鞆馬車がい、かなどとフランス語でしゃべりながら一行は出入口の方へ歩いて行つた。

ネフリュードフは挨拶したくなかつたので、その方へは行かないで、彼等が出てしまふまで立つて待つてゐた。

「あ、あれは上流社會の人間だよ。」といふ老公爵の傲慢な調子のフランス語が聞えて來たが、やがてでぶくの婦人を最後にして一行は出てしまつた。

その時、袋を背負つた汚い労働者の一群がプラットフォームに駆けこんで來て、一番目の客車に乗りこまうとしたが、たちまち車掌に追つ拂はれてしまつた。すると彼等は互ひの足を踏み合ひながらあわて、隣りの客車に飛びこみ、背負つてゐた袋をおろして、隅つこに置かうとした。ところが、また別の車掌が停車場の入口からこの有様を見て、がみ／＼呷鳴りつけた。労働者たちは驚いて、そのつぎの車、つまりネフリュードフの車に這入つて來た。そこでも車掌がやかましく言つたが、ネフリュードフは、空席が澤山あるから這入つたつていゝよと教へてやつた。

彼等がぞろ／＼と這入つて來て席を取らうとすると、そこにゐた女連れの紳士風の男が、これは無禮だと叱りつけて追ひ出さうとした。干乾びた顔をした二十人ばかりの労働者たちは即座に袋を抱へて隣りへ移らうとした。悪いことでもしたと思つたにちがひない。行けと言はれたら世界の果までも、坐れと言はれたら針の上にも、といふ風に彼等は見えた。

「どこへ行くんだ、こらく／＼。こゝにゐろ。」と別の車掌が呷鳴りつけた。紳士と並んでゐる腕輪をはめた女は、鼻を鳴らし顔をしかめて、こんな汗臭い連中と同車するのはたまらないと、ぶつ／＼言つたが、労働者たちは災難を遁れたやうにほつとして、めい／＼に重い袋をおろして腰掛の下に押しこんだ。タラスと話すために自分の席を離れてゐた植木屋が歸つて行つた

ので、向う側に二人分、隣りに一人分の空席が出來た。そこで労働者が三人直ぐに腰をおろした。が紳士風のネフリュードフが傍に來たので、狼狽して逃げ出さうとした。ネフリュードフはそれを止めて通路に接した座席の腕木に腰をかけた。

その中の一人は五十年輩の男だつたが、驚いた、やゝおびえたやうな眼をして若い方の男を見た。ネフリュードフが、普通紳士のするやうに、呷鳴りつけたり、追つ拂つたりしないばかりか、自己席までを譲つてくれたので、彼等は却つて不氣味に思つたのである。何か悪いことになるのではなからうかと恐れたほどだつた。

しかし、まもなく、ネフリュードフがタラスと氣輕に話してゐるのを見て、別に悪企みがあるのではないといふことがわかつたので、やつと安心して、若い方が袋の上にかかけ、ネフリュードフに是非席に就いてくれと言ひ出した。向う側の年寄りの労働者は、最初、この紳士に觸りでもしたらいけないと思つて體を縮め兩足を引つこめてゐたが、次第に慣れて、打ち解けた様子で、自分の身の上話などをはじめ、時にはネフリュードフの膝を軽く叩くほどになつた。

この年寄りは泥炭掘りをしてゐたが、今は止めて故郷へ歸るところだと言つた。二ヶ月半稼いだけれども、給金の前借をしたので、十ルーパーリしか自宅へ送ることが出來なかつた。食事時間として二時間の休息があるきりで、日の出から日の暮れるまでぶつ通しに、膝まで泥水の中に浸けて働くのだと言つた。

「馴れねえものにや、それや辛い仕事でさあ。だが段々平氣になつちまひますよ。初めは食物がまづくつて食へなかつたが、みんなが苦情を持ちこんで、よくして貰つたので、稼ぐのも大きに樂になりました……」

この男は今まで二十八年間出稼ぎをして、その給金をすつかり家へ送り、自分では煙草代とかマツチ代とかに年二三ルーブリ費ふだけだと言つた。

「だが疲れてウオツカを引つかけることも稀にやありますよ。」と彼は、にゆつと笑つて言つた。そして最後に、

「わしや方々旅をして歩いたが、旦那みてえな方に出會つたのは初めてだね、何しろ、頭を引つばたくどころか、席まで譲つて下すつたんだから豪氣なもんだ。旦那方にもピンからきりまであると見えるね。」と、タラスに向つて言つた。

「さうだ、これは自分にとつては全く新しい世界だ。」ネフリユードフはかう思つて、労働者たちの細い筋ばつた手足や、ざら／＼とした手織の上着やズボン、やつれてはゐるが、いかにも善良さうな、日にやけた顔を見まはした。さうして、自分が、この新しい人々と、労働生活の眞面目な興味、喜悅、苦痛とに圍まれてゐるのを感じた。

コルチャーギン、その他上流と稱する社會に屬する人々の、怠惰な贅澤な生活と、下等な野卑な興味とを想起して、彼は今、未知の美しい世界を發見した探險家の喜びを感じたのである。

第三篇

マースロワの加はつてゐる護送隊は三千マイル近く進んで來た。彼女は初め刑事犯の仲間に入れられてゐたが、ヘルム町まで來た時、漸く、彼女を國事犯の方へ入れようといふネフリユードフの願ひが容れられた。その注意をしてくれたのは國事犯に屬するウエーラだつた。

ヘルムまでの旅は、精神的にも肉體的にもマースロワには非常に苦しかった。肉體的には、人數が多すぎるので窮屈で汚く、それに蚤や虱がゐて安眠出來なかつた。精神的には、その蚤や虱同様な男たちが煩はしくてたまらなかつた。その男たちは宿場々々で變つたが、どこでもうるさくたかつて來るので少しも油斷が出來なかつた。女囚と、男囚や看守や護送兵などとの間には、由來忌はしい淫蕩な空氣があるので、眞面目な女囚は絶えず警戒してゐなければならなかつた。殊にマースロワは綺麗ではあつたし前身がわかつてゐたので、餘計に挑まれ勝ちだつた。手厳しく劓ねつけられた男たちは大抵立腹して、今度は逆に彼女を憎み出すのがきまりだつたが、幸ひ、フォードシヤやタラスと懇意にしてゐたので、その割には安全だつた。(タラスは、フォードシヤが男たちに手出しをされかけたことを聞いて、女房保護のために今では護送隊に加はつて旅をしてゐるのだつた。)

國事犯の方に移されてからは萬事が樂だつた。種々の設備から食物までが比較的いゝ上に、取扱ひもあまり亂暴ではなかつた。男たちに惱まされることもなかつたので、マースロワの氣持も安らかに、忘れようと焦つてゐた過去の生活を思ひ出すこともなく、暮すことが出来た。が、それにも増して彼女には大きな變化があつた。それは、こゝで四五人の人々と知己になり、その人々が彼女の人格の上に、いゝ意味の大きい影響を及ぼしたことである。

但し、マースロワが國事犯に入れられるのは宿場に泊る時だけで、途中は、體が丈夫だつたから、刑事犯と一緒に歩かなければならなかつた。トムスクからは、ずつとさうして來たのだが、その歩く仲間の中に、二人の國事犯が交つてゐた。一人はマリヤ・パーウロウナといふ栗色の瞳をした美しい娘、(ネフリユードフがウエーラを監獄に訪問した時、面會所にて彼の注意を惹いた女である)一人は、ヤクーツク州に送られるシモンソンといふ、眼の窪んだ、髪をもちやくにした淺黒い青年だつた。(これもウエーラ訪問の時に目についた男である。)マリヤは刑事犯の身持ちの女に馬車の席を譲つてやつたので、また、シモンソンは國事犯であることを利用して馬車に乗るのは正しくないと考へたので、二人とも徒歩にしたのだつた。

マースロワ、マリヤ、シモンソン、この三人は馬車で送られる他の國事犯に先立つて、毎朝早く出發することにしてゐた。じめじめした九月の朝、寒い風がさつと吹きつけて、雨になりまた雪になつた。隊の全部がもう宿

場の構内に集合して、二晝夜分の囚徒費を一定の總代に渡さうとする護送兵の周圍に集まつたり、物賣女から何か買つたりしてゐた。

長靴に、短い毛皮の外套、それに頭巾をかぶつたマースロワとマリヤとは北側の壁際に風を避けて腰をおろしてゐる物賣女の方に行つて見た。そこには、あたくかい肉饅頭、魚、粥、牛肉、卵、牛乳などの食料品が並べてあつた。

やがて、いつもの通り、囚徒の人數調べ、鎖の検査などがはじまつた。ところが、その時、突然、どこからか士官の唳鳴り散らす聲が聞えたかと思ふと、人を殴り飛ばしたらしい音と赤ん坊の泣聲とが同時にした。一瞬、あたりがしんと靜かになつたが次第にあちこちから、がやくと咬きかき聞えて來た。マースロワとマリヤとは騒ぎのあつた場所に行つて見た。

二

行つて見ると、そこではこんなことが起つてゐた。立派な口髭の、逞ましい士官が顔をしかめ、下等な罵詈を今殴りつけたばかりの男囚に浴せながら、その痛む右手の掌を左手でこすつてゐるところだつた。前には頭髮を半分剃られた、げつそりと瘦せ細つた男が、たらく血の垂れる顔を片手で拭き、他の片手で悲鳴を擧げる女の子をショールに包んで抱きかゝへてゐる。

「つべこべ理窟を言ふとまたやつ、けるぞ。餓鬼は女どもに渡しちまへ。さ、嵌める。」

この男は、トムスクまで来た時に女房がチブスに懼つて死んだので、そこから残された女の子を抱き通して来たが、今、士官から手錠を嵌めると言はれ、それでは子供を抱くことが出来ないと言はれたため、機嫌の悪かつた士官の癪癪を破裂させてしまつたわけである。彼等の傍には、片手に手錠を嵌められた黒い鬚の男囚が立つて、悲しげな眼つきで士官と女の子を抱いた男とを見比べてゐた。士官は子供を取り上げると護送兵に命じた。囚徒の間からは、がやがやいふ聲が次第に高くなつた。

「トムスクからこつちは嵌めなかつたんだよ。」といふ腹れ聲がうしろの方から聞えた、「人間の子なんだよ、犬ころちやねえんだよ。」

「その子をどうしようツてんだ？ そんな法はあるめえ。」と、また誰かが言つた。

「誰だ、今のは？」何かに刺されたやうに士官は嗚咽して囚徒の列を押し分けた。「法を教へてやらう、どいつだ？ 貴様か？ あん、貴様か？」

「みんなが言つてるよ。だつて……」

づんぐりした男が、かう言ひかけると、皆まで言はせず、士官の両手がその顔に飛んで行つた。

「手向ふ氣だな。よし、手向つて見ろ、眼に物見せてくれるから。犬ころ同様、ズドンと銃殺しちまつてくれるぞ。その方がお上でも助かるんだ。さ、餓鬼を取り上げろ。」

誰も口を利かなくなつた。護送兵の一人が、ひい／＼泣き叫んでゐる子を引き離すと、他の一人

が、今は諦めておとなしく手を差し出してゐる男に、かちやりと手錠を嵌めた。

「女囚の方へ連れて行け。」士官は帯革を直しながら命じた。

顔を眞赤に泣き腫らした赤兒は、シヨールの中から手を出さうとして、もがきつゞけ、泣きつゞけた。マリヤ・パウロウナは一步進んで士官の前に立つた。

「この子は私が連れて行つても宜しいでせうか。」

「お前は？」士官は訊いた。

「國事犯のものです。」

マリヤの美しい顔がこの際はたしかに役に立つた。士官はしばらく思案でもしてゐるらしく黙つて彼女を眺めてゐた。

「こちらは構はない、よかつたら連れて行くさ。しかし萬一この親爺が逃亡でもしたら誰が責任を持つんだ？」

「子供を抱いて逃亡することなんか出来ないぢやありませんか。」と、マリヤは答へた。

「お前と話してる暇はない。よかつたら連れて行け。」

「渡しませうか。」と、護送兵が訊いた。

「よし。」

「さあ、こつちへおいで。」マリヤは子供をあやししながら受け取らうとした。

護送兵に抱かれた子供は父親の方に反りかへつて悲鳴を擧げるばかりで、マリヤの手には來さうもなかつた。

「マリヤさん、ちよつと。私なら來るかも知れないから。」マースロワは聲をかけて袋の中からパンを取り出した。子供は以前からマースロワとは馴染になつてゐたので、顔とパンを見ると直ぐに抱かれてしまつた。

すべてが靜かになつた。門が開かれて愈々出發することになつた。マースロワは赤ん坊を抱いて女囚の中に這入りフォードシャの隣りに行つた。さつきからの騒ぎを黙つて見てゐたシモンソンは、馬車に乗らうとする士官の前に、つかくと進み寄つて言つた。

「あなたのやり方はいけませんね。」

「自分のところに引つこんである。お前なんかの出る幕ぢやない。」と、士官は叱りつけた。

「いや、出る幕です。やり方がいけないことを申し上げる必要があるから申し上げたまでです。」

シモンソンは濃い眉毛をびくりとさせて士官の顔をぢつと見つめた。

「用意はいゝか。出發！」士官は耳を藉さないで號令を掛けて、そのまゝ馬車に乗りこんだ。

三

國事犯の仲間入りをして暮すことは、都會で數年間の墮落生活を送り更に數ヶ月間の監房生活を

事犯と共に送つて來たマースロワにとつて、決して樂ではなかつたが、兎に角非常にいゝことだつた。一日十五マイル乃至二十マイルの行程で、食物も悪くなく、それに二日目ごとに一日の休息があるので、體も丈夫になつたが、それよりもよかつたのは、精神的方面で、新しい交友が、嘗ては夢想もしなかつた興味に充ちた世界を見せてくれたことである。現在一緒に暮してゐるやうな不思議な人は、今までに會つたことがないのは無論、想像さへも出來なかつた。で、マースロワは考へた。

「あの宣告を受けた時、私は悲しくて泣いた。けれども、本當はそれを神様に感謝しなくてはいけない。それが機縁となつて、こんな、今までの生活をしてゐたのではどうしても知ることの出來ないことを知るやうになつたのだから。」

今のマースロワには、これ等の人々が何に依つて動いてゐるかを容易に理解することが出來た。そして深く共鳴したのである。民衆の味方として貴族階級に反抗して立つた彼等は、彼等自身が貴族階級に屬する人間でありながら、その特權、自由、生活を、民衆のために放棄し犠牲としてゐる。そのことが彼女にはよくわかつた。そして彼等を尊敬した。

彼等新しい知己の中でも、彼女は特にマリヤ・パウロウナが好きだつた。好きと言ふよりも狂熱的に敬愛してゐた。この美しいマリヤが將軍の娘として生れ、三ヶ國語を自由に繰る程の教育を受けてゐるのに、富裕な兄から譲られた財産をすべて見棄て、ごくつまらない女工同様の生活を、なりふりに少しも構はないといふ事實に、まづマースロワは感動した。そして次には他人に媚

びるやうなところが微塵もないのに驚くと同時に惹きつけられた。

マリヤは自分の美しいことを知り、それを喜んでゐたが、美しさが異性の上に影響を及ぼすことを嫌ひ、いや寧ろ恐れて、戀愛感情なるものを一切拒否した。男の方でもそれを知つてゐたので、戀の氣持を感じるものがあつても決して素振りに見せないで、男としての彼女に接した。しかし、そんなことを知らないで、しつこくつけまはす男もあるので、そんな時には止むを得ず得意の腕力を揮つて遁れることにしてゐた。

彼女が革命家になつたのは、子供の時からいはいゆる上流生活を嫌つて、一般大衆の生活を好いたからだつた。女中部屋、臺所、厩などに這入りこんでゐて、座敷にあまりゐなかつたので始終吐られ通しだつた。だから、彼女はよく言ひくした。「コックや馭者と一緒にあるのは面白いものですよ。貴婦人だの紳士だの退屈で仕様がないわ。そのうちに物心がついて來ると、私たち上流生活といふものが本當にいけないと、はつきりわかつて來ました。それに、私にはお母さんはなかつたし、お父さんは厭だつたので、十九の時に家を友だちと一緒に出て、或工場の女工になりました。」

その工場を止めてからはしばらく田舎で暮してゐたが、またモスクワに來て、同志の秘密出版物を印刷する家に下宿してゐて捕縛されたのである。マースロワの聞いたところによると（マリヤは一度も口外したことがなかつた）女が懲役を宣告されたのは、家宅搜索を受けた時に、同志の一人が警官をビストルで射撃した、その罪を背負つたといふことだつた。

カチュウシヤはマリヤと知り合ひになると直ぐに、彼女がどんな場合でも自分自身のことを思はず常に他人のために心配してゐることに氣がついた。或男がこれを慈善道樂だと評したが、たしかにさうだつた。つまり、彼女の全生涯の興味は、丁度獵師が獲物を探すやうに、他人のために盡す機會を探すことだつた。そして道樂は一生の習慣となり仕事となつた。而も、そのやり方が極めて自然だつたので、彼女を知るものは次第に感謝することを忘れて當然して貰ふものと思ふやうになつた。

カチュウシヤが仲間入りをした當座、マリヤは彼女に非常な反感を持つた。カチュウシヤにはそれがよくわかつたが、同時に、彼女がその感情を殺して特に自分に優しく親切にしてくれることもわかつた。普通では有り得ないさうした心づくしが、カチュウシヤを感動せしめて、全精神を彼女に捧げ、知らず／＼彼女の意見を容れ、萬事彼女の眞似をせしめるやうになつた。マリヤのはうでも、カチュウシヤの獸身的愛情に動かされて、當然それに報いるやうになつた。

二人とも異性との戀愛を拒否する氣持は同じだつた。但しカチュウシヤはその恐しさを飽くまで體驗したからであるが、マリヤの方は全然知らないで、これを、何か理解し得ない、同時に嫌惡すべき、人間の品性を汚すものであると考へてゐた。

四

カチュウシヤは、マリヤを愛することに依つて彼女の影響を受けたが、同時に、シモンソンに愛せ

られることに依つてその影響をも受けた。

人間はすべて、半ば自己の思想、半ば他人の思想にしたがつて生き且つ動くものである。その程度の如何が人を區別するには重大である。ある人々は思索することを精神的遊戯の如く、又自己の理性を調革を外した滑車の如く見做して、實際の行爲に於いては、多くの場合、他人の思想、慣習、傳説、法律などの命ずるまゝになつてゐる。またある人々は自己の思想をあらゆる行爲の元動力と考へて、多くの場合、自己の理性の命令に従ひ、他人の意見を容れることは極めて稀である。(而も充分調査研究の上でなければ受け容れない。) シモンソンは、その後者に屬する人間で、一切の事物を彼自身の理性に依つて決定し、その決定に従つて行動した。

中學生時代の彼は、政府の財務官をしてゐた父親が不正な利得をしたのを知つて、それは全部一般に施すべきであると思ひ出した。父親は意見を容れるどころか、反對に叱り飛ばしたので、斷然家を出て、以後父親の世話にならなかつた。大學を出てからは村の小學校長となつて、児童や農民に彼が正しいと信じたことを大膽に鼓吹し、正しくないと信じたことを赤裸々に攻撃した。

そのため彼は捕縛されて裁判を受けた。審理中、彼は裁判官が自分を裁く権利がないと考へたので、その通りを申し立てた。しかし裁判官はそんなことには耳を藉さないので審理を續行したので、彼は答辯しないことにして頑強に押し通した。そこで流刑を宣告された。

流刑地アルハンゲリスク縣にゐる間に、彼は、その後の彼の活動一切を支配すべき一種の宗教的信念を作り上げた。それに依れば、宇宙間に在るあらゆるものは生命を持つてゐる。死物は一つもない。われ／＼が無生物もしくは無機物と考へるものも、實はわれ／＼の測り得ない或大きな有機物の一部たるに過ぎない。人間も、その大きな有機物の一部であるから、その生命を支持することを以て職務とすべきである。

この見地から、彼は生命を絶つことを罪惡と考へ、戦争、死刑、その他あらゆる殺害に(動物の殺害にも)反對した。

結婚に關しても彼は獨自の意見を持つてゐた。生殖行爲は人間の下等な機能に過ぎない、より高等な機能は既に存在する生物に奉仕することにあると考へてゐた。血液中に殺菌細胞のある事實が更にこの信念を強めた。彼の説に依れば社會に於ける獨身者は血液中の殺菌細胞のやうなものであり、従つて、弱者や病者を救ふのがその使命である。若い時には遊蕩をしたこともあるが、この結論に達してから、彼は、必ずその通り實行し、マリヤと共に、人間界の殺菌細胞を以て任じてゐた。

カチユウシヤに對する彼の愛は、決してこの思想と矛盾するものではない。何故ならば、彼の愛はプラトニックであり、而もプラトニック愛は、殺菌細胞としての活動を妨げるところか、かへつて助長するものだからである。

彼はまた精神的方面ばかりでなく實際問題に於いても彼一流に振舞つた。例へば何時時間活動し、何

時間休息し、何を食べ、何を着るといふやうなことまで、ちやんとした規定があつた。性質は臆病で謙譲だつたが、一日決心したら何ものにも動かされなかつた。

かういふ男が、愛によつて、カチュウシヤに影響を及ぼした。カチュウシヤは女性の本能によつて忽ち彼の愛を感じると同時に、彼のやうな人物に想はれるといふことが彼女の誇りを高めた。ネフリュードフは一つには高潔な氣持、一つには過去の事情のために結婚を申しこんだのであるが、シモンソンは、現在あるがまゝの彼女を愛し、たゞ愛するが故に愛するといふのである。彼女はシモンソンが自分を稀に見る女、高い道義性を持った女であると考へてゐることが感じられた。どんな性質の女だと思つてゐるかは、まだはつきりしなかつたが、とにかく、男が失望することのないやうに全力を盡して自分の裡にある最高の性質を目覺まし、出来るだけ立派な女にならうと努めた。

これはまだ監獄にゐた時からのことだつた。カチュウシヤは或面會日に、シモンソンの優しさうな、やゝ黒味を帯びた青い瞳が、濃い眉の下から、ちつと自分に注がれてゐるのに氣がついた。その時既に彼女には、彼が特別な男であること、そして特別に自分を見てゐることがわかつてゐた。

護送されて来る途中、カチュウシヤはトムスクで國事犯の仲間に入れられ、そこで再びシモンソンに會つたが、その時にも、別に言葉は交さなかつた。しかし互ひに、おぼえてゐますよ、あなたは私にとつて大切な人だからといふ意味の視線を交した。その後これといふほどの話をしたのでないが、何だかカチュウシヤには、彼が他人に話してゐるのを聞いても、自分に話しかけられてゐるやうな氣がした。「あの方が私のために話してゐるのだ、あの方を私にはつきりさせようと思つて話してゐるのだ。」と彼女は思つた。

しかし二人が次第に親密の度を加へたのは彼が刑事犯と一緒に歩き出してからである。

五

ネフリュードフはベルムに着くまでに、二度しかカチュウシヤに會はなかつた。二度とも彼女は控へ目で冷淡だつた。何か入用なものはないかと、氣持の具合はどうかとか訊いても曖昧な、含羞んだやうな返事ばかりして、或ひは以前に示したやうな彼に對する憎惡を感じてゐるのではないかと思はれた。その沈んだ調子が（實はこれは當時男たちに附けまはされた結果に過ぎないのではあるが）ネフリュードフには苦しかつた。彼は彼女が辛い、而も淫らな空氣の中にあるので、再び自暴自棄になつて酒や煙草をはじめやるやうになりはしまいかと恐れたが、初めは會ふことが出来なかつたので、どうにもならなかつた。

ところが、その後、國事犯の方に移されてから會つて見ると、彼の心配は杞憂に過ぎなかつたこともわかり、更に會ふ度數が重なるにつれて、彼の希望した通りの精神的變化が益々彼女に起りつゝ、あることも明らかに認められた。トムスクで會つた時には再びトムスク出發前そつくりのカチュウシヤになつて、もう厭な顔をしたり含羞んだりすることもなく、いそぐと彼を迎へて、その骨折りに對

する禮を言つたり、特に國事犯に入れて貰つたことを感謝したりした。
二ヶ月の行程を経て、今日では彼女の内部に生じた變化が外貌を見てもわかるやうになつた。顔が日に焼け體が痩せ、年もふけて見えた。額や口のあたりには皺が寄り、服の着こなしてから應對ぶりに至るまで、どこにも媚を賣つた昔の面影は見られなくなつた。こんな風に變つたこと、また現に變りつゝあることはネフリユードフの喜びだつた。

彼は今までにおぼえない感じを彼女に持つやうになつた。この感情は、彼女に對する最初の夢のやうな詩的戀愛とも違ふし、その後の肉慾的戀愛とも違ふし、といつて最近の義務履行の満足（これには彼の自己讚美の氣分も交つてゐないとは言へないが、とにかく、これに依つて裁判が済んだら結婚しよう）と決したのである）とも違つてゐた。現在はまだ憐憫の氣持だつた。それは、監獄で初めて會つた時にも、後に病院助手との噂を聞いて許した時にも（それは何でもなかつたことを彼も後で知つた）感じた氣持ではあつたが、今は、さうした一時的のものでなく、永久的のものであつた。つまり何を考へ何をするにつけても憐憫の感情を抱くやうな彼になつてゐたのである。カチュウシヤに對してばかりではない、誰に對してもさうだつた。この感情がネフリユードフの心内に溜つてゐた愛の泉に出口を作つた。そして溢れ出した愛があらゆる人々を潤ほしたのである。
カチュウシヤが國事犯の仲間入りをしたので自然ネフリユードフは彼等の多くを知るやうになつた。その結果、彼等に對する考へが以前とは一變してしまつた。

ロシアに革命運動が起つて以後、いや特に、アレキサンドル二世が虛無黨のために暗殺された三月一日事件以後、ネフリユードフは革命黨員を輕蔑憎惡してゐた。何故といふに、彼等が政府と戦ふに用ひる手段（殊に暗殺の方法が）残酷陰險だつたからである。彼等に共通の特徴は自負心の強い點だつたが、それも彼は嫌ひだつた。しかし親しく彼等と交はるやうになり、いかに彼等が政府の手で苦しめられてゐるかを知つて、初めて彼等がさうなるのも無理はない、他になりやうがない、といふことがわかつた。

いはゆる刑事犯なるものに課せられる罰がいかにも恐ろしくいかに無意味なものであるにもせよ、少くとも彼等は宣告の前には裁判らしいものを受けるのであるが、國事犯となればそれすら行はれない場合が多い（シユーストワの場合でもさうである）彼等はちやうど網にかつた魚のやうな扱ひを受けるのである。すなはち網にかつたものは悉く一旦岸に引上げられて、大きな魚だけが選り出され、小さなのはそのまゝ岸にはふり出されて干乾しにされてしまふ。かうして捕へられた全然罪のない、或ひは全然危険性のない數百の人々が數年の間獄に投ぜられ、そこで肺病になつたり精神に異状を呈したりしてしまふのである。政府はたゞ放免の理由がないからといふので監禁して置くのであるが、實はさうして置けば安全であり、また何か裁判上の参考になることもあるだらうと考へてゐるのである。時には政府の眼から見ても無罪と思はれるこれ等の人々の運命は、たゞ警察、探偵、檢事、判事、知事、大臣などの氣まぐれ、御機嫌の如何に依つて左右されてゐる。彼等役人中の或ものは、

退屈になつたり、手柄をあらはさうと思つたりすると、たちまち家宅搜索をしたり檢舉したりして、自分または上官の氣次第で投獄したり放免したりする。その上官にしても同じことで、いゝ加減な情實に依つて、罪がないとわかつてゐるものを、流刑にしたり死刑にしたり、時には放免したり（貴婦人に歎願でもされやうものなら）するのである。

國事犯は言はゞ戦時と同じ取扱ひを受けるのであるから彼等の方でも自然、官憲に對して同じ手段方法を執るやうになる。戦時に於ける軍人の行爲が處罰されないばかりか英雄的動功として賞讃されると同じく、國事犯の間では、自由または生命の危機に際して執つた殘虐な行爲は決して非難すべきでなく寧ろ拍手すべきであると思はれてゐた。

これに依つてネフリユードフは、蟲けらの苦しみも見てゐられないほど穩順な人々が平然として暗殺の計畫をすゝめるといふ不思議な現象を漸く理解することが出来た。彼等の大多數は、或殺人行爲も或場合には正しい、——高い目的を達するため、または一般民衆の幸福のためにする一種の自衛手段であると思へてゐた。彼等が自己の仕事に重大視し、従つて自己自身をも重大視するのは、政府がそれを重大視して極刑を課することから生じたのである。事實、彼等の受けてゐる苦しみは、餘程自己を高く評價しなければ到底堪へて行けるものではない。

ネフリユードフは彼等が次第にわかつて來てかう思つた。「彼等は一部の人が想像するやうに、極悪無道な人間でもなく、といつて英雄でもない。ごく普通の人間である。だから、どこにもある通

り、彼等の中には、善人もあれば悪人もあるし、中間のものもあるのだ。」と。

世の中の罪惡と戦ふのが自分の義務であると正直に考へて革命運動に携つてゐるものも無論あるが、中には、利己的、賣名的動機に依つて身を投じたものも少くない。しかし大部分は危険を冒して見たいといふ氣持から革命運動に惹きつけられたので、既にネフリユードフが軍隊生活に於いて味つたやうに、生命を弄ぶといふ感情は、青年氣鋭に共通したものである。とは言へ、彼等は常人よりも道義心が遙かに高いやうにネフリユードフには見受けられた。節制、辛苦、眞實、清廉などを義務と考へてゐる上に、民衆のためにはすべてを、自己の生命までを犠牲にしなければならぬと考へてゐるやうだつた。だから彼等の中の或者は容易に達することの出来ない程度の道德的水準に立つてゐたが、中には、眞實のない偽善家、威張りちらす自惚家なども澤山交つてゐて、まつたくの玉石混交だつた。

ネフリユードフは、或者には尊敬を拂つて心からの愛を示したが、同時に或者には全然冷淡な態度を執るやうにした。殊に彼は、カチユウシヤと同じ組にあるクルイリツォーフといふ肺病の青年が好きたつた。

六

赤兒のことで護送士官が囚徒を吐り飛ばした日、その村の宿屋に泊つてゐたネフリユードフは、朝

寝をした上に、つぎの町で投函しようと思ふ手紙を數通認めたりしたので、いつもより出發が遅れてしまった。で、これまでのやうに途中で護送隊に追ひつくことが出来なかつたが、でも日暮れ前に、宿場ときまつた村に辿りつくことが出来た。

中年のよく肥つた女將が經營してある宿屋に這入つて茶を飲んでから、カチユウシヤに面會の許可を得ようと思つて士官を訪ねることにした。今までの六つの宿場では、どの士官からもその許可が得られなかつた。彼等は七回も交代したに拘はらず、皆、申し合したやうに宿所に入れてくれなかつたので、もう一週間もカチユウシヤに會はないわけである。こんなに嚴重にするのは監獄を監督する或地位の高い官吏が視察するかも知れないといふ理由に依るのでつた。ところが、その官吏は視察しないで通過してしまつたといふことがわかつたので、今度の士官は、すつと以前の士官同様、面會を許可してくれるだらうとネフリユードフは思つた。

宿場は村はづれにあるので、宿の主婦は馬車で行くことをすゝめてくれたが、彼は歩いて行くことにした。大きな長靴の、ぶんぐりした若い奉公人が案内しようと言ひ出した。

もう日がつぶりと暮れ、それに深い霧が降りてゐたので、窓から灯が洩れてゐないところでは、三步くらゐ離れても案内者の姿が見えないくらゐだつたが、どろ／＼の泥濘に吸ひつかれるやうな重い長靴の音だけは、はつきりと聞えた。教會の前の廣場と軒竝に明るい灯の輝いてゐる長い通りを過ぎて、漸く村はづれに出た。ネフリユードフは案内者の後について歩いた。霧の中に、宿場の火が見

え、次第に、柵や、歩哨の黒い影や、白黒に塗り分けた柱や、番小屋などが見えて來た。

「誰だ。」と、歩哨は人影の近づくを見て驚愕した。そして見かけない者だとわかると更に嚴しくなつて、柵の傍で待つことをも許さないと云ふ風だつた。が、案内者は、そんなことにはびくともしないで言つた。

「お前さん、なんでそんなにがみ／＼言ふんだね。こゝで待つてるから、軍曹を呼んで來ておくんなさい。」

歩哨はそれには答へないで、門内に向つて何か大聲で嘖鳴つた。案内者はネフリユードフの長靴を木片でごし／＼こすつた。柵の向うからは男女のがやく／＼と騒ぐ聲が聞えた。

三分くらゐ経つて、がちやりと音がしたかと思ふと、門が開き、外套を着た下士があらはれて用件を訊いた。下士は歩哨ほど嚴しくはなかつたが、その代り根ほり葉ほり訊きたがつた。ネフリユードフが何で士官に面會を求めたのか、またネフリユードフとは一體何ものであるかを知つて、賄賂にありつかうと思つてゐるらしかつた。そこで彼は特別の用事があつて訪問したこと、お禮もするつもりであることを述べて、この書面を士官に渡してくれないかと頼んだ。下士は差し出した書面を受けとり、黙つて頷いて奥に消えた。

しばらくすると、また門が開いて、籠や箱や桶や袋を持つた一群の女が、べちやく／＼しやべりながら出て來た。田舎ものらしい風をしたのは一人もなくて、みんな都會風の毛皮の外套などをつけてゐ

た。そして、珍らしさうに灯の下に立つてゐるネフリユードフと案内者とを、じろく眺めた、中の一人は案内者の馴染と見えて、こゝで會つたのが、ひどく嬉しさうだつた。

「まあお前さん、そんなところで何してるのさ？」と、その女は聲をかけた。

「この方を案内して来たんだよ。お前は何かを持って来たんだい？」と、案内の若ものは言つた。

「牛乳だよ。明日も持つて来るのさ。」

「泊つて行けつて言はなかつたかい？」

「何の、馬鹿をお言ひでねえよ。」女は笑ひながら、「さ、村まで送つてくれねえか、一緒に行かうよ。」

若ものはそれに答へて何か言つたが、それには女たちは無論、歩哨さへも釣りこまれて笑ひ出した。若ものはネフリユードフの方に向き直つて、

「旦那お一人で道がわかるでせうか。迷ひ子になりやしませんか。」

「大丈夫だよ。」

「ぢやね、教會の前の廣場を通り過ぎて二階家から二軒目ですよ。さうだ、この杖をお持ちなせえ。」

彼は自分の脊よりも高い杖を渡して言つた。そして、長靴の音を泥濘の中に、ばちや／＼言はせながら女たちと一緒に闇の中に消えた。

彼の聲は女たちの聲に交つて霧の中に聞えた。と、さつきの下士があらはれて、士官が面會するか自分について来るやうにと言つた。

七

柵内には平家が三つあつて、一番大きいのが囚徒用、他に護送兵用と士官用兼事務用のがあつた。

三つの家の窓からはあかくと灯が洩れて中には何か楽しいことでもあるやうに見えた。

下士はネフリユードフを一番小さい家の階段に案内した。應接の部屋には兵卒が體を前屈みにしてサモワルのかゝつたストーブの下を煽いでゐたが、ネフリユードフの姿を見ると、外套を取る手傳ひをしてから奥の部屋に這入つて行つた。

「參りました。」

「では、こちらへ。」

それは何だか怒つてるやうだつた。兵卒はネフリユードフに「どうぞ奥へ——」と言つて、またサモワルの方にかつた。

釣りランプに照らされたつぎの部屋には、大きな口髭の、緒ら顔の士官が、晩食の残りや酒瓶二本との竝んだテーブルの前に掛けてゐた。煙草の臭ひに交つて安香水の臭ひがぶん／＼した。

士官は立ち上つて、皮肉な、探るやうな眼つきをしてネフリユードフを眺めた。

「御用件は？」と、まづ訊いたが、返事を待たずに開けつばなしになつた扉に向つて叫んだ。

「ベルノフ、サモワルはどうした？ 何をぐづ／＼してるんだ。」

「はい、直ぐに持つて参ります。」

「こちらにも直ぐにぶん殴るぞ。しつかりしろ。」

「はい、只今。」兵卒は唳鳴るやうに言つてサモワルを持つて這入つて来た。

ネフリユードフは兵卒がサモワルをテーブルの上に置くのを待った。士官は、いかにも意地の悪さうな眼で、どこを殴つたら一番こたへるか考へてゐるらしく兵卒の姿を眼で追ひまはしてゐたが、やがて、茶を入れ、旅行カバンの中から四角な瓶とビスケットとを取り出してテーブルに並べた。

「まあ、どんな御用ですか。」

「實はある女囚に面會させていたゞきたいのですが。」ネフリユードフは腰もかけないで言つた。

「國事犯でせう？ 法律で禁じられてゐます。」

「い、え、國事犯ぢやないのです。」

「さうですか。まあ、お掛けなさい。」

ネフリユードフは椅子に掛けながら、

「國事犯ではありませんが、實は私がお願ひして國事犯の方に入れていたゞいてゐるのです。」

「なるほど、それなら知つてゐます。小柄の、淺黒い女でせう。え、何とかなりますよ。あなたは

煙草は？」

煙草入れを出し、茶を二つの茶碗に念入りに注いで、一つをネフリユードフの前にすゝめた。

「どうぞ。」

「ありがたう。それよりも早く面會させていたゞけませんかしら。」

「夜は長いですよ。時間はたつぷりあります。こちらへ呼び出すやうにしませう。」

「向うへ參つちやいけないでせうか。呼び出さなくても宜しいのでせう。」

「國事犯のところへは嚴禁といふことになつてゐますから。」

「でも私は今までに幾度となく許されてゐるのです。若し私が何か危険なものでも渡しはしないだらうかといふ御懸念だつたら御無用に願ひます。そんなことなら、その女の手を通して今までに出来たわけですからね。」

「いや、さうぢやありません。どうせ女の體はあらためるのですから。」と言つて、士官は厭な顔をして笑つた。

「では私をおあらためになつたら宜しいでせう。」

「いや、そんなことをしなくても何とかかなりますよ。」士官は栓を抜いた酒瓶を、ネフリユードフのコップの方に突き出しながら、「いかがですか？ お厭ですか。——人間もこんなシベリヤなんかで暮してると、稀に學問のある方にお目にかゝるのが楽しみになるものです。御承知の通り、われ／＼の仕事は實に厭なので、他の仕事に慣れたものには尙更辛くてたまらないのです。護送士官などといふものは粗野な無學な人間ばかりのやうに世間では思はれてゐるやうですね。生れた時から他の仕事は

何にも出来ない人間のやうに思はれてゐるのは非常に心外です……」

この士官の赭ら顔や、安香水や、指輪や、殊に不愉快な笑聲などが、ネフリユードフにはとてもたまらなかつた。しかし、今は、旅行中であるから、いかなる人に對しても眞剣な態度を以て接することにしてゐた。だから士官の言葉を聞いても、その氣持がわかつたので、頗る眞面目な調子で、

「でも、あなたのお仕事にしたつて、他人の苦しみを軽くしてやるといふ楽しみがあるぢやありませんか。」と言つた。

「苦しみですつて？ あなたはあの手合がどんな人間だか御存知ないんです。」

「あの連中だつて別誂への人間ぢやないでせう。やはり普通の人間ですよ。中には全然無實の罪を着てゐるものもあります。」

「むろん、いろんな人間がゐますから、中には可哀さうなものもあるでせう。同僚たちはびし／＼やつつけますが、私は出来るだけ樂にしてやらうと努めてゐます。あの手合を苦しめるよりも、こちらが苦しんだ方がいゝのです。同僚の中には下らないことにも一々法律を楯にとつて銃殺でもやり兼ねないのがゐますが、私は可哀さうに思つてゐるのです。……さあ、どうぞ。」と、そこで新しく茶を注ぎ代へて、「あの女は一體何物ですか。つまり、あなたの面會したいとおつしやる女は？」

「遊女屋にまで身を沈めた不幸な女でしてね、毒殺の嫌疑から、まちがつた判決を受けたのです。實際は非常にいゝ人間なのです。」

士官は頷いて、「なるほど、そんなことはありがちですね。カザンにエムマといふ女がゐましたが、ハンガリー生れの癖に、ベルシヤ式の眼をしてゐて……」と言ひかけて、思ひ出すと微笑しないではゐられぬといふ風だつた。「まるで伯爵夫人といつてもいゝくらの風采でしたよ……」

ネフリユードフは士官の話を遮つて、

「あの連中はあなたの手でどうにでもなるんだから今までにも随分樂にしておやりになつたことせう。さうなされれば、あなた自身にも樂しみがあつたわけですね。」

士官は眼を光らせてネフリユードフの顔を見てゐた。鮮やかな印象を残してゐる、ベルシヤ式の眼をしたハンガリー女の話のつゞきがしたくて、むづ／＼しながら、ネフリユードフが話を止めるのを待つてゐた。

「え、それは無論さうです。だが、それはそれとして、今の話をしたいんですが、一體そのエムマといふ女は何をしたと思ひます。……」

「失禮ですが私は……」と、ネフリユードフは話の腰を折つて、「率直に申しますと、以前はさうでもなかつたのですが、今は女の話がすっかり厭になつちまつたものですから……」

士官は呆氣にとられたやうにネフリユードフを見た。

「お茶をもう一杯いかがです。」

「え、もう澤山です。」

「ベルノフ、」士官は勢ひよく、「この方をワクロロフのところへ案内してくれ。國事犯の特別監房に御通しするやうに。點呼の時間までは居られても差支へない。」

八

ネフリュードフは兵卒に案内されて、ランプの赤い灯に薄明るく照らし出された中庭に出た。

「どこへ？」護送兵が案内役の兵卒に聲をかけた。

「特別監房の五號室。」

「ここからは駄目だよ、錠がかゝつてる。向うへまはらなきや。」

「どうしたんだ？」

「下士が錠をかけたまゝ、錠を自分で持つて村へ出かけたんだ。」

「さうか、ぢや、こつちへいらつしやい。」

兵卒は他の入口に案内した。庭にある時から、内部の人々のざわめきが葉を飛び出す前の蜜蜂のやうに聞えてゐたが、愈々傍に近づいて扉を開けると、そのざわめきは急に大きくなつて、嘖嘖たり罵つたり笑つたりする騒々しい聲に變つてしまつた。例のちや／＼と鳴る鎖の音が聞えて、むつとする臭氣が鼻を衝いて來た。

いつもの通り、このがや／＼騒々しい聲と、鎖の音と、たまらない臭氣とは、一つの感覺に溶けこん

で、ネフリュードフの心内に一種の精神的嘔吐の氣持を起せさせた。そして次第にそれが肉體的嘔吐の氣持に變化して行つた。

内部に這入つて最初眼についたのは大きな臭い桶だつた。桶の傍には一人の女囚がしやがみ、その前に帽子を横かぶりにした男が立つてゐた。彼等は何か話してゐたが、ネフリュードフの姿を見ると、男は眼ばたきをして言つた。

「天子様だつて小便は我慢が出来ねえよ。」

しかし女は裾を下して顔を赧くしたやうだつた。

入口から廊下になり、監房の扉が幾つか開いてゐた。一番目は夫婦者用、二番目は獨身者用、端にある小さな二つは國事犯用であつた。

この建物は全體で百五十名を收容するやうに作られてゐるのに、今は四百五十人も詰めこんだので、部屋には這入りきらないで廊下まできつしり溢れ出してゐた。床の上に坐つたり寝ころんだりしてゐるもの、土瓶を持つて出て行くものなどもあつた。

タラスもその中に交つてゐた。彼はネフリュードフに追ひすがつて懐かしさうに挨拶した。その優しい顔には、鼻と眼の下とに打傷の跡らしい黒い痣が出来てゐた。

「どうしたんだ、その傷は？」と、ネフリュードフは訊いた。

「へえ、ちよつとしたことがありましてね。」と、タラスは、にや／＼して言つた。

「この連中と來たら喧嘩ばかりしてるんです。」と、兵卒が言つた。
「みんな女のこととさあ。」タラスの後にゐる男が引き取つて、「盲目のフェーヂカと摺み合ひをやつたんでさあ。」

「で、フォードシヤは元氣かね。」

「お蔭さまで丈夫です。今お茶を入れるつてので、お湯を持つて行つてやるところです。」
そして、タラスは夫婦者用の監房に這入つて行つた。

九

國事犯用の部屋は二つあつて、その扉はいづれも廊下の仕切りをしたところについてゐた。
その仕切りのところに這入ると、そこにはシモンソンが、薪を手にしてストーブの前にしゃがんでゐた。

ネフリユードフの姿に氣づく、彼は、しゃがんだまゝ、例の濃い眉の下から、ぢつと見上げながら手を差し出した。

「よくいらつしやいました。お話したいこともあります。」と、意味あり氣に言つた。

「ほう、どんなことですか？」

「後で申し上げませう。今ちよつと手が離せませんので。」

シモンソンはまたストーブの方に向いたが、これは彼一流の理論にしたがつて、出来るだけ熱のエネルギーを失はないでストーブを焚かうとしてゐるところだつた。

ネフリユードフが最初の扉を開けようとするところへ、つぎの扉から、マースロワが、前屈みになつて、ごみ屑の大きなかたまりを箒でストーブの方に押しやりながら出て來た。白いジャケットに、裾を端折り、埃よけに眉のところまで頭巾をすつぽりかぶつてゐた。

ネフリユードフを見ると、彼女は腰を伸ばして、羞かしさうに、しかし元氣よく、箒を棄て、兩手をスカートで拭いた。そして彼の前に來た。

「お掃除をしてるんだね。」ネフリユードフは握手して言つた。

「え、昔私にしてた仕事ですわ。」と彼女は笑つて、「でもこの埃つたら、それや大變なんですのよ、掃除の仕通しですわ。——さうだ、あの服、乾きまして？」

マースロワはシモンソンの方を向いて訊いた。

「もうちよつとだ。」シモンソンは、ネフリユードフがはつとするやうな一種特別の眼つきで、ちらと彼女を見ながら答へた。

「さう、では外套を持つて來て乾きませうね……私たち、みんなこゝにゐますのよ。」

彼女は二番目の扉から中に這入りかけて、一番目の扉の方をネフリユードフに指し示した。

ネフリユードフは指された扉を開けて中に這入つた。寢臺の端に小さなブリキのランプが置いてあ

つて、ぼんやり室内を照らしてゐた。空気が冷たくて、塵や湿氣や煙草の煙などが立籠めてゐた。ランプは間近の者だけを明るく照らしたが、寢臺は蔭になつてゐて、壁には黒い影がゆらく動いた。食事係になつた二人の男が湯や食物を調へるために出てゐるきりで、殆んど國事犯の全部がこの小さな部屋に雜居してゐた。ネフリユードフの古馴染のウエーラは、以前よりも瘦せて顔が黄色味を帯び、大きな、びつくりした時のやうな眼つきをして、新聞紙の上に坐つたまゝ、紙煙草を捲いてゐた。その手先が震へてゐた。

ネフリユードフが國事犯中で一番愉快な人物だと思ふエミリヤ・ランツェーワもゐた。この女は、この家事萬端の世話をして、苦しい境遇の中にも、親しみと樂しみの氣持をみんなに味はせたいと骨折つてゐるのだつた。そこで今、彼女は、袖をまくり上げてランプの傍に坐り、日焼けのした赤い手を器用に動かしてコップや茶碗を拭き、それを寢臺の端に擡げた白い布の上に並べてゐた。年が若く、利口で優しさうな顔をした女で、その顔は、につこりする、人のこゝろを捕へてしまふやうな生々した、いかにも樂しさうな表情に變つた。今も彼女はさうした笑顔をしてネフリユードフを迎へた。

「まあ、私どもは、ロシヤへお歸りになつたこと、思つてゐましたわ。」
隅の暗いところには、マリヤ・パウロウナもゐた。彼女は片言交りにしやべりつゞけてゐる小さな女の子の相手で忙がしかつた。

「よくいらつしやいましたね。カチュウシヤにお會ひになりましたか。こゝにもこんな客が來てゐますのよ。」と言つて、マリヤは女の子を指した。

瘦せ衰へた肺病のクルイリツォーフは、足を折り曲げ、兩腕を外套の袖に深く引つこめて、ぶるぶる震へながら、熱病患者のやうな眼でネフリユードフを眺めてゐた。

ネフリユードフはその方に近寄らうとしたが、扉の右手に、眼鏡をかけた、赤い縮れ毛の男が立つてゐるのに氣がついた。これは有名な革命家のノウォドウォーフだつたので、彼は急いで會釋だけした。この男は國事犯中、ネフリユードフの一番嫌ひな男だつた。

果してノウォドウォーフは顔をしかめ、眼鏡越しに青い眼を光らせながら細い手を差し出して言つた。

「どうです、旅は？ 愉快ですか。」

それは明らかに皮肉だつたが、ネフリユードフはそれに氣がつかない風を装つて、
「え、面白いことも澤山あります。」と答へた。そしてクルイリツォーフのところへ行つた。

ネフリユードフは表面知らぬ顔をしてゐたが、内心不愉快でたまらなかつた。何か厭がらせを言つたり、爲たりしてやらうといふ彼の氣持がはつきり現れてゐるその言葉に依つて、ネフリユードフの今までの、なごやかな氣分はずつかり毀されてしまつた。

「具合はどうです？」ネフリユードフは、憂鬱を感じながら、クルイリツォーフの冷たい震へる手を

握りながら言った。

「悪くはありませんが、寒いのでやり切れません。ぶぶ濡れですからね。」彼は外套の袖に兩腕をたたみこむやうにしながら、「恐しい寒さですね。そら、御覽なさい、窓硝子が毀れてるでせう。――それはそれとして、あなたはしばらくお見えになりませんかでしたね。」

「許されなかつたのです。なか／＼やかましくつてね。しかし、今日は士官が寛大に計つてくれましたよ。」

「寛大ですつてー！今朝その士官がどんなことをしたかマリヤに聞いて御覽なさい。」

マリヤは隅から、今朝宿場を出發する時に赤兒のことから起つた騒ぎの頭末を話した。

「みんなが團結して抗議する必要がありますね。」と、ウエーラは、周圍を見まはしながら言ひ出した。「シモンソンさんが抗議したけれど、それくらゐでは足りませんわ。」

「あなたはカチュウシヤを探してらつしやるんぢやないんですか。」クルイリツォーフがネフリユードフに言った。「カチュウシヤは一日中働いてゐますよ。さつきはこゝを掃除してゐましたが今度はあちらの女部屋の方をやつてゐるんです。これで蚤を退治することが出来たら申し分ないんですがね。おやマリヤは何をしてゐるんだらう？」

「子供の髪を梳いてゐるんだよ。」と、ランツェーワが答へた。

「虱が飛んで来やしないかな。」

「大丈夫、注意してまますから。この子も少しは清潔になりましたよ。ちよつと抱いて、くれない。」とマリヤはランツェーワの方に向いて、「私、カチュウシヤのお手傳ひして来るから、お願いよ。」

ランツェーワは女の子を受けとつて、そのまる／＼と肥つた、むき出しの兩手を自分の胸に當てがつて、砂糖のかけらを少しやつた。

マリヤが出て行くと、入れちがひに食事係になつた男が二人、湯と食物を持って這入つて来た。

一〇

やがて、ストーブには火がよく燃えて温かく、お茶はコップや茶碗に注がれて牛乳まで加へられた。みんなはティブル代りの寢臺の端に寄つて、食べたり飲んだりした。ランツェーワは箱に腰をかけてお茶の給仕をした。大抵は彼女のぐるりに集まつてゐたが、クルイリツォーフだけは濡れた外套を脱ぎ、乾いた縞の服にくるまつて、もとの自分のところでネフリユードフと話してゐた。

道中で雨に會つたりなどして一時は寒くてたまらなかつたが、この汚い、埃だらけの部屋をすつかり掃除し、きちんと散らかつたものを片づけてから、出来たてのパンを食べ、熱いお茶を飲んだので

彼等はみんな、のんびりしたい、氣持になつた。壁一重へだて、刑事犯たちの聲音や叫び聲や罵り聲などが聞えて来た。すると、自分たちの周圍を思ひ合して、彼等は尙更のびやかな楽しさを感じるのだつた。少しの間にしても苦しみをのがれた

い氣持で、彼等は興奮しきつてゐた。そして、いろんなことを元氣よく話し合つた。

どこの男女間にも起るやうなことが、彼等の間にも起つてゐた。好きだとか嫌ひだとか戀だとか愛だとか言ひ合ふ間柄に大抵のものがなつてゐた。ノウオドウォーフは綺麗で愛嬌のあるグラベツといふ若い女と戀仲だつた。この女は考へも何もなくて、革命問題などにも無頓着だつたが、時代の風潮に捲きこまれて、どうかした拍子に追放の憂目を見るやうな事になつたのである。昔から男を手に入れることを何よりの楽しみにしてゐたので、裁判中も入獄中も追放中も、そのことばかりに憂身をやつして来た。今度ノウオドウォーフをとりこにしたので大得意であるが、實は自分の方でも、すつかり男に參つてしまつてゐた。

ウエーラは戀はしたかつたが何しろ相手がなかつた。で、ナバートフだの、ノウオドウォーフだのに片思ひを寄せてゐた。クルイリツォーフも同じく片思ひではあつたがマリヤに對して戀らしいものを（普通男が女に感じる通りの）感じてゐた。しかし彼女の戀愛觀を知つてゐたから、止むを得ず、その切ない思ひを押しかくして、たゞマリヤの示してくれる友情だけで満足しなければならなかつた。

ナバートフとランツェーフとも深い仲になつてゐた。

そんなわけで、この連中で全然戀を知らぬものといつたら、マリヤと、コンドラティエフといふ女

一一

隣室か、役人の聲が聞えたので、一齊に靜かになつた。點呼の時間になつたので、軍曹が二人の護送兵を從へて這入つて来た。

軍曹は一人々々數へたが、ネフリユードフの前に来ると、慣れなくしく言つた。

「點呼が濟んだらもういけません。直ぐにお歸りにならなきや……」

その言葉の意味がよくわかつたので、ネフリユードフは傍へ寄つて用意して置いた三ループリを握らせた。

「あ、宜しい。では御ゆつくり……」

軍曹が出て行かうとする途端に、今一人の軍曹が這入つて、その後から瘦せこけて薄い髭を生やした、眼の下に傷跡のある男囚が、のこくついて来た。

「わしは娘のことで參りましたが。」と、その男は言つた。

「あ、父ちゃん、来た。」

鈴のやうな子供の聲がした。今、ランツェーフはマリヤやカチュウシヤと一緒に、彼女自身の下袴を縫ひ直して子供の着物をつくつてやつてあるところだつた。

「おゝ、あたか、わしだよ。」父親はやさしい聲をかけた。

「この子は氣持がよささうですよ。こゝに置いといておやんなさい。」マリヤは傷跡のある男の顔を氣の毒さうに見ながら言つた。

「をばちやんたち、あたいに、きれいなおべ、作つてくれるんだよ。」女の子はランツェーワの手許を指して、「ほら、赤いおべ。」と、しゃべりつづけた。

「をばちやんたちとお寝んねしたい？」ランツェーワは子供を撫でながら訊いた。

「あ、お寝んねするわ。父ちやんも？」

ランツェーワはにつこりして、「いえ、父ちやんはいけないの。」と言つて父親の方へ向いた。「こんな風だから置いときなさいよ。」

「さうだ、預けておけ。」と軍曹も口を出した。そして扉口から消えた。

兩腕を枕にして、ぢつと黙つて横たはつてゐたシモンソンが、靜かに立ち上つて、なるべく坐つてゐる人々の眼に觸れないやうに、ネフリユードフの傍に寄つて來た。

「さつき、お話があると申し上げましたね、今、ちよつとお耳を貸していたゞけませんか。」と言つた。

「どうぞ。」

ネフリユードフも立つて、彼の後にしたがつた。

カチユウシヤは、はつとしたらしく見上げたが、ネフリユードフの視線とぶつかつて、さつと顔を根らめ、どきまきして首を振つた。

「實は……」シモンソンは廊下に出ると言ひ出した。そこには刑事犯の騒がしい聲が聞えて來るので、ネフリユードフは眉をしかめたが、シモンソンは、そんなことには平氣で、極めて眞面目な、何も彼も打ち明けるといふ調子だつた。

「カチユウシヤとあなたとの關係はよく知つてゐるのですが……だから、お話ししなければならぬと思ふのですが……」

その時、扉の傍で、誰かの争ふやうな唸鳴り聲がしたので話をつゞけることが出来なかつた。

「この間抜け野郎。俺の知つたことぢやねえよ。」と、一つの聲が喚いたかと思ふと、「何を、こん畜生、息の根のとまらねえうちに消え失せろ！」と、嘎れた聲が應じた。

そこへ、マリヤが部屋から出て來た。

「こんなところで話なんか出来ないぢやありませんか。」彼女はネフリユードフ達に聲をかけた。「向うへいらつしやいよ。ウエーラだけしかゐないから。」

そして彼女は片一方の扉を開けて、やはり小さな部屋に案内した。それは獨房として作られたらしいが、今は女囚用に當てられてゐた。ウエーラは頭から布をかぶつて寢臺に横たはつてゐた。

「ウエーラは頭痛がするつて伏せつてゐるんですから、お話なんか聞きはしませんよ。私は今向うへ參ります。」とマリヤは言つた。

「いや、こゝにあてて下さい。僕は誰にも秘密といふものを持つてゐないのです。あなたにはなほさらです。」

「さうですか。」

マリヤは子供のやうに體を左右にもちく動かしながら、寢臺の向うにやゝ離れて腰を下し、その美しい眼をどこか遠いところを追ふやうに見据ゑた。

「で、カチュウシャとあなたとの關係はよく知つてゐるのですが……」と、シモンソンは同じことをくり返して、「だから、僕とカチュウシャとの關係もお話しなければならぬと思ふのです。」
ネフリードフはシモンソンの調子が極めて單純率直なのに感心した。

「とおつしやると？」

「僕はカチュウシャ・マースロワと結婚したいのです。」

「まあ！」マリヤはシモンソンの顔を見つめて驚きの聲を擧げた。

「で、結婚の申込みをすることに決心しました。」

「僕にはどうにもなりません。あれの一存にあることですから。」

「え、ですが、あなたに相談しないでこれを決定することは、カチュウシャには出来ないでせう。」

「どうしてです？」

「あなたとの關係がきつぱり片づかないうちは、どうにも決心が出来ませんからね。」

「しかし僕の方ではきつぱり片づいてゐるのです。僕はただ僕の義務と考へてゐることを實行して、出来るだけあれの苦しみを軽くしてやりたいと思つてゐるのです。どんな場合でも、束縛なんかしようと思つてゐません。」

「ところが、あれはあなたの犠牲を受けたくないのです。」

「これは犠牲といふほどのことぢやありません。」

「而もその受けたくないといふ氣持は決定的のもです。」

「なるほど、そんなら別にお話になるには及ばないでせう。」

「カチュウシャはそのことをあなたに承認していただきたいといふのです。」

「といふと、僕が義務だと考へてゐることを實行してはならない。それを承認しろといふのですね。そんなことは出来ません。僕は自由ぢやないのです。しかし、あれは自由ですから何をしようと勝手です。」

シモンソンは、それに對しては黙つてゐた。そして、ちよつと考へてから言つた。

「さうですか、あれに話しませう。が、僕たちが戀愛關係になつてると誤解されては困ります。僕はただあれを、非常な苦しみを通つて來た、稀に見る秀れた人間として愛してゐるだけです。だから、あれからは何を求めようともしません。あれの境遇を、少しでも樂にしてやりたいと思ふばかりです……」

シモンソンの聲の震へてゐるのにネフリユードフは驚いた。

「あなたのお世話になりたくないといふのだつたら、僕が代つて世話をしやりませう。」とシモンソンはつづけて言つた。「あれの送られるところへはどこへでも一緒に行つてやりませう。四年は永くはありません。僕がその間傍にあたら少しはあれの荷も軽くなるだらうと思ひます……」

「僕としては、どう言つたらいいか、さうです、あれがあなたのやうな保護者を得たことを心から喜び……」

「それが實は聞きたかつたのです。」と、シモンソンはネフリユードフの言葉を遮つて、「あなたがあれを愛し、あれの幸福を望まれるなら、僕との結婚をも喜んで下さるに違ひない……」

「さうです！ 喜びます。」ネフリユードフは強く言つた。

「すべてあれの心に委せませう。僕としては、この惱める魂に慰安所を與へてやればいゝと思ふのです。」シモンソンは意外と思はれるほどの無邪氣な優しい調子で言つた。

シモンソンは立ち上り、氣はづかしさうな微笑を浮かべ、ネフリユードフに接吻した。

「では、あれに話させよう。」と言つて出て行つた。

一一一

シモンソンを見送つてから、マリヤは、「あなたはどうお思ひになりますの？ 戀ですわね。まつ

たく戀ですわね。あの人、あのシモンソンさんが戀、而も馬鹿々々しい子供みたいな戀をしようとは夢にも思はなかつた。妙なものですわね、正直に言ふと、可哀さうだわ。」と言つて、溜息をついた。

「だが、あれは、カチュウシヤはどう思つてるでせうか。」と、ネフリユードフは訊いて見た。

「あの人は……」言ひかけて、出来るだけはつきりした返事をしようと思つたらしく、しばらく考へた。「あの人は、御承知の通り、あんな生活をして來たのに、ごく堅い、美しい心の持主です。そしてあなたを本當に愛してゐます。愛してゐるからこそ、あなたがあの人からお離れになるのを、あなたのために望んでゐるのです。あなたと結婚することは以前の生活よりもつと恐いことだと思つて、お断りしてゐるのでせう。それに、あなたが傍にいらつしやると落ちつかないのです。」

「ぢや僕はどうしたらいいだらう？ 消えてしまはなきやいけませんか。」

マリヤは可愛い子供のやうな微笑を浮かべて、「まあ或程度まで消えておしまひになるんですね。」

「それは冗談ですけど……カチュウシヤは、きつと、あの人の有頂天になつた馬鹿々々しい戀を見て——もつともまだ打ち明けてはゐませんけれど、嬉しいやうな恐いやうな氣持であるんでせう。私は御存知の通り、こんなことに就いてかれこれ言ふ資格はありませんが、シモンソンの愛といふのも要するに世間普通の男の感情なんで、それが假面をかぶつてるんだと思ひます。プラトニック愛のやうなことを言つてはゐますが、その底には、やはり卑しいものが……ノウオドウォーロフとグラペ

ツとのやうなものが潜んでゐると思ひますわ。」

マリヤは自分の得意な問題に論及して横道に逸れてしまつた。

「それはそれとして僕はどうしたらいいでせう？」

「カチュウシヤにすつかりお話しなすつたらいいでせう。萬事はつきりさせて置くことが肝心です。」

お話しなさい、私が呼んで来て上げますから。」

「さうですね、ではお願いします。」

マリヤは出て行つた。

ネフリユードフは小さな部屋に一人残された。隅に眠つてゐるウェーラの微かな呼吸が聞えて来た。扉をへだてた向うから刑事犯たちの聲も絶間なく騒がしかつた。

シモンソンの話したことは、ネフリユードフが時々氣が弱くなつた時には堪へられさうにないと思ふほどの重苦しい義務から救つてくれるものだつた。しかし、彼は今、單なる不快ではなく、寧ろ苦痛に近い氣持だつた。「シモンソンの申し出に依つて自分の犠牲的精神の特殊性は失はれてしまつた。したがつて、誰から見てもその價值が低下してしまつた。何等因縁のないシモンソンのやうな立派な男が一生の運命を彼女と共にしようといふのだから、自分の犠牲性も、さまで大したことではなくなるのだ。」と、ネフリユードフは思つた。そこには普通の意味の嫉妬も多分に交つてゐたかも知れない。彼女の愛には慣れきつてゐたので、彼女が自分以外の男を愛すのをゆるす氣持にはなれなかつたのである。

また、彼女の服役中、一緒に暮してやらうといふ計畫を中絶しなければならぬのも残念だつた。

シモンソンと結婚すれば自分の必要はなくなるからである……。

かうして自分の感情を解剖して行つたが、それが濟まぬうちに、扉が開いて、カチュウシヤが這入つて来た。

「マリヤが呼びに來ましたので。」

「あ、話したいことがある。まあ、おかけ。實はさつきシモンソンから話があつたんだ。」

彼女は腰を下し、兩手を膝の上に重ねて落ちついてゐるやうだつたが、シモンソンの名を聞くと眞赤になつた。

「どんなことを話しましたの？」

「お前と結婚したいと言ふのだ。」

彼女は急に困つたらしく顔をしかめたが、別に何も言はず、伏眼になつた。

「僕は同意、いや助言を求められたが、それはお前の一存にあることで、お前がきめなきやいけないと答へて置いた。」

「まあ、どうしたつてことでせう。」

彼女はいつも不思議にネフリユードフの心を惹きつける例の心持ち斜視の眼でちつと男の眼に見入

つた。

二人は數秒間、互ひに見合つたまゝ黙つてゐたが、その眼差しは口よりも雄辯だつた。

「お前がきめなければいけない。」

「何をきめるんでせう？ 何も彼も、とづくにきまつてしまつてゐるのに。」

「シモンソンの申込みを承諾するかしないかをきめるんだよ。」

「人の妻に——私のやうな、こんな罪人が、なれるものですか。シモンソンさんの一生まで臺なしにすることはありませんわ。」と言つてまた彼女は澁面をつくつた。

「しかし放免になつたら？」

「あゝもうそんなことはおつしやらないで下さい。」

彼女は立ち上つて部屋を出て行つた。

一三

ネフリユードフはカチュウシヤの後から男囚の部屋に歸つて見ると、そこでは皆が興奮してゐた。誰をでもよく知り何をでもよく嘆き出すので有名なナバートフが、今一同を驚かすやうなニュースを得たところだつた。それは革命家のベトリンが、壁に書きつけて置いた覺え書を彼が発見したといふので、それに依つて、徒刑を宣告されて、もうとづくにカーラへ到着してゐるものと誰からも思はれてゐたベトリンは、ごく最近、刑事犯中だ。一人の國事犯として、こゝを通過したといふことがわかつた。

覺え書には「八月十七日、自分はたゞ一人刑事犯とともに護送された。初めはネウエーロフもゐたのであるが、彼はカザンの精神病院に於いて縊死した。自分は心身ともに健全である。諸君の健在を祈る。」

一同はベトリンはどうしてゐるだらうかとか、ネウエーロフ自殺の原因は何だらうかなどと盛んに論議してゐたが、クルイリツォーフだけは黙つて何か考へこんでゐた。

「夫がいつだつたか話してゐましたわ、ネウエーロフはまだ要塞監獄にゐる時分から幻影を見るくせがあつたんですつて。」とランツエーワが言つた。

「さうだ、あの男は詩人で夢想家だつたからね。あゝいふ種類の人間は獨房では堪へられないよ。」と、ノウオドウォーフも口を出した。「僕も獨房にゐたことがあるが、決して空想なんかしないで、日々の豫定を系統的に立て、ゐたから、いつだつて平氣だつたよ。」

「それや平氣であられるさ、僕なんか收監されるととても嬉しかつたもんだ。」ナバートフは陰氣な空氣を一掃するつもりで元氣よく、しやべり出した。「娑婆にありや、いろんなことが氣がかりになるものさ。——掴まへられやしないか、同志に迷惑がかゝりやしないか、仕事全體をしくじりやしないかなどとね。ところが、愈々掴まつて見ると、すつかり責任といふものがなくなつて、やつと休息が

出来る、——つまり寝ころんで一服することが出来やうツてもものさ……」

マリヤはクルイリツォーフの俄かに一變した顔色を、さつきから、まじく見つけてゐたが、

「あなたはあの人をよく知つてるの？」と、その時、ふいに訊いた。

「ネウエーロフが夢想家だつたらうか？」クルイリツォーフは長い間叫んだり歌つたりした後のやうな喘ぎ方をして言ひ出した。「僕等の這入つてた監獄の門番が始終言つてたが、あのネウエーロフといふ男は『世の中にめつたに現れない』男だつた。さうだ……水晶のやうな質を持つてゐたから誰だつて腹の底まで透き通して見ることが出来たんだ。誰も決して言はなかつたし、蔭日向もなかつた。皮膚が薄かつたばかりぢやない、神経までが外部に露出してゐたのだ。さうだ……複雑な、豊富な天分を持つてゐた。このへんにごろ／＼してゐる連中などは……いや、そんなこと、言つたつて始まらない。」と、ちよつと一休みして、今度は、ぶり／＼した調子でつづけた。「われ／＼はまづ大衆を教育して後、社會生活の様式を變へようか、それとも、まづ社會生活を變へる方がいゝか、といふやうなことを論じてゐる。また、戦ふ方法はどうか、平和宣傳がいゝか、恐怖主義がいゝかなどと論じてゐる。然るに彼等（政府當局者）は論議などはしない、仕事だけをどしくやる。人が何百何千殺されやうと、そんなことは平氣なのだ。どんな人間が死なうと平氣なのだ、いや、立派な人間が死ぬることを願つてゐるのだ。さうだ、ヘルツェンは十二月黨員が根絶した時、われ／＼社會の水準が低下してしまつたと言つたが、僕もたしかにさう思ふよ。その後、ヘルツェンとその一黨も根絶してしま

ひ、また今ネウエーロフも……」

「みんなやられることもあるまいよ。」ナバートフがさつきからの陽氣な調子で應じた。「いつだつて根分けをするくらいは残るさ。」

「いや、彼等（政府當局者）を可哀さうだなどと思つたら、みんなやられてしまふぞ。」クルイリツォーフは聲を高くして、他人に口を入れさせなかつた。「煙草を一本くれないか。」

「煙草？ あなたにはいけないわ。お止しなさいな。」と、そこへマリヤが口を出した。

「うつちやつといて下さい。」

彼はぶり／＼して火を點けたが、直ぐに咳をはじめ胸をつまらせた。漸く痰を吐き出してから更につづけた。

「われ／＼のやつて來たことはまちがつてゐた。議論にあらず、團結して彼等を……滅ぼしてしまふのだ。」

「だつて彼等も人間ですよ。」と、ネフリエードフが言つた。

「いや、人間ぢやない。あんなことの出来る奴は人間ぢやない……。爆弾だの氣球だのといふものが發明されたといふ話だから、誰か氣球に乗つて爆弾を投じ、南京蟲か何かのやうに、奴等を皆殺しにしちまふといふ。何故つて……」

そこまで言ひつづけて彼は眞赤になつたかと思ふと、前よりもひどく咳をしはじめた。——口から

血が流れ出した。

ナバートフは雪を取りに駆け出した。マリヤは何か薬草の水を出してすゝめた。が、彼は苦しきうに喘いで、ほつそりした白い手で彼女を押し退けるやうにして眼を瞑つた。やがて、雪や冷水でや、落ちつかせてから寢床に運びこんだ。「さよなら。」と、ネフリユードフは皆に言つて、そこに來てしばらく待つてゐた軍曹と一緒に部屋を出て行つた。

刑事犯たちは大抵寢靜まつてゐた。部屋の中に收まりきらないので、一部は廊下に寢ころんで袋を枕にしたり、濕つばい獄衣にくるまつたりしてゐた。開けつばなしになつた扉からは鼾や唸りや寢言などが洩れて來た。獨身者用の部屋で數人のものが蠟燭をつけて起きてゐたが軍曹の通るのに氣がついて直ぐに灯を消してしまつた。

もう一人、廊下に裸體になつてランプの下で、シャツの虱を取つてゐる年寄りがゐた。この邊の臭氣に比べれば國事犯の部屋の不潔な空氣の方がどれほどいゝか知れないくらゐだつた。煤けたランプは薄暮くて、まるで霧の中を歩いてゐるやうで呼吸をするのも苦しかつた。廊下を歩くには、空いてゐるところを念入りに探して、一歩々々と、そこに足を嵌めて行かなければならない。うっかりしてゐると寢てゐる者を踏みつぶしさうだつた。

門を出ると、ネフリユードフはほつとした。そして、しばらく凍つた空氣を深くく胸一杯に吸ひこんだ。

一四

空は晴れて星が瞬いてゐた。ところ／＼に泥濘があるきりで道は大抵かたく凍てついてゐた。ネフリユードフは宿に辿りついて眞暗な窓を叩いた。肩のいかつい下男が素足で扉を開けてくれた。左關右手の小屋からは、そこに眠つてゐる馭者の大きな鼾が聞え、前方の庭からは澤山の馬が燕麥を食べる音が聞えて來た。

ネフリユードフは服を着代へて長椅子の上に旅行用の枕を當て、横になつた。そして、今日見たり聞いたりしたことを考へて見た。彼は歸る時の廊下で、十歳くらゐの少年が、或囚徒の足を枕にして、汚物の一杯流れ出してゐる監房用の桶の横に、ぐつすり眠つてゐるのを見たが、それが何より一番恐ろしいものに思はれた。

その夜、シモンソンやカチュウシャと話したことは、實に意外なことでもあり、重大なことでもあつたが、ネフリユードフはいつまでもそれを考へてゐなかつた。この事件に對する彼の立場は餘りに複雑であり餘りに漠然としてゐたので、かへつて考へないことにした。が、あの不幸な人々の姿——あの不潔な空氣の中に喘ぎ、あの臭氣の桶の傍に眠る人々の姿、ことに囚徒の足を枕にして汚物の上に横たはつてゐる少年の姿は、實に鮮やかに彼の心に蘇つて來た。そして拂はうとしても拂へなかつた。

どこかで、遠いところで、或人間にあらゆる侮辱と虐待とを課して苦しめてあるものがあるといふことを聞くのと、現在三ヶ月間に亘つて毎日、その課せられる侮辱と虐待とを直接見るのとの間には、非常に大きい相違がある。で、ネフリュードフは、かう考へた。この三ヶ月間に一再ならず「他人の見ないものを見てゐる自分が狂者なのだらうか、それとも、自分の見てゐることを平氣でする彼等が狂者なのだらうか？」と自問して見た。しかも、彼等（その彼等の数は實に多かつた）は、ネフリュードフにとつては慄然とするやうな行爲を、極めて平氣で行つてゐる。恰も必要なことをしてゐる、重大な有益なことをしてゐるかのやうに。して見ると彼等を狂者であると認めるわけにも行かない。といつて、自分の考へがはつきりしてゐることを意識する以上、自分を狂者だと認めることも出来ない。——そのため、彼は始終どちらが本當か、思ひ迷つてゐたのである。

この三ヶ月間に見聞したことに依つて、ネフリュードフは次のやうな感想を得た。——自由を解放された人々の中から、裁判と行政との手段によつて選出されるもの、つまり捕縛せられるものは、最も神経質のもの、最も激烈なもの、最も感激するもの、最も天分のあるもの、最も強いもの（しかし同時に比較的用心深くない、狡猾でないもの）である。而もこれ等の人は自由に勝手に振舞つてゐる人々に比して少しも危険ではないのに、監獄にぶちこまれたりシベリヤに流されたりして、何ヶ月も何ヶ年も、たゞ食物だけを興へられて怠惰な生活を強ひられてゐる。自然からも家庭からも有益な労働からも離れてゐなければならぬ。つまり自然的、精神的な生活に必要なあらゆる要件から隔離されてゐる。——これがまづ第一の印象だつた。

第二に、これ等の人は、この制度の下にあらゆる無用な侮辱——鎖だの、剃髪だの、獄衣だの、侮辱を蒙つてゐる。即ち弱きものが正しい生活をする重大な原動力となつてゐるところの、輿論の認識、廉恥心、人格の意識などといふものを悉く剝奪されてゐる。

第三に、これ等の人の生命は、監獄内に共通の傳染病、疲勞、殴打（日射病、溺死、燒死等の特殊の場合をわざ／＼擧げる必要はない）等に依つて不斷に脅やかされてゐる。であるから極めて道義心に富んだ人物でも、自己防禦の感情から、恐るべき殘虐行爲を犯さざるを得ない（また他人のさうした行爲を許さざるを得ない）やうになるのである。

第四に、これ等の人は無賴漢や人殺しや強盜などと接觸しなければならぬので、さまで墮落してゐないものも忽ちその影響感化を受けてしまふのである。

第五に、いかなる暴虐、殘忍、無道も、それが政府の目的に適つてゐる時には公然許されてゐるといふ事實が非常に強くこれ等の人の頭には印象されてゐる。何に依つてか？ 即ちこれ等の人に加へられる政府側の恐るべき非人道的行爲に依つて——例へば、子供や女や老人を苛酷に扱つたり、吾や棒で殴打したり、脱走者を、その生死如何に拘はらず捕へて突き出したものに褒美を興へたり、夫婦を引き離して、他人の妻と夫、他人の夫と妻とに性的共同生活を営ましたり、銃殺または絞刑に處したりすることに依つて。

であるから、それ等の自由を剝奪せられた人々、困苦悲惨の境遇にある人々が、自分たちの殘虐行爲もまた許されて然るべきだと思ふのは當然のことである。

すべてこれ等の制度は、墮落と悪徳とを醸成し、その醸成された墮落と悪徳とを廣く民衆の間に傳播せしめるために、わざ／＼作られたもの、やうに思はれる。他のいかなる制度も、その點に於いては匹敵し得ないのである。

「人民の大多數を最もよく最も確實に墮落せしめるには、いかなる手段方法を要するか」といふ問題が呈出されてあるやうなものである、とネフリユードフは考へながら、改めて監房内や宿場などで見聞したことを思ひ出した。年々、何萬、何十萬といふ人間が墮落の頂點まで運ばれ、愈々完全に墮落すると、その墮落菌を廣く民衆の間に分布するために放免せられるのである。

ネフリユードフはテューメン、トムスクその他の監獄や、護送中の宿場などに於いて、いかにこの目的が首尾よく果されてゐたかを親しく目撃した。ロシヤ農民としての社會的、基督教的道徳心を持つてゐる極めて單純素朴な人々も、いつのまにか一變して、利益になることなら他人にいかなる暴行を加へたつて一向差支へないと考へるやうになつてしまふ。監獄生活をして來た人々は、自己の經驗した事實から推して、教會の牧師や、道學者などの説く愛と憐憫との道徳律は現實の生活に於いては決して存在しない、だから、吾々もそれを守る必要はない、と心の底から思ひこむやうになる。ネフリユードフはそれを自分の知つたあらゆる囚徒の上に見た。フョードロフにしても、マカールにしても

も、タラスにしても皆さうである（タラスの如きは護送隊と僅々二ヶ月間一緒にゐたばかりで既に道徳念を失つた議論をするやうになつてネフリユードフを驚かした）この旅行中に聞いた話であるが、或脱走囚は密林に逃げこむ時に仲間のことを無理につれて行き、殺してその肉を食つたといふことである。而もこの鬼畜に等しい蠻行はしば／＼あるといふことであつた。

こんな風に、あらゆる悪徳が、かうした制度に依つて特別に養成せられて行つたらどうなるであらうか。恐らくロシヤ人は「一切の行爲は許さるべきである、禁すべき行爲は何一つない」といふ最近のニイチエ主義にかぶれた無賴漢と同じやうなものになつてしまふであらう。初めはこの主義が囚徒の間に、やがては一般民衆の間にひろがつて行くであらう。

かうした制度を何故存続するか？ それに對する辯解は要するに、犯罪を防止し、恐怖の念を興へ、犯人を矯正するのが目的で、法律書に記載されてある通りの「合法的復讐」であるといふに盡きである。しかし、實際に於いては、その目的は少しも果されてゐないのである。即ち、悪徳は防止されるどころか、益々蔓延してゐる。恐怖の念を起すどころか、益々元氣づいてゐる（浮浪人の中には監獄志願のものさへ澤山あるのだ）矯正されるどころか、益々あらゆる罪惡を組織的に宣傳してゐるのである。

「では何故こんなことが行はれてゐるのか？」とネフリユードフは自問したが答は得られなかつた。殊に、彼にとつて不思議だと思はれるのは、これが偶然に、過失に依つて、一時的に行はれたのでは

決してないといふことである。幾世紀の間、絶えず行はれて来たといふことである。たゞ最初は鼻や耳を切り、つきには焼印を押ししたり鐵棒に縛つたりしたものが、今では手錠を嵌めて汽車で運搬されるといふだけの相違である。

當局者は言ふ。「ネフリユードフの憤慨するやうなことは、監獄の設備不完全のために生じるのである。したがつて、最新式の監獄さへ設立すれば忽ち改善されるものである」と。しかし、この議論は彼を満足させなかつた。何故なら、彼の憤慨する事實は監獄の設備の不完に依つて生じたのではないからである。彼は電鈴を装置した模範的監獄のことも、電気死刑のことも書物で讀んで知つてゐたが、さうした美化された殘虐に對しては、より以上の反感を覺えざるを得なかつた。

では、何が最もネフリユードフの反感を唆つたか？ それは裁判所その他諸官省の官吏である。彼等は或人民の行爲を、彼等同様の官吏の手で書かれた法文に照らし合せ、無理やりに或條項に當て嵌めて、その條項通りに、そのいはゆる犯罪者を再び出會はないやうなところに送つてしまふといふだけの仕事をしてゐるために、人民から擄取した莫大な俸給を貰つてゐるのである。而も一方の人間は殘忍無情な典獄や看守や護送兵などの意のままに苦しめられて遂に精神的にも肉體的にも滅びてしまふのである。

ネフリユードフは監獄のことを親しく知つて、かう考へた。「囚徒の間に蔓延してゐる惡徳、例へば淫酒、賭博、暴行、その他一切の蠻行は（食人行爲の如きですらも）決して、偶然に起るのではない。變質性、または先天的犯罪性なるものが存在してゐるために起るのでもない。實は、人間が人間を罰し得るといふ間違つた考へから必然的に起る結果である。人間の肉を食ふといふ鬼畜の所業も、密林中で始まつたのではなく、各官省や裁判所などで蒔かれた種子が、たま／＼密林中で實を結んだに過ぎない。法官といふ法官、官吏といふ官吏は悉く、正義をも、人民の幸福をも全然顧慮しようとはしない。たゞ俸給を貰ふために、これ等すべての墮落の原因となる仕事をしてゐるだけのことである。

「では、すべては單なる誤解に基づいてゐるのであらうか？ 法官、官吏に俸給と賞與とを保證してやつて現在行つてゐることを止めさせるわけには行かないものか……」

ネフリユードフは、そんなことを考へつゞけた。そして漸く二番鶏が鳴きやむころになつて、深い眠りに落ちた。

一五

あくる朝、眼をさますと、宿の主婦が、兵隊さんが持つて来たといつて、一通の手紙を渡した。マリアから寄越したもので、クルイリツォーフの發作は豫想外に悪いので、「彼をこゝに残し、私たちも一日滞在しようと思つたのですが、それは許されませんでした。で、連れて出發しますけれど尙悪くなりはいないかと心配です。つぎの町へ着きましたら彼を残して置くやうに、そして誰か一人附

き添つてやるやうにしたいのですが、その御盡力を願へませんでせうか。その許可を得るために、私が彼と結婚しなくてはいけないやうでしたら、無論私はさうするつもりでをります。」とあつた。ネフリユーロフは下男に馬車の用意を頼んで出發の準備にかゝつた。二杯目のお茶を飲み終らないうちに、三頭立の馬車が、鈴を鳴らしながら、石のやうに凍てついた道に鞭の音も高くやつて來た。護送隊に追ひつゝために、出來るだけ早くと命じたので、馭者は鞭をびしく鳴らした。共同牧場の門を過ぎたところで、荷物や病人を載せた囚徒用の馬車に漸く追ひつくことが出來た。士官は先頭だつたのでそこにはゐなかつた。一杯やつて來たらしい兵卒たちが陽氣にしゃべりながら道の片側を歩いてゐた。

最後の馬車三臺には、三人づゝの割合で國事犯の連中が乗つてゐた。クルイリツォーフはその三番目の車の乾草を積み重ねた上に、枕をして横になり、その傍にマリヤが座を占めてゐた。ネフリユーロフは下車して、彼の前に近づいた。

酔つぱらつた護送兵の一人が片手を舉げて振つたが、ネフリユーロフは見向きもしないで、クルイリツォーフの車の縁を掴んだまゝ、歩き出した。口をハンカチで蔽つたクルイリツォーフは昨日よりも顔が青くて瘦せたやうに見えた。

がたつく馬車に體を揺られながら彼はネフリユーロフの顔に、その大きな美しい眼を据ゑた。が、容態を訊かれると、眼を閉ぢ頭を振るきりで何も答へなかつた。馬車の動搖を我慢するために全精力

を費してゐるといふ風だつた。附き添ひのマリヤは、彼の容態をいかにも案じてゐるといふ意味のこもつた視線をネフリユーロフに送つてから、直ぐに快活な調子になつてこんなことを話し出した。

「あの士官は自分ではづかしくなつたらしいのですよ。あの女の子の父親は今日は手錠を許されて、嬉しさに子供を抱いてゐますわ。カチュウシヤとシモンソンも一緒です。それから、私のかはりにウエーラがそちらに這入つてゐます。」

その時、クルイリツォーフが何か言つたやうだつたが、車輪のひびきが高いので聞きとれなかつた。彼は咳を咳へようとして顔に皺を寄せながら首を振つた。ネフリユーロフが耳を近づけると、彼はハンカチから口を出して、小さな聲で、「大分よくなりました。風邪さへ引かなさやい、のです。」と言つた。ネフリユーロフはさうだといふやうに頷いて見せた。

「三體の問題はどうになりました？ 解決は困難でせう？」と、クルイリツォーフは、苦しさに微笑して言つた。

ネフリユーロフには何のことかわからなかつたが、マリヤの説明に依ると、それは太陽と月と地球との位置を決定する有名な數學上の問題を意味するのだつたが、クルイリツォーフは冗談半分に、それをネフリユーロフと、カチュウシヤと、シモンソンとの、三角關係に比較したのである。クルイリツォーフは、マリヤが自分の冗談をちやんと解釋してくれたので満足らしく頷いた。

「なるほど、さうですか。」ネフリユーロフは答へた。「然しこの解決は僕がすべきぢやありません。」

「手紙はお手に這入りまして？ 御盡力願へますでせうか。」

「え、。」
マリヤの不意の質問に、ネフリユードフはたゞかう答へたが、クルイリツォーフの顔に不快の色が漂つてゐるのに気がついたので、そのまゝ自分の馬車のところへ引き返した。

長蛇のやうな列は一マイル近くもつゞいてゐた。ネフリユードフは馭者をせき立て、次第にそれを追ひ越して行つた。

カチユウシヤの青いシヨール、ウエーラの黒い外套、シモンソンの編細工の帽子が見えて來た。三人竝んで歩きながら何か熱心に話してゐた。

彼等はネフリユードフを見るとお辭儀をし、シモンソンは眞面目臭つて帽子をつまみ上げた。ネフリユードフは別に話すこともなかつたので、その儘馬車を走らせて、彼等をも追ひ越した。道が平らになつて速力は益々速くなつたが、時々、荷車の行列を避ける爲に横に逸れなければならなかつた。深い轍の跡の刻まれた道は、針葉樹の密林に這入つた。兩側には黄ばんだ葉を蹴へしてゐる樺などの樹が入り交つてゐたが、やがて護送隊のおよそ半ばを追ひ越して、その森の端れに出ると、兩側に廣々とした野原が開け、遠くの方に、修道院の金色の十字架と圓屋根とが幾つか見えて來た。

雲は散り、空はからりと晴れた。太陽に照らされた木葉や水溜りや會堂の圓屋根や十字架などが、きら／＼光つた。右手には遠い連山が青白く見えて來た。

馬車は大きな村に這入つた。この邊でなければ見られぬ風變りな帽子や上着をつけた人々が騒がしく村の往還を歩いてゐた。愈々町に近づいたらしい。馭者は右側の馬をぎゅツと引きしめ一鞭當て、更に勢ひよく走らせた。

眼の前には筏で渡らなければならぬ河が見えてゐた。筏は、今丁度こちらに向つて、河の真中あたりまで進んで來たところで、約二十臺ばかりの車が岸にとまつてそれを待つてゐた。流れに逆らつて河上に漂つてゐた筏は、やがて急流に運ばれつゝ、下つたかと思ふまに、忽ち乗場に近づいて來た。

船頭は慣れた手つきで綱をはふり投げて棒杭に縛りつけた。そして横木をはずして、筏の上の馬車を岸に上げ、岸に待つてゐた馬車を乗せはじめた。

筏は一杯になつた。馬は水流におびえて脚をばた／＼させた。渦まき流れる水は筏の腹にぶつかつて飛沫をあげた。

ネフリユードフも馬車と一緒に、その筏に乗りこんだ。船頭は乗りきれなかつたものゝ不平などには耳をも傾けないで綱を解いて出發した。

筏の上はひつそりした。船頭の聲音と馬の蹄の音としか聞えなかつた。

一六

ネフリユードフは筏の端に立つて、廣々とした河を眺めてゐた。と、二つの畫面が心の中に浮び上

つた。一つは死の瀬戸際にあるクルイリツォーフの、ぐらく揺れてゐる頭、今一つはシモンソンと竝んで元氣よく歩いてゐるカチュウシヤの姿だつた。第一の、死を豫期しないで死にかゝつてゐるクルイリツォーフの印象は、實に重苦しい傷ましい感じがした。今一つの、シモンソンのやうな男の愛を得て、今や正しい道に向つて一歩々々堅實な歩みをつゞけてゐる元氣に充ちたカチュウシヤの印象は、當然嬉しくなければならぬのに、ネフリユードフは、やはり同じ重苦しさを感じて、どうしてもその氣持に打ち勝つことが出来なかつたのである。

ちやうど、町のほうから、教會の鐘が餘韻をのこして聞えて來た。ネフリユードフを乗せて來た馭者をはじめ、すべてのものが十字を切つてお祈りをした。ところが、たゞ一人（ネフリユードフははじめ氣がつかかなかつたが）脊の低い、髪をぼうくさせた年寄りだけが、十字も切らないで、傲然としてネフリユードフのほうをながめてゐた。つきはぎだらけの上着とズボン、靴にも穴が開いてゐた。

「爺さん、どうしてお祈りをしねえんだよ？」と、ネフリユードフの馭者は帽子をかぶつて眞直に直しながら聲をかけた。「洗禮を受けてゐねえのか？」

「誰に祈るんだね？」年寄りは、待つてゐたと言はぬばかりに、一語々々に力をこめて言つた。

「誰にだつて？ きまつてるぢやねえか、神様によ。」

「神様——その神様ツてえのはどこにあるんだ？」

年寄りの言葉つきには、生真面目な、きつぱりしたところがあつたので、馭者の方は、いさゝか、たじくとした風だつたが、そんな素振りはなるべく見せないやうにして、

「どこつて、きまつてるぢやねえか、天にいらつしやるんだよ。」と答へた。大勢が聞いてゐるので恥をさらしたくないと思つた。

「お前、行つて見たのかえ？」

「行つたつて行かなくなつて、神様にお祈りしなきやいけねえなことは誰だつて知つたらあね。」

「爺さんは基督教信者ぢやねえな。邪宗門だらう。ぢや、勝手に何にでも祈るがいゝさ。」

誰か笑ひ出した。

「爺さんは何を信心してゐるんだね？」筏の端に自分の荷車にくつついて立つてゐた中年の男が口を出した。

「わしは何も信心してゐねえよ。自分の他には何も信じねえのだから。一年寄りの口調は相變らずきつぱりしてゐた。」

そこで、ネフリユードフも話の仲間入りをして訊いて見た。

「どうして自分を信じる事が出来るかね？ 爺さんだつて間違ひをすることがないとは限らないだらう。」

「いや、わしにはねえよ。」年寄りとしよは首くびを振ふつて何なんの躊躇ちゅうちよもなく言いひ放はなつた。

「では何故なぜいろんな宗旨しうしがあるんだらう？」と、ネフリユードフは更さらに問答もんたふをつづけた。

「それや人間にんげんが他人たにんを信しんじて自分じぶんを信しんじねえからさ。わしもやはり他人たにんを信しんじたため、藪やぶの中に迷まよひこんで、どうしても出でられなかつたものさ。古い宗旨しうしも新しい宗旨しうしも、モロカン宗しうもスコベツ宗しうも、みんな手前てまへ味噌みそばかり竝ならべてあやがる……。世よの中に宗旨しうしは多いが魂たましひは一つだよ、——わしにもお前まへさんにもあの男おとこにも、魂たましひは一つなんだ。だから、めい／＼が自分じぶんを信しんじさへすれや、皆みなが結びついちまふんだ、一つになつちまふんだ。」

老人らうじんは時々ときどきあたりを見廻みまわしながら、大聲おほこゑでしゃべり立てた。なるべく澤山たきさんのものに聞いて貰もらひたいらしかった。

「その信仰しんがうは以前いぜんから持つてるのかね？」

「以前いぜんからだとも。そのためにいぢめられ出してから今年ことしが二十三年にんねん目だよ。」

「いぢめられるとは、どうして？」

「キリストをいぢめたやうに、わしをいぢめるんだよ。わしを掴つかまへて、法廷はふていや牧師ぼくしや、ろくでもねえ學者がくしゃのところを引ひつぱりまはすのさ。氣違きちがひひ病院びやくいんへ入れられたこともある。だが、奴等やつら、わしをどうすることも出で来きやしねえ、わしは自由じゆうだからさ。『お前の姓名せいめいは何なんといふか』なんて奴等やつらは訊きくが、わしには姓名せいめいも何なんもありやしねえ。わしは一切いっせを棄すてたんだ、名なもなきや、住居すまひもなきや、故郷こきやうもねえ。

唯ただこの通りとおりのわしだ。『名なは？』『人間にんげんといふんだ。』といふより他ほかねえ。と『年は幾いくつか？』と來くる。『年としなんか數かずへたことはわねえ、また數かずへることも出で来きねえ』と言いふと『兩親りやうしんは？』と來くる。わしには親おやはねえ、父ちちは神かみ、母ははは大地だいち、それがあはかりだ。『では皇帝こうていはどうだ？』皇帝こうていを認みとめるか？』と奴等やつらは言いふ『認みとめねえかつて。皇帝こうていは自分じぶん自身の皇帝こうてい、わしはわし自身の皇帝こうていぢやねえか。』と言いつてやると『こんな奴やつとは話はなは出で来きん。』『わしも話はなしてくれつて頼たのみやしねえ。』といふやうなわけで、いぢめられるやうになつたのさ……』

「これからどこへ行くんだね？」と、ネフリユードフはつづけて訊きいた。

「氣きの向むいたところへ行くのさ。仕事しごとがあつたら働はたらくが、なけれや乞食こじきでもするさ。」

老人らうじんは筏いかだが向むかう岸きしに着きいたので話はなを止やめてぐるりを見みまはした。

ネフリユードフは財布さいふを出だして幾いくらかの金かねを惠めぐまうとしたが、老人らうじんは受うけなかつた。

「そんなものはいらねえ。パンならいたゞくが。」

「いや、失禮しつれい。」

「別に失禮しつれいでもねえ。わしは怒おこつたんぢやねえから。」

馬うまや車くるまが筏いかだから岸きしに運はこばれた。ネフリユードフの馭者ごしやは言いつた。

「旦那だんながあんな奴やつと口くちをお利りきになつたんで、びつくりしやしたよ。あいつア、ろくでなしの浮浪人うき浪じんに違ちがえねえ……」

坂の頂上へ登りつくと馭者は振り返つた。

「宿はどこにしますか？」

「お前の好きなどこにしてくれ。」

この町は屋根裏の窓、緑色の屋根、會堂、商店、巡査、どれを見ても、ごくありふれた、どこにもあるやうな町だつた。しかし、家が殆んど全部木造で、道路には鋪石がなかつた。

ネフリユードフは二ヶ月振り、これまで住み慣れたやうな、やゝゆつたりした清潔な宿に落ちつくことが出来た。案内された部屋は、がらんとして何の裝飾もなかつたが、長らく旅馬車や田舎宿や護衛隊の宿所などで暮して来た後なので、さすがにのんびりした気分になつた。そこで第一の仕事は虱を取つて體を綺麗にすることだつた。まづ荷物を解いて風呂に行き、それから都會風に姿を改めて、細のついたシャツ、ズボン(かなり皺にはなつてゐたが)フロックコート、外套、といふ服装で、この地方の長官を訪問することにした。

宿で呼んでくれた馬車に乗つて、彼は、番兵や巡査が門前に見張りをしてゐる宏莊な邸宅に着いた。邸宅の前後は庭園になつてゐて、白楊や樺の裸木が立つてゐる中に、松や樅などの常緑樹が濃い葉を擴げてゐた。

將軍は病氣引籠り中だつたが、ネフリユードフは無理に取りつきを頼んだ。

「お目にかゝるさうです。」と、受付は引き返して來て言つた。

ネフリユードフは書齋に案内された。

「さあどうぞ。寢間着のまゝで失禮ですが、お目にかゝらぬよりはましだと思つて。」と言つて、將軍はだぶくふとつて皺の寄つた頸を上着の中に引きすりこむやうにしながら、

「少し體の具合を悪くして、どこにも出ないでゐます。ところで、あんたはまた何だつてこんな遠國に來られたのかな？」

「囚人の一行と一緒に參りました。その中に私と密接な關係のあるものがあまして。」と、ネフリユードフは言つた。「實は、その人間のこと、他にもう一つお願いしたいことがあります。上つたわけでございます。」

將軍は茶を一口飲んで煙草の吸殻を孔雀石の灰皿の中に入れた。そして細い眼を、ぢつとネフリユードフに向け、眞面目に耳を濟ましてゐた。

ネフリユードフはマースロワのことを大體話して、皇帝陛下へ請願書を差し出してあることを言つた。

「なるほど。それで？」

「で、その女の運命をいづれかに決する通告書が、遅くとも今月中には、當地に届くことになつてを

ります……」

將軍は煙草にむせかへつて激しく咳きこみながら、テーブルの上の呼鈴を鳴らした。ネフリュードは一休みしなければならなかつた。

「で、その通告書が参りますまで、その女が當地に滞在することをお許し願ひたいのでございますが。」

制服姿の召使が這入つて來た。

「アンナはもう起きたか訊いて來てくれ。それからお茶をもう少し。」將軍は召使に命じて置いて、ネフリュードを促した。

「なるほど。もう一つの事件といふのは？」

「それは同じ一行中の或國事犯のことでございまして……」

「さうか。」將軍はひとり言のやうに言つて意味あり氣に頷いた。

「その男は非常に重態で——死にかゝつてゐるのですから、多分當地の病院に残されるやうになるでせう。それで、やはり國事犯の女囚が一人、その附添ひに残りたいと申してゐます。」

「その女囚は男の親戚か何かですか。」

「いや、さうぢやありません。しかし、都合によつては結婚してもいゝと言つてゐます。」

將軍は眼をばち／＼させて相手を見たが、黙つてしばらく煙草ばかり吹かしてゐた。

話が一通り済むと、將軍は一冊の本を取り上げて、しばらくとめくり、結婚に關する條文を探し出した。

「その女囚はどんな判決を受けました？」

「徒刑です。」

「では結婚したところで減刑にはなりません。」

「ですが……」

「お待ちなさい。自由な男と結婚したところで、刑期だけは服役しなきゃならないのです。ところでその女と男と、どちらが重い刑を受けてゐるのです？」

「どちらも徒刑です。」

「ぢや同罪だ。」と、將軍は笑ひながら、「男は病氣だから當地に残ることを許され、少しは寛大な取扱ひを受けることも出来ますが、女の方は、結婚したところで残ることは出来ません……」

「奥様は珈琲を召し上つていらつしやいます。」と、さつきの召使が不意に顔を出して報告した。將軍は頷いてまたつづけた。

「しかし——考して見ませう。名前は何といひますか、これへ書いて下さい。」

ネフリュードはマリヤたちの名前を書いて渡した。そして、病人に會はして貰へないだらうかと頼んだ。

「いや、それや私には出来ない相談だ。むろんあんたを疑つて許さないわけぢやない。そこで、い、ことを教へて上げませう、——あんたは、あの連中に非常に同情してゐられる。そして金も持つてゐられるやうだ。その金をお使ひになつたらどうです。この地方では何事も金次第ですよ。賄賂を受けたいけないと、その筋からは言つて寄越しますが、今の世の中では誰でもやつてゐるんですからね。下役のものほど欲しがつてゐますよ。三千マイルも遠く離れてゐるんだから何をしたつて、ばれることはないんです。こちらでは役人はまあ小さな帝王ですよ、はつはつは………」と言つて彼は笑ひ出した。「あんたも今まで國事犯に面會なさるには、やはり賄賂をおつかひになつたでせう？」

「え、さうです。」

「その事情がよくわかりますよ。——あんたは囚徒に面會したいからお金を出す。典獄だの護送兵だのは何しろ四十コペイカそこゝの日給で家族を養つてゐるんだから、出せば無論取りますよ。取らずにはゐられないのです。かりに私が、あんたが、つたとしても、また彼等だつたとしても、その通りにするに違ひないので……。しかし私は職責上、少しでも法文にはづれたことを自分に許しません……いや、こんな話は止しにして今度は都のお話を承はることにませうか。」

一八

將軍はネフリユードフを送り出しながら、

「ときに、どこにお泊りですか？ 宅の晩餐にいらつしやいませんか。時間は五時です。實は今、イギリスの旅行家が來てゐましてね、その人は流刑問題と、シベリヤの監獄とを研究調査してゐるのですが、やはり晩餐に來ることになつてゐますから、あなたもいらして下さい。いづれ、その時、お話ししの女囚や病人をどうするかといふ御返事をいたませう。多分誰か、付き添ひとして残ることになるでせう。」と言つた。

ネフリユードフは元氣よく馬車を走らせて郵便局へ行つた。

天井の低い郵便局の窓には、數名の局員が、詰めかけてゐる人々に應接してゐた。ネフリユードフが名前を言ふと、局員はかなり澤山の手紙類をわたしてくれた。彼はベンチに掛けて、それを調べ出した。

立派な封筒に赤い封印を施した一通の書留郵便があつたがそれはセレーニンからの手紙で公文書様のものが同封してあつた。彼は顔に血が上り鼓動が止るのを感じた。言ふまでもなく、カチュウシヤの請願に對する返事だつた。彼は大急ぎで眼を通して、ほつと救はれたやうな吐息を洩らした。

「ネフリユードフ君。君と會つて話した事は僕に非常な感銘を與へた。マースロワに對する君の解釋は正しい。僕も事件を慎重に調査して、驚くべき不法が彼女に對して行はれたことを發見した。幸ひ、僕もこの事件に微力を盡すことが出來たので、減刑命令書の寫しを同封して送ることにする。(君の叔母上、カテリーナ夫人から君の宿所を聞いた)命令書の原本は、

彼女が判決前に收監されてゐた監獄に送られたから、恐らく、そこからシベリヤ地方廳へ廻送されるだらう。以上、取りあへず、この吉報をお傳へする。セレーニン」

命令書はつぎの意味のものである。

「皇帝陛下には、マースロワの請願に對し格別の御思召を以て、前判決の徒刑を破棄し、シベリヤの餘り遠隔ならざる地方に移住せしむべき御沙汰ありたり。」

たしかに吉報に相違なかつた。ネフリードフがカチュウシヤのため、また彼自身のために願つてゐたことが實現されたのである。かくして彼女の境遇が變れば、それに従つて、今までとは違つた複雑な關係が生じて来る。即ち、マースロワが徒刑囚である間は、彼女との結婚といふことは單なる空想で、たゞ彼女の苦役を慰めるといふ以外に何の意味もなかつたのであるが、かうなれば彼等の同棲を妨げるものは何一つなくなつたわけである。ところが、ネフリードフはそれに對する準備をしてゐなかつた。のみならず彼女とシモンソンとの關係はどうなのだらうか？ 昨日の彼女の言葉は、どう解釋したらいいのだらうか？ また、彼女がシモンソンとの結婚を承諾したら？ それはいゝことか悪いことか？ これらの問題は容易に解けなかつた。で、考へることを止めてしまつた。

「後で何とか解決がくだらう。今はそんなことを考へるよりも早く彼女に會つてこの吉報を傳へ、釋放してやらなきや。」

彼は命令書の寫しだけで、それが出来ると思つてゐたので、局を出ると直ぐに、馬車を監獄に走らせた。

彼は監獄訪問の許可を得てゐなかつたが、これまでの經驗によれば、上官の許さないことを下役がしてくれることもあるので、とにかく當つて見ようと思つた。首尾よく彼女に會へれば吉報を傳へて釋放の手續きを執ることにし、ついでに、クルイリツォーフの安否も訊き、今朝將軍の言つたことを彼とマリヤとに知らせてやらうと思つた。

典獄は脊の高い、堂々たる風采の男で、口髭や頬髭が口の端へまくれこんでゐた。彼は非常に嚴格な態度でネフリードフを迎へ、長官の特別命令がなければ絶対に面會を許可しないと云つた。市町の監獄では今まで許されたと話すと、

「そんなこともあるでせう。が、私は許可しません。」と、きつぱり斷つたが、その語調には、「君たち都會人はわれわれを驚かし狼狽させようと思つてゐるらしいが、シベリヤにあるわれわれも、法のいかなるものであるかを知つてゐる。」といふ意味が含んでゐた。

皇帝陛下直屬の官廳からの命令書の寫しもこの典獄には何等の利目もなかつた。飽くまでも許さないの一點張りだつた。この寫しだけで釋放することが出来はしないと云ふと、輕蔑したやうに笑つて、直接上官の命令がない限り絶対に駄目だと言つた。で、結局、彼が應じてくれたことは、マースロワに減刑命令書が來たのを傳へること、上官から命令があれば一時間内に釋放すること、その二點だけだつた。クルイリツォーフの安否に就いても、そんな囚徒があるかどうかも語る自由を持たない

と彼は言つた。

典獄の厳格なのは、主として、定員の二倍から收容したため、獄内にチブスが流行してゐるからだつた。ネフリユードフの馭者が歸途話したところに依ると、一日に二十名くらゐの囚徒が斃れてゐるといふことだつた。

一九

ネフリユードフは監獄での不首尾を氣にもしないで相變らず勇み立ち、その足で地方廳を訪問し、命令書の原本が到着したかどうかを調べた。しかし、着いてゐなかつたので更に宿に引き返して、その頭末を、セレーニンと辯護士フナーリンとに報告することにした。書き終つて時計を見ると、もう將軍邸の晩餐に列席しなければならぬ時刻になつてゐた。

途中でネフリユードフは、また、カチュウシヤが減刑命令書を受けとつたらどう思ふだらうか。今度はどこで暮すやうになるだらうか、同棲生活をどんなふうにしたらよからうか。シモンソンはどうなるか。彼と彼女の内心に生じたい、意味の變化をあらためて思つたり、過去の生活の回想に耽つたりした。

「いや、こんなことは今は忘れなきやいけない。時が来れば自然にわかるのだ。」
カチュウシヤのことを頭から一掃して、今度は將軍に話すことを考へはじめた。

將軍邸の晩餐は、いはゆる上流社會に共通の贅澤なもので、ネフリユードフには無論珍らしくはなかつたが、何しろ、數ヶ月も贅澤どころか、あらゆる日常生活の不便を忍び通して来た後なので、すべてが彼には楽しかつた。

夫人はニコラス一世陛下に仕へたこともあるといふ話で、ロシア語よりもフランス語の方が上手だつた。いつもきちんと姿勢を正して、手は動かしても肘を腰から離すことはなかつた。夫に對しては、靜かな、やゝ遠慮した態度だつたが、客には、多少相手によつて變つても大體、非常に丁寧親切だつた。殊に、ネフリユードフは、身内のものゝやうな待遇をされたので、今更のやうに自分が公爵であることに氣がついた。彼女はネフリユードフを正直な、しかしシベリヤまでもやつて来るくらゐだから一風變つた人間だと思つてゐるらしかつた。

ネフリユードフは久しぶりに、自分が嘗て接したやうな學問のある上流階級の人々の仲間入りをして、たまらなく愉快になつた。と同時に、この數ヶ月間にあつたことは一切夢で、今自分は現實に眼ざめたのではなからうかといふ氣さへするのだつた。

席には、將軍夫妻、その娘夫妻、副官、イギリスの旅行家、遠方から来た知事、金鑛業の商人などがあつたが、いづれも、ネフリユードフにとつて氣持のいい人々だつた。

が、中でも一番好きだつたのは、將軍の娘夫妻だつた。その若い妻は清楚な感じのする無邪氣な女で、子供二人を夢中になつて可愛がつてゐた。夫といふのは、頗る謙遜なモスクワ大學出の自由思想

家で、或官廳に奉職し統計事務を執つてゐたが、かたはら士人の研究に没頭しその滅亡救済の方法を考へてゐた。彼等は永らく親たちと争つた末に戀愛結婚をしたのだつた。

軍服姿の將軍は挨拶を済ましてから、ネフリユードフにあれからなにをしてゐたかと訊いた。そこで郵便局へ行つてマースロワ滅刑の通知にせつしたことをはなして、監獄訪問の許可を得たいと言つた。將軍は、この席上で事務の話をするのは不愉快なので、ちよつと眉をしかめたきり、返事をしなかつた。

「ウォツカはいかゞですか？」將軍は傍にやつて來たイギリス人に聲をかけた。

イギリス人は、ぐつとグラスを乾してから、今日は教會と工場を參觀して來たが、監獄も拜見したいと言つた。

「それや都合がいゝ。」と、將軍はネフリユードフの方を向いて、「あんたも一緒に行かれたらいいでせう。——許可證を書いてお上げ。」と、副官に命じた。

「いついらつしやいますか？」ネフリユードフは訊いた。

「今晚にしませう。みんな監房に這入つてゐるでせうし、何等の用意がしてないでせうから、ありのまゝが見られます。」

「異彩を放つてるところを見ようといふんですな。それもいゝでせう。私も監獄に就いては種々執筆したこともあるが、一向に誰も注意してくれません。」と、將軍は言つた。

食事が終り、珈琲にうつると、ネフリユードフは皆と興味の盡きない話を交した。おいしい御馳走、上等の酒、その後で、ふつくらした安樂椅子に凭れて珈琲をすゝりながら、陽氣な教養のある人と話をしてゐると、彼は益々うれしくなつた。そこへ、夫人と地方知事とがイギリス人の所望によつてピアノに向ひよく練習して置いたベートーヴェンの第五シムフォニイを弾きはじめた。——ネフリユードフは自分がどれほど善良な人間だつたかを今更のやうに氣づいたかのやうに、陶然とした自己満足の氣持を味はつた。

グラランドピアノも素晴らしい立派だつたし、演奏ぶりもなか／＼見事だつた。少くともこの第五シムフォニイの好きな彼にはさう思はれた。美しいアンダンテ、——それに耳を澄ましてゐると、ネフリユードフは鼻の奥がむづ痒くなるのを感じると同時に、自分の美しい行爲を思ひ出して我ながら感激した。

ネフリユードフが久しぶりに味はつた樂しみに對してお禮を述べ、暇を告げて歸らうとしてゐるところへ、將軍の娘の、若い妻が、さも決心したといふ顔つきをして、やゝ顔を赧らめながら言つた。

「さつき、あなたは子供のことをお聞きになりましたわね。お眼にかけませうか？」

「まあ、この子は誰でも自分の子を見たがつてると思つてるのね。お止しよ、公爵は、そんなことに

興味をお持ちではないよ。」

母親は娘の無作法に、にこ／＼しながら言った。

「いや、それは違ひます。僕は子供が大好きです。」ネフリュードフは、この溢れるばかりの母性愛に打たれて、「どうか見せていたげませんか。」と言った。

「おやく、公爵を連れて自分の赤ん坊を見せに行くんだからなあ、はっはっは……」と將軍は後を見送つて、カルタ席の方から大聲を浴せかけた。「まあ、それもいゝだらう……」

子供をどう評されるだらうかと、わく／＼しながら、若い夫人は先に立つて奥の部屋に這入つて行つた。ランプが一つついて二つの寢臺が並んでゐた。その寢臺の間に乳母が、白いケープを掛けて坐つてゐたが、彼等の姿を見ると、黙つて立つてお辭儀をした。

若い母親は第一の寢臺を覗きこんだ。そこには、小さな口を開いて、長い縮れた髪を枕の上まで垂らした二つくらゐの女の子が、すやく／＼と眠つてゐた。

「これがカーチャですよ。」母親は言つて蒲團を直してやつた。小さな白い踵が、その下に突き出てゐた。「可愛いぢやございせんか。二つなんでございますよ。」

「ほんとに可愛い！」

「それから、こちらがワシユークと申します。まるで似てませんわね。シベリヤつ子でせう？」

「立派な坊ちやんですね。」

ネフリュードフは腹を下にして眠つてゐる子を見守りながら、かう言つた。

「さうですわね。」と、若い母親は意味のこもつた微笑を浮べて應じた。

ネフリュードフは、その時、ふと、足にからまる鎖、剃りとられた頭などと一緒に、瀕死のクルイリツォーフ、カチュウシヤの現在と過去、――いろいろなことを思ひ出した。そしてこの場の光景に一種の羨ましさを感じ、これが純真にして洗練された幸福のやうな気がして來た。

幾度も子供を賞めてから、そして、その賞め言葉に貪るやうに聞き惚れてゐる母親を幾分満足させてから、漸くネフリュードフは、客間に戻つて來た。そこでは、例のイギリス人が、一緒に監獄訪問に出懸けるつもりで待つてゐた。

空模様は一變して、綿のやうな雪が降りしきつて、既に道路、屋根、庭の樹々、馬車などは眞白になつてゐた。イギリス人は別に馬車を持つてゐたので、別れ／＼に乗つて、不愉快な義務を果すつもりで、そろ／＼と出懸けた。

一一一

監獄の正面は、他が清らかな白い雪に蔽はれてゐるのに、窓ばかり光つてゐて、朝よりも寧ろ陰鬱な気がした。

例の堂々とした典獄があらはれて、ランプの灯に照らして將軍の許可證を讀んだ。そして、ちよつ

と驚いたらしく首を縮めたが、命令だから仕方がないと諦めて、イギリス人と、ネフリユードフとの不意の訪問者を案内することになった。

階段を登つて事務室に行くと、典獄は二人に椅子をすゝめて、それらの用件を聞き、まづネフリユードフがマースロワに面會したいといふと、直ぐに看守に命じて彼女を呼びにやつた。そして、イギリス人の方にかゝつた。

「この監獄は何人收容されますか？ 現在何人收容されてゐますか？ 男は何名？ 女は何名？ 子供は何名？ 徒刑囚は？ 流刑囚は？ 病囚は？」

イギリスの監獄研究家はネフリユードフに通譯して貰つて、つき／＼にいろんな質問を連發した。ネフリユードフは、カチュウシヤとの面會のことばかり考へてゐて、イギリス人の質問も典獄の答辯も、いゝ加減な、うはの空で通譯してゐた。と、事務室の扉が開いて、いつもの通り、まつさきに看守、つゞいて、カチュウシヤが這入つて來た。頭巾をまぶかにかぶつてゐる獄衣姿が今更のやうに眼についた。

ネフリユードフは急に重苦しい氣持に蹴落された。

「僕は生きたい。僕は家庭が欲しい。子供が欲しい。人間としての生活がしたい！」

カチュウシヤが元氣よく近寄つた瞬間に、彼の腦裏には、こんな考へが閃めいた。

彼の方から立ち上つて彼女を迎へた。彼女の顔は固くつて不快だつた。いつぞや彼を責めた時の表

情とそつくりのやうに彼には思はれた。赤くなつたり、青くなつたりして、體を神經的に動かして上着の端を引つぱりながら、彼女はちらとネフリユードフの方を見、また直ぐに眼を伏せた。

「お前、滅刑命書が届いたことを聞いたかい？」

「え、看守さんから聞きました。」

「だから、原本が着き次第、どこにでも移ることが出来るよ。僕たちはよく考へて……」

と、彼女は慌しくネフリユードフを遮つた。

「何も考へることはありませんわ。私、シモンソンさんの行くところへ、ついて参りますわ。」

興奮してゐながらも彼女はきつと眼を上げて男を見つめながら、それだけの言葉を、口早に、そしてはつきり言つてのけた。

「さうか！」

「え、ネフリユードフ様、あの人は私と一緒に暮りたいのです……」と言ひかけて、彼女は、急にどきまぎして言ひ直した。「いえ、私を傍に置きたいのです。私としては、それ以上の望みはございませんわ。それを幸福と思はなければなりません。私としては、それ以上……」

カチュウシヤの言葉を聞きながら、ネフリユードフは考へた。

「どちらだらう？ —— 彼女はシモンソンと戀愛關係になつたために、僕の捧げてゐる犠牲的行爲を容れないのか？ それとも、やはり僕を愛してゐるがために、つまり、このネフリユードフのために、

自己を犠牲にして、シモンソンと一生を共にし、永久に埋もれてしまふつもりなのか？」

ネフリュードは氣はづかしくて顔が赭くなつた。

「で、お前、あの男を愛してるのかい？」

「愛してるだの、愛してないだの、そんなこと何でせう？ 私、みんな棄て、しまひましたわ。ただ、シモンソンさんは特別な方なんです。」

「それや無論、立派な男だ。だから僕は……」

カチュウシヤはまた彼の言葉を遮つた。彼に言ひ過ぎられてもいけないし、といつて、自分の言ふことだけは言はなければ、といふ風だつた。

「いゝえ、ネフリュード様、私がおあなたのお氣に召さないことをしてるんですしたら、どうぞお許し下さい、お願いでございます。だつて、かうなるより他ありませんもの。それに、あなたもお生きにならなきやありませんもの。」

「つい先刻ネフリュードが自分自身に言つたことを彼女はこゝで言ふのだつた。しかし、今、彼はさうは思つてゐなかつた。全く別の變つたことを思つてゐた。それで恥づかしくなつたばかりでなく、すべてを彼女と共に失はねばならぬことが悲しかつた。

「かうならうとは思はなかつたよ。」

「こんなところで御苦勞なさるのは、もう澤山でございますわ。」といつて彼女はにつこりした。

「いや、別に苦勞はしないよ、僕には爲になつたし、出来ることなら、今後もお前のために盡したいのだ。」

「私たちは……」彼女は、その「私たち」と言つてネフリュードを見た。「私たちは、何も要りません。随分していたいたんですもの。これが、あなたのためでなかつたら……」

彼女は、かう言ひかけたが、聲が震へて言へなくなつてしまつた。

「お前は、とにかく、僕にお禮を言ふわけはないよ……」

「え、神様が私たちの勘定を下さいますわね。」

彼女の黒い眼には涙が一杯たまって光り出した。

「何ていゝ女だらう！」

「何が、女？」涙の中から彼女は言つた。悲痛な微笑が顔を明るくした。

イギリス人は待ちくたびれたらしく、「もういゝですか。」と、その時、聲をかけた。

「すぐです。」

ネフリュードは大急ぎで、クルイリツォーフの容態を訊いた。

カチュウシヤは無理に元氣を出して、知つてゐるだけのことを話した。クルイリツォーフは途中で非常に衰弱したので入院することになった。マリヤは心配しきつて看護婦として残りたいと願つたが許されなかつたといふことである。

「失禮して宜しいでせうか。」

彼女はイギリス人が待つてゐるのを氣にしてかう言つた。

「まだ、さやうならとは言はないよ。そのうち會ふことにしよう。」

ネフリユードフは手を差し出して言つた。

「御免なさい……」

彼女は聞きとれないくらゐの聲で言つた。眼と眼とが合つた。ネフリユードフは、その不思議な眼差しと、悲しい微笑を含んで「御免なさい」と言つた語調の中に、彼女がシモンソンの結婚を決意した假定理由のうち後者が眞實であることを、明らかに認めた。つまり、彼女はネフリユードフを愛してゐる、而も彼と一緒にゐるは彼の一生を汚すことになる。だからシモンソンと同棲して彼に自由な生活をさせようといふのだ。彼女は思ひ通りになつたので、その點は嬉しかつたが、さすがに彼と別れるのが苦しかつたのである。

彼女は握手して、くるりと身を翻して部屋を出て行つた。

一一一

ネフリユードフとイギリス人と典獄とは、看守に案内せられて監房を見てまはつた。臭氣の烈しく鼻を衝く廊下を通つて行くと、驚いたことに、そこには二人の囚徒が、床に放尿してゐるのを見た。

第一の監房には、徒刑囚が約七十人、皆、頭と頭を突き合せ、腹と腹とをくつ、けて寝てゐたが、彼等が這入つて行くと一齊に跳ね起きた。が、高い熱に惱んでゐるらしい眞赤な顔をした若い男と、のべつに呻き聲をあげてゐる老人とだけは起きなかつた。

イギリス人は彼等と少し話して見たいから通譯を頼むとネフリユードフに言つた。彼は單にシベリヤに於ける流刑問題と監獄とを研究視察するばかりでなく、信仰と贖罪とに依る救ひを傳道する目的をも持つてゐた。

「話してやつて下さい。——キリストは彼等を憐れみ、彼等を愛し、彼等の身代りになつて十字架に上られました。このことを信じれば救はれるのであります。」

囚徒たちは黙つたまゝ、両手を垂れて聞いてゐた。

「この本にはそのことがすつかり書いてあります。文字の讀めるものは？」

二十幾人讀めるものがゐた。そこで、イギリス人は手提袋の中から五六冊の聖書を取り出した。と、節くれ立つた逞ましい腕が、あつちからもこつちからも、によきくと出た。彼は二冊だけ與へて次の監房に移つた。

第二の監房でも大體同じで、やはり三人ばかりの病人を除いては皆起きたので、彼は話をして、同じく二冊の聖書を與へた。

第三の監房には病人が四人ゐた。イギリス人が何故病人だけを一室に集めないのかと聞くと、本人

がそれを厭がるのだと典獄は説明した。それに、傳染病でもなし、監獄醫もよく巡回して必要だけの手當はしてあるといふことだつた。

「へえ、醫者のやつ、もう二週間も足を見せねえぜ。」といふ聲がした。

典獄は何とも言はないで、次へ案内した。どこへ行つても、囚徒はすべて、凍えてゐるもの、飢ゑてゐるもの、怠けてゐるもの、病氣になつてゐるもの、などばかりが野獸のやうな生活をしてゐるのだつた。イギリス人は豫定の冊數だけ與へると、黙々として、たゞ歩いた。陰惨な光景、殊に息づまるやうな臭氣に、さすがの彼も辟易してしまつたらしく、終りには、典獄から何を説明されても、たゞ「なるほど」をくり返すだけだつた。

ネフリーユードフも今更、自分だけ歸るとも言ひ出せないで、やはり同じ疲勞と絶望とを感じながら、まるで夢遊病者のやうに、後をついて歩いた。

二三

流刑囚の或監房には、ネフリーユードフが今日渡し場で出會つた風變りな年寄りが這入つてゐたので彼はびつくりした。

老人は相變らず肩や膝の抜けた、きたないシャツとズボンを着け、はだしのまゝ、寢臺の横に坐つて、彼等の一行を、鋭い眼つきで睨んでゐた。瘦せ衰へた體は、見るも痛々しかつたが、顔だけは筏

の上で見た時よりも更に嚴肅な生氣に充ちてゐた。

この監房でも典獄たちが這入つて行くと、皆起立したが、この老人だけは動かなかつたばかりでなく、眼を輝やかし眉をしかめた。

「起立！」と、典獄は呶鳴りつけた。

老人は、にやりとしたきりで立たうとしなかつた。

「お前の手下は前に立つてるぢやねえか。わしはお前の手下ぢやねえよ……」

「何だと！」典獄は嚇しつけて一步にじり寄つた。

「私はこの男を知つてゐます。どうして收監されたんです？」ネフリーユードフはあわて、口を出した。

「何、旅行免狀を持つてゐないので警察から送つて寄越すんです。こんなのは寄越してくれるなと言つてあるんですがね。」典獄はいま／＼しさうに老人を睨み据ゑながらかう言つた。

「ぢや、お前も反基督軍の一人か。」老人はネフリーユードフに聲をかけた。

「いや、僕は參觀者だよ。」

「なに、反基督の連中が人間を虐げてゐるのを參觀に来たつてんだな。うん、よく見る。人間を掴へてこんな檻の中へ詰めこんでるぢやねえか。人間は額に汗してパンを食はなきやならねえもんだ。それに仕事もさせねえで、豚かなんぞのやうに飼つてるんだから、みんな畜生になつちまふなア當りめ

えだよ。」

「何を話してゐるんですか。」と、イギリス人が訊いた。

人を監禁するのは不都合だと言つてゐるのですとネフリュードフは通譯した。

「法律を守らないものをどう處置していか、この老人の意見を聞いて見てくれませんか。」

それを通譯して聞かすと、老人は齒竝を見せて嘲るやうに笑つた。

「法律か？ はじめに一切の土地、一切の權利を人民の手から奪つて、それに逆らふものを皆殺しにして置き、後に、奪ふなかれ、殺すなかれといふ法律を作つたんぢやねえか。もつと前に法律を作りやよかつたんだ。」

ネフリュードフが通譯すると、イギリス人は微笑した。

「なるほど。それにしても、現在、強盜や殺人をどうすればいい、か聞いて下さい。」

老人はこの質問を聞くと、険しい顔つきをして、

「まづお前自身、反基督の印を棄て、見ろ、さうすれや強盜も殺人もなくなつちまふよ、と言つてやつてくれ。」

「この男は氣が觸れてる。」と言つて、イギリス人は監房を出た。

「自分のしなきやならんことをしろ。他人のことはうつつちやつて置くが、誰を罰し誰を許すかつてことは神様の御思召にあることで、人間にやわからねえんだ。さあ、歸れ。」老人は、そこにぐ

づぐづしてゐるネフリュードフを尻目にかけて更に附け加へた。「反基督軍の連中が人間を餌にして餌を飼つてゐるのがよくわかつた。さあ、歸つたく。」

廊下に出ると、イギリス人は、開けつばなしになつてゐる或扉の前に立つて典獄に何か訊いてゐた。

「これは死體室です。」

「ほう。」と言つて、イギリス人は中に這入つた。ネフリュードフもつゞいた。

別にひろくもない普通の監房で、壁に小さなランプが一つともつて、四つの死體を灰白く照らしてゐた。

手前から三番目の男の死體が藤色のものを着けてゐるのにネフリュードフは眼をとめて、はつと思つた。この色に彼は何かの記憶があつたからである。

彼は近寄つて覗きこんだ。美しい鼻、高く白い額、縮れた髪——それは見慣れた顔ではあつたが、急には自分の眼を信じる事が出来なかつた。彼は昨日、この顔が怒つたり、苦しんだりしてゐるのを見た。それに今は、微動もしないで凄いほどの美しさを保つてゐる……。さうだ、クルイリツォーフだつた。少くともクルイリツォーフの残された物質的存在だつた。

「何故彼は苦しんでゐたのか？ 何故生きてゐたのか？ 今、それが彼にはわかつた。さうか？」

ネフリュードフは、かう考へたが、答へはない、死の他には何もものもないやうに思はれた。そして

暗い氣持に襲はれた。

ネフリユードフは黙つてイギリス人に別れて、今夜見聞したことを一人で熟考しなければならぬと考へながら宿に馬車を急がせた。

二四

ネフリユードフは寢臺には這入らないで、いつまでも部屋中をぐる／＼歩きまはつてゐた。カチュウシヤの一身に就いて彼のしなければならぬことは既に終つてゐた。彼は今となつては不要の人間である。さう思ふと悲しく恥づかしかつた。

しかし、今一つの彼の仕事は、まだ終つてゐなかつた。いや、終つてゐないどころではなく、彼を益々惱まし、彼の活動を益々要求してゐるのである。數ヶ月の間親しく見聞した末に、漸くわかつて來た恐しい罪惡（この罪惡はクルイツォーフをも殺してしまつた）が、今や地上を支配して勝利の凱歌を奏しつゝある。而も彼には、これを打ち倒すことは無論、打ち倒す方法を知ることさへ出來なかつた。彼の腦裏には、無情極まる將軍や檢事や典獄などの手に依つて牢獄に監禁されてゐる數百數十の虐げられた人々の姿が浮んで來た。つゞいて、官吏を罵つて狂人扱ひをされてゐる不思議な老人の姿、クイリツォーフの美しい蠟細工のやうな顔などが浮んで來た。と、またしても、一體かう考へる自分が狂人なのか、それとも、かゝる罪惡を當然のことと思つてゐる人々が狂人なのか、といふ疑問が、新しい力を以て迫つて來た。

歩き疲れ、考へ疲れたネフリユードフは、ランプの傍の長椅子に腰を下して、イギリス人から記念に贈られた聖書を、ばら／＼とめくつた。

「一切の解答はこの中にあると言はれてゐる。」と思ひながら偶然に眼についたところを讀みはじめた。馬太傳第十八章である。

「その時、弟子達、イエスに來りて曰ひけるは、天國に於いて大なる者は誰ぞや。イエス、嬰兒を呼び之を彼等の間に立て、而して曰ひけるは、われまことに爾等に告げん、若し心を改めて嬰兒の如くならずば、天國に入ることを得じ、されば、この嬰兒の如く自ら謙遜する者は、これ天國に於いて大なる者なり。（第一節——第四節）」

「たしかにさうである」と、ネフリユードフは思った。彼自身も、自己を謙遜した時にのみ、生の平和と歡喜とを味はつたからである。そこで更に讀みつづけた。

「またわが名のために、かくの如き一人の嬰兒を接くる者は我を接くるなり。されど我を信するこの嬰兒の一人を躓かす者は、礮臼をその頸にかけられて、海の深みに沈められん方なほ勝るべし。（同章、第五節——第六節）」

「この接くる者といふのは何だらう？ どこへ接くるのか？ わが名のためといふ意味は？」彼は、これ等の言葉から何も得られないので考へた。

「それ人の子は亡びたる者を尋ねて之を救はんために來れり。爾等如何に思ふか。人もし百匹の羊あらんに、その一匹迷はゞ、九十九匹を捨て置きて、迷ひし一匹を尋ねざるか？もし尋ねて之に會はゞ、我まことに爾等に告げん、彼は迷はざる九十九匹の羊よりも、尙その一匹を喜ばん。かくの如くこの小兒の一人の亡ぶるは、天にゐます爾等の父の御旨に非ず。」
(同章、第十一節—第十四節)

「さうだ、彼等の亡びるのは神の御心ではないのだ。而もこゝでは幾百幾千のものが亡びつゝあるのに、それを救ふことは出來ないのだ。」と彼は考へた。

「その時、ペテロ、彼に來りて曰ひけるは、主よ、幾次までわが兄弟のわれに罪を犯すを赦すべきか、七次までか？ イエス、彼に曰ひけるは、爾に七次とは言はじ、七次を七十倍せよ。このゆゑに、天國は、その臣下と會計とを調べんとする王の如し。調べ始めし時、千萬金の負債ある者を彼に曳き來りしに、償ひ方なかりければ、王は彼に命じて、その身、その妻、子供等、あらゆる所有を皆賣りて償へと曰へり。そのとき、臣下俯伏し拜して曰ひけるは、王よ、われを赦し給へ、さらば皆償ふべし。王はその臣下を憐れみて、之を釋き、その負債を免したり。然るにその臣下は出でて己れより銀一百の負債ある友に逢ひければ、之を捕へ、喉を抑へて、負債を返せと曰へり。その友、足下に俯伏して願ひ曰ひけるは、われを赦し給へ、皆償ふべし。然るに、これを肯かずして、往き、その負債を償ふまで彼を獄に入

れぬ。友、その爲せる事を見て、甚だ哀しみ、往きてこの事を王に告げたり。その時、王、彼を呼びて曰ひけるは、悪しき臣よ、爾、われに願ひしに因りて、われ爾の負債を悉く免したり。わが爾を憐れみし如く、爾も亦その友を憐れむべきにあらずや。(同章、第二十一節—第三十三節)。

「これだけのことか？」ネフリユードフはこゝまで讀んで考へた。内心の聲が「さうだ。これが全部だ、これ以外に何も無い」と答へた。

ネフリユードフにも、精神生活を送つてゐる者に屢々あるやうなことが起つた。それはつまり、初めは、空虚な、お笑草にしか過ぎないと思つてゐた思想が、生活の經驗に依つて急に單純確實な眞理になつてしまつたのである。すなはち、この罪惡——人間が人間を虐げつゝあるといふ罪惡を救ふ道は、彼等が常に彼等自身を神の前の罪人であると認め、したがつて他の人々を罰したり矯正したりし得るものではないといふことを悟ることにある。この思想が彼にはつきりわかつたのである。また、監獄その他で目撃したあらゆる恐い罪惡や、その罪惡を行ふ人々の平然とした自信などは皆、人間として不可能なこと、つまり、自ら惡人でありながら他の惡を直さうとする不可能事を、敢てしようとするから生じたのであることも明らかになつた。惡が惡を、而も器械的方法に依つて矯正しようとする、その結果は、貪慾きはまる人々が他人の懲罰と矯正とを職業にして、自ら墮落すると同時に他をも絶えず墮落せしめるやうになるのである。

今、ネフリユードフには、彼の見聞した慘事の一切が何に依つて生じたか、またそれを根絶せしめるにはいかによればよいか、明白になつた。今までどうしても發見し得なかつた解答、實に、それはヤリストがベテロに與へた言葉に他ならないのである。すなはち、神の前に罪なきものはゐないのだから、従つて他人を懲罰し矯正し得るものはゐないのだから、われ／＼すべての人々を、常に、無限に赦さなければならぬのである。

これは一見非常に簡單であるが、理論としてのみならず實際としても、これを以て問題を解決し得るとネフリユードフは思つた。「では惡漢をいかに處置するか？ 罰しないで放任して置いていゝのか？」といふ異論がこの際生じるに相違ないが、それに對しても彼は最早狼狽しなかつた。懲罰なるものが犯罪を減じ、或ひは犯罪者を矯正するといふことが證明されるならば、この異論には意味がある。ところが實際に於いては、それが證明されないばかりか、却つてその反證があがつてゐる以上、また他人を矯正する權能を持つたものがゐないといふことが明白になつた以上、こんな無用、有害、殘忍、苛酷なことを廢止してしまふのが最も合理的な唯一の方法である。過去幾世紀の間、いはゆる犯罪者は處罰されて來たが、果して犯罪は絶えてしまつたか？ 否、益々増加したのである、一方で刑罰を受けたために墮落したその罪人に依つて、また他方、他人を裁き且つ罰する裁判官、檢事、獄吏等に依つて。故に、ネフリユードフは考へた。——この社會及び一般秩序が保たれてゐるのは、決して彼等法官が存在してゐるからではなく、人間が、さうした罪を持ちながらも、互ひに憐れみ合ひ愛し合ふからである。

ネフリユードフは、この考への確證を聖書の中に見出さうとして最初から讀みはじめた。そして有名な山上垂訓の中に、實行しなへすれば神の國が出現するに相違ない五ヶ條の戒律を發見した。

第一（馬太傳第五章第二十一節——二十六節）は、人は同胞を殺してはならない、怒つてもならない。何人をも馬鹿と思つてはならない。誰かと争つたら仲直りして神に祈らなければならぬ。

第二（同章第二十七節——三十二章）は、人は姦通してはならない、女的美を見て心を動かしてはならない。一旦女と結合したならば永久不變でなければならぬ。

第三（同章第三十三節——三十七節）は、人は誓つてはならない。

第四（同章第三十八節——四十二節）は、人は眼に眼を以て報いてはならない。一方の頬を打たれたら他方の頬をも向けてやらねばならない。

第五（同章第四十三節——四十八節）は、人は敵を憎んだり争つたりしてはいけぬ、敵を愛し、助け仕へてやらなければならぬ。

ネフリユードフは、若し人間が、この戒律に従つたならば、その生活がどんなものになるだらうかを考へた。と、久しくおぼえなかつた大きな喜びが胸に迫つて來た。困憊苦惱をつゞけてゐるうちに不意に安易自由を見出したやうな喜びだつた。

その夜、ネフリユードフは眠らなかつた。

「こゝに自分のしなければならぬ仕事があるのだ。やつと一つの仕事が終わったかと思ふと、もう次の仕事が待っている。」

ネフリードフには全然新しい生活が始まった。新しい生活条件に這入ったからでなく、その夜と来彼のこと、すべて、今までとはすっかり違った新しい意義を持つてゐたからである。この新生活はどんな結末になるであらうか、それは時が示してくれるであらう。

カチユウシヤ 終

昭和四年五月一日印刷
昭和四年五月三日發行

版權

所有

世界大衆文學全集第十六卷
カチユウシヤ

譯者 近松秋江

發行者 山本美

東京市芝區愛宕下町四ノ六

印刷者 竹内喜太郎

東京市牛込區榎町七番地

發兌

東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

改造社

振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)自一一二一
至一一二四番

(刷印社會式株刷印清日)

5
6

5

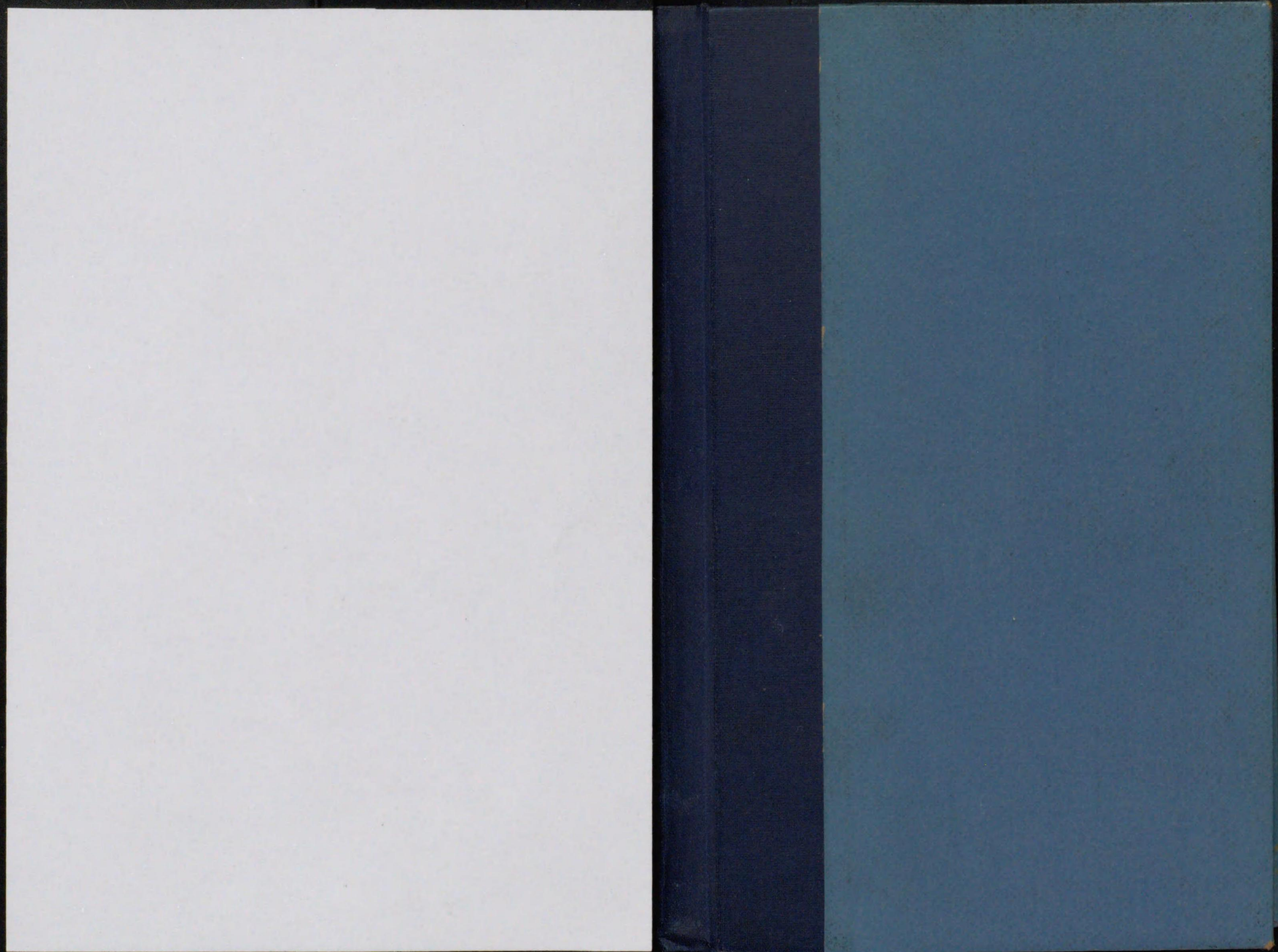
6

106

569

61

+

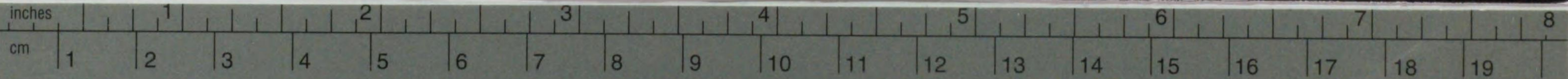


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

